

大東亞海制壓戰

ジャバ沖海戦

昭和十七年二月三日、ジャバ島の敵主要航空根據地であるスラバヤ、マラン等を大舉空襲して、一舉に敵機八十五機を屠つたわが海軍航空部隊は、息つく暇もなく翌四日出動して好餌を索めた。

ジャバ海のカンゲアン上空に來ると、同島の南方三十海里の洋上を舳艫相ふくんで游弋してゐる米蘭聯合艦隊を發見し、わが海軍は雀躍りして喜んだ。

眼を凝せば、その艦列の中にはわが海軍が必死となつて探し求めてゐたマニラ灣脱出の米艦マーブルヘッドやオーガスタもゐる。さらにオランダ艦隊旗艦の重任を交互につとめた蘭國巡洋艦ジャバ、スマトラの兩艦もゐる。同じく巡洋艦デ・トロンプもゐる。

そのほか、巡洋艦驅逐艦等を合せて相當の大艦隊である。正にわが海軍にとつての絶好の好餌だ。

見敵必戦は英國艦隊の傳統的精神であるが、わが帝國海軍は積極的に索敵必殺がその傳統的精神である。この好敵を前にして逃してたまるか。

敵艦は、既にわが海鷲の猛威を十分に知つてゐるので狼狽その極に達し、早くも三十ノットの漣力を出して逃げ出す軍艦もあつたが、しかし何れも猛烈に高角砲を放つた。

わが海鷲は、物凄い彈幕を物ともせず、秩序整然としてこれに襲ひかゝつた。世界無比の威力を有する魚雷と爆彈は、次ぎ／＼と投下される。まるで演習でもしてゐるやうな落着き拂つた戦闘ぶりだ。といふのは、既に敵を呑んでかゝつてゐるからだ。

忽ち、巡洋艦ジャバ型一隻（スマトラか）は、胴腹に魚雷の命中を受け、瞬間にして海底に没し去つた。鮮かな轟沈だ。つゞいて蘭國巡洋艦デ・トロンプ（乙級巡洋艦）が撃沈される。米艦オーガスタは、大火災を起して艦列を離れ、ジャバ島の方面へ全速力で逃げ出した。あの火災では再起不能であらう。著者は、このオーガスタが、支那事變におけるわが軍の行動を監視するやうな態度で、傲然として上海港外の吳淞沖に碇泊してゐるのを見て、忌々しくてたまらなかつたが、この快報に接した時、「ざまを見れ」といふ氣がして、一時に留飲が下つた。

米艦マープルヘッドもまた、わが猛撃のために大きく傾斜しながら逃げてゆく。つゞいて蘭國巡洋艦一隻が、これまた大火災を起して艦列を離れた。もはや敵の陣形は支離滅裂となつた。

わが一機は、繰り返し／＼敵艦を猛襲してゐるうち、無念や敵彈を受けて火達磨となり、猛然と

敵艦に突込んで壯烈な自爆を遂げた。

この偉大な戦果を挙げたわが海鷲は、歸らぬ僚機を弔ひながら悠々と基地に引きあげた。

この海戦によつて、オランダの主力艦は全滅し、米國艦隊もまたその戦力の上に一大打撃を受けたものである。彼等が大膽にもその根據地を出港して、わが空軍制壓下の海上に現はれたのは、さきに米國大統領ルーズヴェルトが、マカツサル海峡で米國潜水艦が日本軍艦二十數隻を撃沈したといふあられもないデマ放送をやつたので、「それでは日本海軍の抵抗を受くることもあるまい」と安心して、わが輸送船團を脅やかすつもりで出動したのであつた。

結局、彼等は味方のデマに禍ひされて、海の藻屑となつたり、大破したりしたものである。

スラバヤ沖海戦

わが陸海軍は、緊密な協力の下に敵が大東亞海における最後の據點と恃むジャバ島攻略作戦を行ひ、三月一日未明にはジャバ島の要衝三ヶ所に一齊に上陸を開始し、敵の心膽を寒からしめた。

ジャバを根據とする米・英・蘭の西南太平洋聯合艦隊の主力は、この氣配を知つてか知らないで

か、二月二十七日スラバヤ沖に出動して、附近一帯の海上を警戒してゐた。わが海軍は、大部隊の陸軍をジャバに上陸させるには、この航路に當る海上から敵艦艇を一掃しなくては危険であるから、堂々たる陣容をもつて二十七日夕刻ジャバ島北方のバウアン島西方の海上にさしかゝると、果して西南太平洋聯合艦隊が遊弋しつゝあるのに遭遇した。艦隊と艦隊との戦闘は、去る一月二十七日のエンダウ沖における驅逐艦二對二の戦闘以來二度目の海戦である。わが艦艇は勇躍して敵の一隻たりとも逃がさじと、猛烈な海戦を展開した。敵艦もさるもの、これに應じて砲撃を加へてきたが、刻一刻と時刻の經つに従つて、わが軍艦の砲弾の威力、照準の正確なことに驚き、到底われ／＼の敵にあらずと見たらしく、早くも逃げ腰となつた。

わが艦艇は逃がすものかと、これを追撃してますます猛撃を加へ、遂に濠洲巡洋艦ホバート（乙級巡艦）を撃沈した。夜になるとわが水雷艇は隼の如く敵艦に迫つて魚雷を發射した。水雷艇の勇敢な戦闘ぶりは、日清戦争における威海衛の夜襲、日露戦争における日本海海戦の夜襲等において遺憾なく發揮されてゐるが、現在のわが水雷艇はその傳統を繼ぐものであり、さらに、現代戦に即應する猛訓練と現代科學の蒐粹による裝備と性能とを有するわが國獨特のものであるから、勁烈當

るべからざる猛威を發揮する。

見よ！この夜の海戦において、米驅逐艦一隻、蘭驅逐艦一隻、英驅逐艦二隻はわが艦艇の一發必中の魚雷と砲撃を受けてあへなくも海底深く沈みいつたではないか。

南海の夜は明けて二十八日となつたが、わが艦隊はなほ追撃の手を緩めず、ますます敵艦を壓迫してオランダが唯一の力と恃んだ蘭旗艦デ・ロイテルに巨弾を打込んで大火災を起させた。デ・ロイテルは必死となつて消火に努めたが、火は遂に火藥庫に引火したらしく、轟然たる音響と共に艦體を眞ツ二つに引き裂かれ、瞬間にして水中に没した。

蘭巡洋艦ジャバは、この猛撃の中から遁るべく身悶えしてゐたが、これも間もなくドス黒い煙と紅蓮の焰をあげつゝのた打ち廻つた末、醜い最期を遂げた。

つゞいて、掃海艇一隻を極めて手輕に撃沈して、さらにわが艦隊を襲撃せんとして機を狙つてゐた敵潜水艦數隻を撃沈し、敵を殲滅の瀬戸際に追詰めた。

バタビヤ沖海戦

三月一日は、わが陸軍部隊が一齊にジャバ島の三ヶ所から上陸した日であるが、わが艦隊は必ず敵の残存艦隊が、抵抗力のない輸送船を狙つて現はるゝに相違ないと見てとり、一日早朝から敵艦が出没しさうな地點を索敵すると、果して明けかゝつた朝霧の中に敵の艦隊を捕捉した。

この艦隊は、去る二月二十七日夕刻から二十八日拂曉にかけてのスラバヤ海戦から逃げた艦隊の一部と、新たに米英本國から増援に急派された艦隊を含むものであつた。その中には曾て米アジヤ艦隊の旗艦であつた大型巡洋艦ヒューストンもゐた。この軍艦はオーガスタ級六隻中の一艦で、九、〇五〇トン、速力三二・七節、八インチ砲九門、カタパルト二臺と搭載機四機を有する精銳である。曾てマニラを本據として、米國の東洋侵略の前衛的使命を帯びてゐた憎らしい軍艦だ。

わが艦隊は、先づヒューストンに向つて集中射撃を浴びせた。彼も健氣に應戦してゐたが、何といふ脆さだ。米國の誇示する大巡洋艦も、忽ち猛火に包まれたまゝじり／＼と沈んでいつた。

ついで英驅逐艦二隻、砲艦二隻が撃沈され、さらに濠巡洋艦バースもまた同じ運命を辿つてバタバヤ沖海底の藻屑となつてしまつた。

この日午前十一時、去る廿七八日のスラバヤ沖海戦から逃げた敵艦を追つて探索してゐたわが艦隊は、ジャバの中央部からやゝスラバヤ寄りのクラガン北方海面でこれを捕捉した。

その中には、英國の大巡洋艦エクゼターが王者の如く控えてゐた。同艦は昭和十四年十二月十三日、南米ウルガイ沖の獨英海戦で獨の一萬トン戦艦グラーフ・シュペーと戦ひ、傷つきながらもなほ戦闘をつゞけ、シュペーがアルゼンチンの港に修理に這入つたところを、エクゼターはその僚艦と共に追ひつめ、遂にシュペーを自爆させた。いか者で、八、三九〇トン、八インチ砲六門、速力三二ノットである。

わが艦隊は、エクゼターに向つて猛砲撃を加へた。わが正確な照準と、強力な砲弾とは、到底彼の比ではなく、遂に敵はじと見て、驅逐艦二隻とともに、煙幕を張つて逃げ出した。

この時、わが海軍航空部隊もこの戦闘に参加し、海空兩面から猛撃を加へた。エクゼターには、カタパルト二臺と、搭載機があるが、とても飛び上つて挑戦するどころではない、三十二ノットの快速力に物をいはせて、如何にしてこの地獄を脱出しようかとのみ焦つてゐる。

だが、遂に彼の最期の時が來た。わが砲弾のため大火災を起し、ひどく傾きながら尙ほ疾走すること暫し、泳ぎ疲れて溺れる者の如くすぶ／＼と波に吞まれてしまつた。同時に、これと行動を共にしてゐた驅逐艦二隻も撃沈された。

盟邦獨逸の軍艦に詰腹を切らせたエクゼターは、盟邦日本の海軍によつて仇を討たれたのだ。シユベール號よ、以て瞑すべしだ。

このスラバヤ沖、バタビヤ沖の兩海戦におけるわが方の損害は、掃海艇一隻沈没、驅逐艦一隻小破といふ奇蹟的なものであるが、それは奇蹟でも何んでもなく、全く實力の相違から來てゐる。

なほ、一月二十七日のエンダウ沖の海戦、二月二十日のバリ島沖の海戦等を加へて、三月一日のバタビヤ沖海戦にいたるまでのわが海軍の綜合戦果は、

撃沈 巡洋艦十一、 驅逐艦十六、 潜水艦七、 砲艦一、
 大破 巡洋艦五、 驅逐艦二、
 中破 巡洋艦一、 驅逐艦一
 であつた。

これで、大東亞海における敵艦隊は殆ど殲滅されたも同然である。

シンガポールの海戦

シンガポールの攻略については、わが海軍はわが陸軍と呼應して、極めて有効適切な奮闘をして、陸軍部隊の活躍を援護したが、この攻略戦において最も素晴らしい戦功を挙げたのは、脱出艦船の全部を捕捉殲滅したことであつた。

わが艦隊は、シンガポール作戦の進展につれて、敵は必ずシンガポールを脱出して南方へ遁走すると見、シンガポール島の南方海面と、パンカ海峡附近一帯に網を張つて待期してゐた。

果して二月十日から十四日にかけて、敵の艦艇に護られた大船團が續々と南下してきた。シンガポールから脱出した艦船は六十四隻といふことであつたが、わが艦隊の警戒網に引つかゝつたのは、その大部分の五十八隻である。

これを発見したわが艦隊は、直ちに停船命令を發したが、護送艦艇は却つて我に向つて發砲してきた。もはやわが艦隊は猶豫が出來ない。直ちに應戦してこれを撃沈又は大破したが、白旗を掲げたものだけは勿論助けてやつた。

この五日に撃沈した敵艦船は、英輕巡洋艦アレスーサ型一、特設巡洋艦一、砲艦二、潜水艦一、敷設艦一、特務艦一、輸送船三萬トン級一、八千トン級一、五千トン級四、三千トン級二で、撃破したものは蘭巡洋艦一、驅逐艦一、魚雷艇一、輸送船十、擱挫せしめたもの敷設艦一、輸送船一、

合計實に三十二隻に及んだ。

白旗をかゝげて降伏したものは全部輸送船で、その數二十六隻であつた。

すでにシンガポールの名も昭南島と變つた二月二十七日、これら二十六隻の輸送船は、わが艦隊に誘導されて逆戻りしてきたが、この輸送船の中には六萬餘の敵がひしめき合つて、變り果てたシンガポールの姿を打眺めながら、今更の如くわが陸海軍の強大な威力に感歎久しうするのであつた。

印度洋大作戦

わが國は大東亞戰爭完勝のためにも、大東亞共榮圈確立のためにも、是非とも印度四億の民衆をその協力者としなければならぬ。そのためには、印度から英國の軍事施設や兵力を一掃することが先決問題である。従つてその目的を達すれば、自ら印度は獨立する。正に一石二鳥だ。果してわが軍は起つた。破邪顯正の劍は抜かれた。

わが海軍航空部隊は、突如として四月五日朝、印度の咽喉を扼する最大の要衝——セイロン島のコロンボに大空爆を敢行し、續いて全印度洋にわたる一大作戦の壯舉を展開した。そして、帝國海軍の印度洋作戦における緒戦の大戦果は左のごときものである。

コロンボ爆撃（四月五日）

セイロン島の要衝コロンボを偵察してゐたわが潜水艦から、わが海軍根據地に宛てて敵の狀況を手にとるやうに打電してきた。

（機いよく熟せり）

と見たわが司令官は、時を移さずコロンボ大爆撃の命令を下した。四月五日のことである。脾肉を嘆じてゐたわが海鷲は一斉に飛びあがつた。そして早くも午前十一時近くにコロンボの上空に迫つた。

この日、印度洋名物の三角波も全く鎮まつて、水面には小皺一つなく、研ぎのかゝつた鏡のやうに灼熱の太陽の下に輝いてゐた。

午前十一時に、コロンボの上空に達した。飛行機格納庫、石油タンク、ドック、波止場などの軍事施設が翼下に見おろされる。命令一下、直ちに攻撃開始となり、正確無比な照準によるわが爆弾は目的物から糸を引いてたぐり込むやうに命中する。忽ち格納庫が吹き飛び、倉庫が燃えあがり、棧橋が寸断される。

しかし、どうしたことか、最大の目的物である敵艦の姿が見えぬ。わが荒鷲たちは残念でならぬ。コロンボの敵は、よほど狼狽したと見えて、わが荒鷲がかなりの戦果をあげるまで挑戦して來なかつたが、やがて陣容を整へたのか、一斉に數十機が舞ひあがつてきた。その中には、英國が世界に誇る虎の子のスオードフィッシュやアルバコアの雷撃機もゐる。そのほかハリケーン、スピットファイヤー、PBY飛行艇など、何れも英國自慢の飛行機だ。彼等は猛然として逆襲してきた。

だが、わが海鷲はハワイを攻撃し、マレー沖で戦ひ、ジャバ、スラバヤ等の海戦で既に敵艦を完膚なきまでに叩きつけた猛鷲だ。その戦闘意識において、飛行機の性能において到底敵機の及ぶところではない。見る／＼うちに世界一と自稱するアルバコア機が、わが猛鷲の一弾を喰つて、とんぼ返りをして墜ちてゆく。つゞいてハリケーン二十七機、スピットファイヤー機十九機、スオードフィッシュ機十機、PBY機二機が火達磨となつて墜ちた。

この附近を逃げまどつてゐた敵の武装商船もわが猛鷲の一撃を喰つて、一舉にして十数隻が撃沈された。

素晴らしい戦果だ。

その日の午後三時ごろ、わが海鷲はセイロン島の南々西約三百五十哩の洋上を、西へ遁れようとしてゐる二隻の敵軍艦を発見した。コロンボから脱出した敵艦だ。

わが海鷲は、躍りあがつて喜んだ。そして隼の如く襲ひかゝつた。兩艦とも大型巡洋艦で、印度洋の防衛にあたる重大な責任を持つてゐるのだが、いよ／＼わが海軍の印度洋大作戦開始すると見るや、安全地帯を求めて逸早くセイロン島を脱出したのだ。

(全日本人の憤怒の罩つた巨弾を思ひ知れッ)

かうして投下された爆弾は、英國印度洋艦隊の主力コンウオール（一萬トン、速力三一・五節、八吋砲八門）を一撃のもとに撃沈し、さらにその僚艦デボンシャー（九千七百五十トン、速力三一・二五節、八吋砲八門）を瞬くうちに、海底に叩きこんでしまった。何といふ鮮かな手並であらう。

この日の戦果は、撃墜飛行機六十機、撃沈巡洋艦二隻、撃沈武装商船十数隻に達した。

亂れ飛ぶS O S （四月六日）

この日早曉から、わが艦隊は三隊に分れてベンガル灣に行動を開始した。

北方進撃部隊はカルカッタ沖に、中央進撃部隊はビザガタムからコカナダにわたる沖に、南方進撃部隊はマドラス沖に游弋して、敵の艦船の現れるのを待った。

夜暗のうちにすつかり各々部署についたので、敵はこれを知らないで、悠々としてわが艦隊の捕捉網の中に這入りこんだ。

午前九時三十分、はるか西北方の水平線上に黒煙を吐いて南下してゐる大船團を発見したわが艦隊は、全速力でそれに近づいて行つた。が、敵船團はそれを味方の軍艦とでも思つたのか、のん気に艦隊の方へ進んでくる。その船團の前後には、八センチ砲を備へた武装船がついて、この大船團を護つてゐる。

「撃ち方始めッ。」

午前十一時、司令の命令が下るや否や、一髪の間をおかずに猛攻の火蓋が切られた。鏡のやうなベンガル灣は、一瞬にして修羅場となつた。

一發を喰つて左に傾斜した武装船の右舷には、死地を脱しようとする乗組員が一時に押しかけて阿鼻叫喚してゐる。その右舷にまた一發が命中して、今度は左舷よりも、もつとひどく傾いた。今度はどつと左舷に押しよせてゐる間に、船はすく／＼と波に吞まれてしまつた。

武装船は、大火災を起して沈みかゝると、乗員は素早くボートに移乗して逃げだした。彼等は力一ぱいボートを漕いで、本船から五百メートルぐらゐ離れたところに來ると、本船の沈没の際に起る渦巻に吞まれないといふ安心をしたのか、オールをあげて日本軍艦の砲撃ぶりに見惚れてゐる。そして、今に日本の艦艇に收容されるだらうといふ一抹の衰れた希望をつないでゐるやうだ。

あゝ、これが七つの海を支配し、太陽の没することなき領土に君臨してきた英國海員の態度であらうか。

今日の英國民は、大家の坊ちゃんとして育ち、大帝國の國民として世界から甘やかされ、そして自ら驕り放題に驕つてきた驕慢兒である。だから、膽力もなければ氣魄もない。況や、一命をすてゝ國家の名譽に殉じようなどいふ考へは毛頭もない。

これを、わが商船が敵國商船を追ひまくつて捕獲し、あるひは敵の潜水艦を撃沈し、あるひは敵潜水艦に體當りをして沈没させた事實に比べると、あまりにその落差の甚しいのに驚かざるを得ない。

この日の戦闘は正午になつて終つた。といふのは、もはやベンガル灣上一隻の敵艦船の影を見なくなつたからだ。その戦果はカルカッタ沖で八隻、ビザガバタム沖で六隻、マドラス沖で五隻の商船を撃沈し、これに海鷲の撃沈した二隻を加へると、合計二十一隻十四萬トンといふ物凄い船が、戦闘開始以來僅か一時間内に屠り去られた。

この戦闘中、怯えきつた敵商船は、さかんにSOSを發して「英國艦隊はわれ／＼を見殺しにするのか」とか、「英國艦隊は一體どこにゐるのか」と、最期の足掻きと恨みをこめた裸の無電（暗號を用ゐない電報）を發するかと思ふと、何處からともなく「印度洋を航行中の汽船は全部速かに最寄

りの港に避難せよ」との無電があつて、いち／＼わが艦艇や海鷲の受信器に傳はつた。

「まるで、大英帝國の葬送曲を聴くやうだ」

わが勇士たちはかう言つて、ニツコリと顔を見合せた。

航母を屠る（四月九日）

わが海鷲の大編隊は、この日もまた午前十一時セイロン島の北部にあるツリンコマリー軍港を爆撃し、挑戦してきた敵機を次ぎ／＼に射ち落とし、忽ちにして六十機を屠つた。このほか港内にゐたリアンダー型巡洋艦一隻、驅逐艦一隻を再起不能にいたるまで叩き壊はし、さらに商船六隻を打ち沈めた。

敵航空母艦ハーミスを見つけた。我にとつては正に待望の好餌だ。不意を喰つたハーミスは、艦首を右に左に向けながらのた打つたが、一發必中のわが爆弾に蜂の巢のやうに滑走甲板を打ちくだかれ、續いて艦體全部を包む濛々たる黒煙を吐いた。腹一ぱいに積んだ飛行機とガソリンが燃えてるのだ。それでも緩慢な高角砲を放つてゐたが、間もなく大きく傾いたかと思ふ間に、非常な速度

で沈んでしまった。

わが海鷲は、この大なき獲物を射止めた歡びと感激に、しばし無言のまゝ油ぎつた水面を見詰めてゐた。

◇

この五日間にわたる印度洋作戦の大戦果は、英使クリップスを繞る英印會談に一大衝撃を與へた。即ち、今やその印度制壓の唯一の武器であつた英國印度洋艦隊は全滅に瀕し、従つてこれを背景として物を言つたクリップスの恫喝も、もはや睨みの利かない空疎なものになつてしまつた。同時に印度の指導者たちは、猛然としてクリップスを反撃した。遂に彼はわが事成らずとして、旗をまいて本國へ引きあげた。

英國勢力が全面的に印度から退却するのは、時の問題だ。そしてそれは皇軍の在印英勢力覆滅の戦果と並行するものだ。

噫 成 瀬 兵 曹

闇夜の潜水艦

昭和十五年八月二十六日の夜のことである。

第〇〇潜水艦は、東京灣南方の洋上で猛訓練に従事してゐた。空も海も一面に濃い闇に蔽はれて視界を遮つてゐる。

一等兵曹成瀬正雄は、甲板にあつて見張の配置についてゐた。

水上に浮びあがつた潜水艦は、濁つた空気を入れ換へたり、乗員たちがオゾンの多い新鮮な空気を胸一ばいに吸つて元氣を恢復したりするほか、速力を早めて敵に接近したりする。水中の速力は、ほかの軍艦にくらべて著しく遅いが、水上に出ると著しくその速力を増すものである。

水上に現はれた第〇〇潜水艦は、敵（演習）を索めて、まっしぐらに闇夜の洋上を突進した。

洋上の潮風は、蘇生するやうな涼味を満喫させてくれたが、しかしその潮風には、何かしらあらしの前の不氣味な豫感を伴つてゐた。

「少し、空模様が變ぢやないか」

成瀬の僚友が言つた。

「存外早く荒れだすかもしれないぞ」

成瀬は、ひとわたり大空を見まはしながら言つた。

「君の豫報は气象台以上だからな」

成瀬は、あらゆる技術に優れてゐたが、特に氣象観測、信號、見張術の成績は群をぬいてゐた。だから、乗員たちはいつも成瀬一等兵曹の氣象観測を重視してゐた。

既に沈没に瀕す

果して、それから間もなく南西の風が猛烈な勢で吹きだした。第〇〇潜水艦は、颱風圏内に突入してゐるのだ。風は刻々に激しくなつて、波は山のやうにうねりながら艦體を揉みつぶさうとする。すでに激浪は、甲板を洗ひ始めた。

猛訓練は、帝國海軍の傳統である。

快晴の洋上や、静かな月夜などの訓練は、わが海軍將兵は張合のないものとして却つて厭ふやう

な有様だから、この暴風、この激浪はむしろ待望の試練であつた。

艦長は、甲板に打ちあげてきて、ともすれば足を浚はうとする激浪と闘ひながら全乗組員を叱咤激励した。全員またこれに應じて各自の部署を固守した。

暴風は豪雨を伴つて吹きすさび、激浪は傲然甲板に躍りあがつて、乗組員を一呑みにしようとする。

この上の冒険は、むしろ暴虎馮河の勇であると思つた艦長は、初めて潜航を命じた。

直ちにメインタンクの空氣は、排氣弁から排出され、海水を導入する海水弁が開かれて、海水はどくどくとメインタンクに流れ込んだ。そして艦は静々と沈下を始めた。

この瞬間、海も空も狂ひだしたやうに荒れて、甲板の上には海面と同じやうに激浪が乗りあがつてきた。

「艦長、早く司令塔を降りてください」

成瀬一等兵曹は、艦長が危険にさらされてゐるのを見て叫びつゞけた。

「お前も早く降りて来い」

艦長は、部下の身を案じながら、辛うじて司令塔を降りた。

激浪は、司令塔の昇降口から、瀧のやうに艦内に流れ込んでゐる。何といふ急激な變化であらう。第〇〇潜水艦は、すでに沈没に瀕してゐるのだ。

一死、一艦を救ふ

責任感の旺盛なことは、帝國海軍の傳統的精神である。

昇降口蓋閉鎖の任務を帯びてゐた成瀬一等兵曹は、艦長が司令塔を降りていつたのを見届けると同時に、艦外からその口蓋閉鎖に取りかゝつた。本來ならば艦内から閉鎖するものであるが、この浸水ではとうてい艦内から閉鎖することは不可能であつたからだ。

すでに一段高い司令塔の甲板も沈潜し始めてゐる。海水は成瀬一等兵曹の腰のあたりまで浸してゐる。激浪はたゞひとり甲板に残つた一等兵曹の身體を無理矢理に浚つて行かうとする。(いま、自分が浪に浚はれたら、口蓋からの浸水で艦は沈没し、全乗組員は艦と運命を共にするのだ。死んでも責任を完うするまでは、こゝを放れてはならぬ)

成瀬一等兵曹は、渾身の力を両手にこめて、自動車のハンドルのやうな形をした口蓋閉鎖器の把

手を握りしめてぐいぐいと締めつけた。

この努力によつて、すさまじい勢ひで艦内に流れ込んでゐた海水は完全に防ぎとめられた。

けれども、成瀬一等兵曹がその旺盛なる責任感によつて、艦體も全乗組員も無事なることを得たのであつた。潜水艦は、刻一刻と沈下して行く。甲板上の成瀬一等兵曹は、なほもしつかとハンドルを握つてゐる。

もはや艦上には誰ひとりもゐない。總ての昇降口蓋は固く閉されてゐる、風は狂ひ、波は猛り、どこを見渡しても船影一つ見えない。

いかに水泳に練達した者でも、この激浪を泳ぎ切つて、はるかなる陸地に泳ぎつくことは不可能である。もとより、成瀬一等兵曹は一身を犠牲にする決意でその任務にあつたのである。潜水艦が一定の速度で無事に沈下して行くのを見届けると、成瀬一等兵曹は安心と共に力がぬけた。

心なしの激浪は、この時又もや大うねりにうねつて、この盡忠至誠の權化たる肉體を軽く洋上に浚ひ去つた。

あゝ、英魂は遂に太平洋の守護神となつた。艦内の勇士たちは、最初は艦内から口蓋を閉鎖したものとばかり思つてゐたが、間もなく成瀬一等兵曹が、身を犠牲にして艦外から閉鎖作業を行つた

ことを知つて、感謝と讃嘆の念で衝きあげられた胸から、英靈安かれと祈るのであつた。

◇

成瀬兵曹は愛知縣額田郡福岡町の出身で、當時二十八歳、昭和九年海軍志願兵として吳海兵團に入團し、のち選ばれて高等科信號術練習生教程を経、支那事變における南京攻略戦には、江岸の頑敵を掃蕩して幾多の敵閉塞線を啓開し、南京攻略の大戦果を収むる戦作に従軍して感状に輝く赫々たる武勳をたてた。

その後、潜水艦に職を奉じ、昭和十四年末第〇〇潜水艦乗組員を命ぜられ、帝國海軍の第一線にあつて活躍してゐた。

資性濃厚篤實、よく帝國海軍の傳統的精神を體し、黙々その行動を以て一般乗員に範を示してゐた。

當時の海軍大臣吉田善吾大將は「軍人精神の發露にして、正に全軍の錨鑑たり」と表彰狀を贈り、また及川前海軍大臣を経て、畏くも、上聞に達し、一周忌を前にして賜杯の御沙汰を拜した。この破格の光榮に浴し、遺族はもちろん、海軍部内はひとしく聖恩の有難き思召に感泣したのであつた。

成瀬一等兵曹が、激浪に半身を没しながら、口蓋を閉めつゝある場面を描いた油繪が、帝國海軍

魂の權化として海軍潜水學校に掲げられ、後進勇士の士氣を鼓舞してゐる。

あゝ、肉體は亡びても、その眞摯敢闘の英魂は永劫に護國の神として強く生きぬいてゐる。

高^{カウ}
陸^{シン}
號
の
撃
沈

砲身に洗濯物をかけた清艦

日本と清國との國交がいよ／＼險惡となり、街々に響くけたましい號外賣りの鈴の音さへも、いやが上に國民の愛國的興奮に拍車をかけてゐる頃、わが聯合艦隊の第一游撃隊は、すでに佐世保軍港を發して、朝鮮の仁川沖に出動し、牙山、仁川などに上陸したわが陸軍と連絡をとりつゝ、朝鮮近海の警備にあたつてゐた。また、宣戰の詔勅は發せられないが、到る所に陸軍の衝突があつて、全く戰時状態に入つてゐた。

第一游撃隊は吉野、浪速、秋津洲の三艦で編成され、吉野には坪井司令官が搭乗し、浪速には艦長として東郷平八郎大佐が控へてゐた。

明治廿七年七月廿五日朝、第一游撃隊は、牙山沖から、大阜島附近を過ぎて、黃海に向つて航行した。爽かな夏の朝風に、艦尾の軍艦旗が一層の輝やきを帯びて、力強くひるがへつた。と、突然、「清國軍艦見ゆ！ 各艦の速力を十五ノットに増加せよ」と、坪井司令官から信號が發せられた。成る程、前面の豊島方面の水平線上に、一隻の艦影があらはれて、徐々にわが艦隊の方に近づい

て来る。浪速の艦橋に立つて、双眼鏡で眺めてゐた東郷艦長は、

「どうも、濟遠と、廣乙らしい。相手にとつて、聊か不足ぢやが……」と傍らの石井副長を顧みた。だん／＼接近してくると、果して濟遠、廣乙の兩艦だとわかつた。濟遠は巡洋艦で二千三百トン、廣乙も同じ巡洋艦で一千二百トン、すでに物々しい戦闘準備をしてゐるのが、東郷艦長の双眼鏡の中に、はつきり映じた。やがて、敵味方のマストには、高く戦闘旗が掲げられて、氣味の悪い沈黙の中に、舳先に碎け散る潮の音が、嵐のやうに高まつてきた。

浪速は三千七百九トンの巡洋艦、他の我が軍艦も、これと大差がなかつた。

これより前、明治二十六年に、清國は日本に自分の武力を示さうと、東洋第一の巨艦で、精銳無比とされてゐた七千トン級の清國の定遠が、鎮遠、平遠などを率ゐて日本を訪問したことがある。それ以來、わが國民は、ひそかに清國海軍の偉力を氣にしてゐた。

だが、東郷艦長は、「なアに、清國の艦隊は焼身の名刀だよ。恐るゝに足りない」と皮肉をいつててんで問題にしなかつた。

清國の艦隊は、道具立ては揃つて、見た目には立派である。しかし彼等は刀にたとへて見れば、鍛えられてゐない焼身の名刀だ。火に入れて何度も何度も鍛え直した日本刀の凄切味のやうな

日本の海軍には、到底太刀打ちは出來ないのである。

何故、東郷艦長は、この清國艦隊の本當の價値を知つてゐたかといふと、平遠が軍艦の修理のためだと言つて、吳軍港に入港したことがあるが、當時、吳鎮守府の參謀長だつた東郷大佐は、背廣服に着替へて、平遠の碇泊してゐる海岸に行つてみた。すると、軍艦の魂である神聖な砲身に洗濯物などをぶら下げたり、甲板が雑然として、少しも整頓してゐない状態を見て、(士卒の精神が、)緊張を缺いてゐる。これではいくらいゝ軍艦でも、いざとなれば役に立たぬ、彼等は焼身の名刀だと斷じ、人にもまたこれを語つたぐらゐである。それ以來、東郷艦長は清國艦隊恐るゝに足らずとしてゐた。だから、いま濟遠、廣乙の兩艦と相對しても、すでに敵を呑んでゐた。

英旗の怪汽船

双方の距離は、早くも三千メートルに接近した。敵艦の甲板に、將卒が右往左往する様子が、肉眼でも認められる。

午前七時五十分を過ぎること二分!

濟遠右舷の砲口が、強い旭光の中に一閃したと見る間に、敵弾は不気味なうなりをあげながら、浪速の艦上をかすめ飛んだ。大きな水柱が、艦側近くに立ちのぼった。

わが艦隊も、直ちにこれに應戦して、猛撃を加へた。敵艦は健氣にもわが艦隊に向つてますます、猛射を浴びせたが、わが艦の命中力が正確で、著しく戦術の優れてゐることが分ると、廣乙はまづ陸岸の方へ逃げ、濟遠もつゞいて、北方の徳積島方面へ逃げ出した。

浪速は、全速力でこれを追ひながら、得意の射撃を加へてゐると、西方の海上から、清國の軍艦旗をかかげた軍艦と、英國の商船旗をかかげた四、五千トン級の汽船が朝鮮の海岸に向つて近づいてきた。清國の軍艦は、砲艦操江（五五〇トン、速力九ノット）であつた。

濟遠は、追はれながらも、操江に向つて、何かしきりに信號すると操江は護衛した商船を見棄ててあわて、濟遠のあとについて逃げ出した。

だが、商船は平然として浪速の方に近づいてきた。

「怪しい汽船だ。見逃すな。」東郷艦長は、かういつて、敵味方の距離一千メートルに接近した時、停船を命じた。つゞいて、「投錨せよ」と信號すると、彼は言はるゝまゝに直ちに投錨した。

この汽船は、英國の國旗こそ掲げてゐるが、船には清國の陸兵や、大砲などを満載してゐる御用

船であつた。浪速は、この汽船に、「動いたら發砲するぞ」といふ信號をして置いて、再び濟遠の追撃に移らうとすると、坪井司令官から

「浪速は、直ちに英船の臨検をなすべし」といふ信號を受けた。

そこで、浪速は英船に對して、いよく臨検を行ふことにし、吉野、秋津洲の二艦は、逃げる濟遠と操江を追ひかけた。

吉野、秋津洲に追はれた濟遠は、必死の速力を出して、遂に逃げ失せたが、操江は、何しろ砲艦の悲しさに速力も僅か九ノットだし、間もなく速力十九ノットの秋津洲に追ひ詰められて、拿捕されてしまつた。

午前十時四十分、東郷艦長は英船を臨検するため、分隊長人見善五郎大尉を呼んで、

「あの英船に行つて、航海の目的、搭乗の人員および兵器その他一切必要な事柄を調べて清國の御用船といふことを確かめたならば、本艦に隨行するやうに命ぜよ」と令した。

人見大尉は命を受けて、立ち去らうとすると、

「君は英語は、巧かつたな。」

「たゞ今の用件ぐらゐなら、不自由しないつもりです。」

「ウン、それでよろしい。」

東郷艦長の顔には、微笑が浮んだ。人見大尉は、艦内切つての英語の得意な將校だつた。

人見大尉と、その部下を乗せたボートは、すべるやうに波の上を渡つて、英船の舷側についた。

船員の英國人たちは、素直に一行を迎へたが、清國の軍人たちは、銃を持つたり、青龍刀を閃かしたり、わい／＼わめきながら一行を威嚇するのだつた。

「浪速が、どんなに威張つても、乗組員は三百五十名位ぢやないか。こちらには一千餘りの軍人がゐる。いざとなれば、こちらの勝利だ。」

「この汽船は、英國のものだ。一指でも染めたら、日本と英國の戦争になるんだ。」

「その使者を捕虜にしてしまへ。」

こんなことが、支那語を知つてゐるわが使者の耳に小うるさく聞えてくる。

清兵、英船長を威嚇

人見大尉は、清兵の騒ぎには耳をもかさず、まづ船長の英人に對して、取調べをはじめた。船長

は五十歳前後の紳士だつた。

「君が船長か？」

人見大尉が、流暢な英語で訊いた。

「さうです。私が船長のガルス・ウォルスエーです。」

「この船の国籍と船名は？」

「ロンドンに本店をもつインド支那汽船會社の代理店怡和洋行の所有船で、高陞號カウシキョウといひます。」

「乗船してゐる清國兵は、どこから乗つて、どこへ行くのだ。」

「乗船地は太沽タカ、行先は牙山です。」

「清國兵は何名乗つてゐる？」

「一千百名！」

「大砲は？」

「十四門。」

「清國とは、どんな關係なのだ。」

「單に雇はれてゐるに過ぎません。」

人見大尉は、しばらく考へてゐたが、

「わが艦隊は、高陞號の隨行を命ずるツ」と斷乎として、言ひ放つた。

しかし、ウォルスエー船長は、別に驚く様子もなく、

「勿論、覺悟してゐます。」と心配さうに自分の周圍を取り巻いてゐる英國人の船員たちの顔を見まはした。船員たちも、船長に同意する顔つきをしてゐた。

「それぢや、本艦から信號があつたら、すぐ隨いてくるんだぞツ」

艦長は、無言のまま背^{うなづ}いて、引きあげる人見大尉の一行を見送つた。

考へのない清兵たちは、ボートに乗り移つた大尉の一行に向つて、射撃しようとしたが、船長はあわてゝこれを押へながら、

「冗談ぢやない。浪速の一發の砲彈は、一千百名の小銃に優つてゐる。ふざけた眞似^{まね}をしたら、直ちに撃沈されるぜ」と、支那人の無智をたしなめた。

本艦に歸つて來た人見大尉は、待ち受けてゐた東郷艦長に向つて、臨檢の狀況を詳しく報告すると、東郷艦長は、

「それぢや、これから高陞號を佐世保へ連れて行かう。すぐ信號しろツ」と、石井副長にいつた。

「大きな捕虜ですな。」副長は、どつしりと波の上に浮いてゐる高陞號を望みながらいつた。やがて信號があげられた。

「直ちに錨を揚げよ！一刻も猶豫を許さず。」

東郷艦長は、双眼鏡を手放さず、じつと高陞號の様子を見てゐたが、急に船内が騒がしくなつて清兵が、船長を取り巻いて、亂暴を加へようとしてゐる。

「馬鹿な奴等だ。」

東郷艦長は、清兵の淺幕な振舞ひを憐れむやうにいつた。

「艦長、どうなさいますか」副長は、じり／＼し始めた。

「もう暫く様子を見てゐろ。」

この時、する／＼と高陞號のマスト高く信號があがつた。

「重要な用談あり、直にボートを送られたし」と、ある。

東郷艦長は、豫め、この事あるのを知つて、人見大尉等のボートは、そのまま舷側につないであつた。艦長は、再び人見大尉を呼んで、

「重要な用談といふのは、恐らく清兵の奴等が、隨行に反對するのだらう。それではそれでよい。

非戦闘員の船長以下の船員だけボートに乗せて連れて来い」と、命令した。

人見大尉を乗せたボートは、眞夏の正午の強い陽光を浴びつゝ、高陞號に向つた。

附近の大小の島々、それから朝鮮本島の岬が、この牙山沖の海面を湖水のやうに取り圍んで、悠然と横たはつてゐる。

浪速の甲板にも、高陞號の甲板にも、一ぱい人が並んでどんな結果になるか、固唾をのんで、その成行きに注意した。兩者の距離僅かに二千メートル内外だ。

船長は、嬉しさうに握手をしながら、人見大尉を迎へて、

「御迷惑かけてすみません。既に御承知でせうが、本船を浪速に隨行させることについて、支那の將校たちが全部反對してゐます。だから我々船員たちだけ、浪速に乗せて戴きたいのですが、如何でせう？」と、いふ。人見大尉は、

「浪速艦長も、非戦闘員だけの移乗を許すといふことであるから、僕等のボートに乗りたまへ」といつた。

そこで、ウォルスエー船長等は、直ちに移乗準備に取りかゝらうとすると、これを見た清國兵は悪魔のやうに猛り狂つて、船長を捉へ、その指揮官らしい大兵肥滿の軍人が、「君は、清國で雇つた

船の船長である。だから清國軍人の許可なくしては、勝手にこの船を離れることは出来ない。それでも、この船を去る氣なら、死體となつて去れ！」と、船長の胸板にピストルを突きつけた。

人見大尉は、已むなく引きあげて、東郷艦長にこの旨を報告した。報告を聞いた艦長はたゞ一言、「よろしい」と云つたきり、固く唇を結んで、兩腕を組みながら、きつと高陞號を見詰めた。

當然の撃沈

高陞號に停船を命じてから、既に二時間半を経過した。

濟遠を追つて北へ行つた僚艦吉野も、操江を追つた秋津洲も、水平線下に艦影を没して、時々遠雷のやうな砲聲が、波を渡つて聞えてくる。

近くに浮んでゐた澤山の漁船も、たゞならぬ形勢を察して、島影に消えてしまつて、海上にはただ浪速と高陞號が、やがて巻起る恐ろしい嵐を豫感せしめながら、對立してゐるに過ぎない。

高陞號の甲板は、刻々と騒がしくなつて、清國將校が、船長に向つて錨をあげて逃げ出せと迫つてゐるのが、ハッキリとわかる。

東郷艦長の眉宇には、みるみるうちに、動かし難い決心の色が浮んできた。それは明かに高陞號撃沈の決心だった。

東郷大佐は、青年時代、英國に留學して英語が巧かつたので、暇を見ては、外交に關する各種の書物を外國から取り寄せて猛勉強をしたが、殊に國際法の知識では、海軍の中で、東郷大佐に及ぶものはないと云はれるほど明るかつた。

だから、この場合、國際法に照らして、英國の國旗をつけた船であつても、敵兵たる清國兵やその武器を積み込んでゐる船は、敵國の船として、拿捕することが出来る。若しも諾なかつたら、撃ち沈める許りだ。——といふはつきりとした確信を、東郷大佐は持つてゐた。

暫くして、東郷艦長は、

「高陞號を撃沈する」と、力強く言ひ放つた。

そして、その泰然自若たる態度は、浪速艦全員の士氣を大いに振るひ起さしめた。

「打ち方始めッ」

號令を待ちかねた砲手は、一齊に高陞號に向つて、巨弾を放つた。第一弾は、上甲板の中央に物凄く炸裂した。

忽ち、高陞號の船内には、かうした非常の場合における支那人特有の、ぶざまなあわて方があらはれた。

ばら／＼と海に飛びこむ者、兩手をあげて、甲板の上を泣き叫びながら駆けまはる者、われ先にと、争つて乗りうつゝたボートが顛覆して溺れる者、健氣にも、小銃を取つて無茶苦茶に浪速に發砲する者——全くこの世ながらの生地獄である。

高陞號の後に、大穴があいて船は後の方から次第に沈没を始めた。時に午後一時十五分。

船は次第に沈んで、午後一時四十六分には全く水中に没し、マストの尖端だけが、水面にあらはれてゐる。

東郷艦長は、ボートを出して、ウォルズエー船長以下大部分の船員を救ひ、さらに憐れを乞うてゐる清兵も救つたが、この時、仁川方面から出てきたフランスの汽船は、全速力で現場にあらはれ、中立國としての立場から、溺れる清兵を救つた。しかし、沈没した高陞號に最後まで踏みとゞまつて、それと運命を共にした清兵も少くなかつた。

眞夏の午後の太陽は、この騒ぎで汚れた海面を、きら／＼と照りつけてゐた。

救はれた英國人たちは、佐世保軍港に送られ、非戦闘員として、極めて寛大な取扱をうけた。

大問題となる

高陞號撃沈の知らせが、日本に傳はると、日本中が愕然とした。

「東郷艦長は、何といふ亂暴なことをするのだらう」といふ非難の聲が、到る所に起つた。それは、たゞ英國の怒りを恐れたためである。

今日、我が國は多年暴戾を極めた米、英に對して、宣戰を布告し、彼等を撃滅しつゝあるが、明治廿七年のその頃は、東亞の新興帝國として、漸く立ち上つた日本に取つては、残念ながら、事毎に英國の機嫌を損じないやうに努めなければならなかつたのだ。

だから、牙山沖における東郷大佐の高陞號撃沈といふ斷乎たる處置も、英國の嚇怒を恐るゝあまり、非常に亂暴な行ひだとされた。

高陞號事件が起つてから八日目の八月一日に、遂に清國に對して、宣戰の詔勅が發せられたが、日本としては、やはり英國の態度が氣懸りだつた。

果して英國では、この事件を知つて、英國の國民たちの議論が沸騰し、高陞號に撃沈された英人

の生命財産の損害を、日本政府で責任を負へ、若しきかないならば、戰爭開始だといふ者も出て來た。

遂には、英國の外務大臣キンバレーが、英國に駐劄してゐた青木公使を通じて、我が政府に至急返事をせよと迫つた。

當時の政府は伊藤内閣で、首相伊藤博文、外相陸奥宗光、内相井上馨、藏相渡邊國武、陸相大山巖、法相芳川顯正、文相西園寺公望、農相榎本武揚、遞相黒田清隆——これらの各大臣は、悉く東郷艦長のやつた事を非難して、すぐ様嚴罰に處して、英國に謝罪するよりほかないといふことに一致したが、ひとり海相西郷從道は、

「おいどんは東郷のやつたことは、決して不法とは思はん。こんなことで、當事者を罰したり、外國に頭を下げたりしてゐた日には、日本は浮びあがることは出來ない。一々外國の威し文句にびく／＼してゐたら、いつでも外國から頭を叩かれなくちやならん。おいどんは諸君の意見にア、絶對反對だ。」

と東郷艦長の處置を支持した。

その内に、英國東洋艦隊司令長官フリーマントル中將が、自ら艦隊を率ゐて、日本に來航し、伊

東（祐亨）聯合艦隊司令長官を訪ね、傲然と、

「高陞號の撃沈は、國際法上違反である。一體どうしてくれる」と、怒鳴り込んで来た。

伊東司令長官は、うつかりしたことも云へないので、

「そのことは、政府の方で考慮中である。回答は政府からする筈だ」といつて追ひ返した。そして、東郷艦長にこのことを話すと、「いろ／＼御迷惑をかけてすみませんが、本官の遣つたことには、決して違法はありません」と、飽くまで強い自信を示した。

「予も、それを信じてゐる。」

伊東司令長官は、東郷艦長の言葉が、何となく頼母しかつた。事實、海軍の方では殆ど東郷艦長の遣つたことを、正しいことと信じ、またそれを支持することに努めた。

しかし、時の政府は、その當時の外交上の事情から、已むを得ないことだつたかも知れないが、非常に惱んだ。

又一方國民の中では、

「あれでいゝんだ。政府の奴等こそ腰ぬけだ。東郷といふ男は、いまにどえらいことをする人だよ」と、餘りに政府の意氣地なさに對して反感を抱き、東郷艦長に對して好意と同情とを示すやう

になつた。

日清戦争は、大勝利で終つたが、戦争の後の問題として、このことは、次第に大きくなつて来た。

英本國では、早くも日英開戦を唱へる者さへあつて、殆ど全英國が、高陞號撃沈は不法だと鳴らした。

ところが、茲に面白い事には、東郷艦長のこの行爲を亂暴なものとして、絶対に非難の聲をゆるめない英國人の中から、（東郷艦長の高陞號撃沈は絶対に正しい）と、學問上から明らかにした學者が出てきた。

彼は、英國のホルラント博士で、其の頃世界的に有名な國際公法學の權威だつた。

ホルラント博士は、國際公法の學問の觀點から、東郷大佐の行つた高陞號撃沈は、國際公法に合つた行ひかどうかを調べ、その論文を英國のロンドン・タイムスに掲げて世間の人々を呀ツとさせた。

その論文の大體の意味はかうである。

「高陞號が浪速によつて撃沈された時には、既に豊島沖において、日清兩國の軍艦が戦闘をひらいてゐた後である。一體、戦争といふものは、前以てお互が知らせ合つて、開始するものではない。

宣戰の布告にならない前に開戦しても、決して間違つてはゐない。

高陞號の船員は、戦争が始つてゐたことを知らないといふかもしれないが、豊島沖で、日本の第一游撃隊と、清國の濟遠および廣乙との戦ひは、その前後の有様に照らしてもわかる筈だ。ましてや、高陞號を護衛してゐた砲艦操江が、濟遠の信號によつて逃げた事實を、高陞號の船員は明かに認めてゐる。もしそれを知らなくても、日本の士官が高陞號に来て、隨いてくるやうに命じた時には、既に戦争状態にはいつた事を、認めなければならぬ。

それ故、戦時状態にあつたことを知らないといふ理由は成り立たない。

また、この時、英國の國旗をかくげてゐたといふことは、問題とするに足らない。高陞號には、日本の軍隊と戦ふべき清國の陸兵および多くの兵器を積んで居つたから、當然、敵船として扱はれるべきだ。

このやうな譯だから、日本の海軍が、高陞號を撃沈したことは、當然の事で、國際公法から見て少しも間違つてゐない。

殊に、高陞號が沈没された後、浪速はボートを出して英國人の大部分を救助し、非戦闘員に対する規則通り、何れも自由の身となることが出来た。これを觀れば、日本政府は英國に對する何等の

義務がないのみならず、船の持主や溺死した英人の家族は日本に對して、損害を要求する何等の權利も有たない。」

以上のやうに、ホルラント博士は、東郷艦長の高陞號撃沈は正しい——と論じた。

この外に、これもやはり國際公法の大家であるウェストレーキ博士が、やはりロンドン・タイムスに、東郷浪速艦長の高陞號撃沈に對する取扱ひは、正しい。少しも疑ひはない——といふ意味のことを論じた。

これは、彼等が殊更らに日本に好意を持ち、或ひは日本を支持しようといふのではなく、東郷艦長の執つた態度に一點の非難を打つ餘地がなかつたからだ。つまり、眞理の前に兜をぬいだのだ。

かくて、さしもにやかましかつた英國の輿論も次第におさまつて、今度は反對に、

「東郷は、智と勇氣の兼ね備はつた英雄である」といふ賞讃の聲が起つてきた。

そして、英國の出方を氣にしてゐた當時の日本政府は、英國の態度が、^{てのひら}掌を返へすやうに變つて來たので、

「さては、東郷のやつたことに間違ひがなかつたのか。さすがに東郷は偉い」と、今更らのやうに感心したのであつた。

確かに、この事件は東郷元帥（當時大佐）の毅然たる英雄的人格を遺憾なく發揮してゐるものである。

その當時の日本は未だ完全な一本立の強國とは言ひ難い状態で、外交、經濟などについて、常に外國——殊に英國の鼻息をうかがつてゐた状態だつたのだ。

その時にあつて、斷乎として、我が國の威信を發揚せしめた東郷元帥の行ひは、今日の我々にとつても、胸がすく思ひがする。

我が日本の威信に双向ふものあれば、斷乎としてこれを叩き伏せ、叩き伏せた後、降伏すれば、之を勞つてやる——といふ武士道的日本精神は、東郷元帥の昔から、ずつと日本海軍の傳統となつてゐるものだ。

これが、今次のハワイ海戦、マレー沖海戦等々の素晴らしい戦果となつて現れてゐるのだ。

正しと信じた以上、斷乎として行ふ——この精神は烈々として、我が海軍の心に燃え、あの素晴らしい活躍となつたのだ。

日清の大海戦

彼我艦隊の勢力

明治二十七年五月二十五日、豊島沖の海戦で、東郷浪速艦長の高陞號擊沈などの赫々たる武勳以來、清國艦隊は機先を制せられて、手も足も出ない形であつた。

これ以後、我が海軍は海上權を確實に維持するために、索敵を行つてゐた。

かゝるうちに九月十五日、陸軍が平壤を占領した。

明けて十六日、司令長官伊東祐亨中將は、全艦隊を引きつれて、大同江口の根據地を出た。

十七日の朝、海洋島の沖を通つて、北東の大洋江口に向つた。

敵の旗艦定遠が、大同江口にひそんでゐるのを知つたからだ。

日清開戦當時の日本と清國との海軍勢力を比較して見ると、

日本

軍艦二十八隻、水雷艇二十四隻、總排水量噸數五萬九千〇六十八噸

清國

軍艦六十三隻、水雷艇二十四隻、總排水量噸數八萬四千餘であつた。

また、その主力艦を比較して見ても、清國の主力艦定遠、鎮遠は、七千三百五十噸で三十糎砲四門を備へてゐる。四十年前にしては、驚くべき大戦艦である。

日本は最大軍艦松島でさへも四千二百七十八噸であつた。

この貧弱な艦隊をもつて、どうして戦ふのか。

しかし、かうした量の上から見ると、確かに清國艦隊はわが國に優れてゐるが、戦争は決して量の大小によつて勝ち負けが、決まるものでなく、寧ろ質の問題である。

この質——日本海軍の質の優れてゐる點では、到底清國海軍は、日本海軍の敵でないのだ。

當時、浪速の艦長であつた東郷元帥は、清國の海軍を十分に研究し、その結果、

「支那の海軍は、燒身の名刀である」と、斷言した。

殊に、清國の艦隊は戦争となつても、その全部が戦争に参加するのではなかつた。

清國の艦隊には、北洋、南洋、福建、廣東の四艦隊があるが、實際に戦争に参加できる艦隊は、北洋艦隊と廣東艦隊の一部だけであつた。

その總數は、

軍艦二十五隻、水雷艇十三隻、總排水量噸數五萬餘で、むしろ我が艦隊よりも九千トン餘少くなる。だが、その定遠、鎮遠など侮り難い優秀艦を持つてゐたから、決して油断は出来なかつた。

兩軍主力の決戦

いよいよ決戦である。

わが艦隊は第一游撃隊の旗艦吉野を先頭に進んだ。

この日の我が艦隊の陣容は次の如くだ。

第一游撃隊、吉野(坪井少將搭乗)、高千穂、秋津洲、浪速

本隊、松島(伊東司令長官旗艦)、千代田、嚴島、橋立、比叡、扶桑

この外に砲艦赤城、御用船西京丸等。

(西京丸には時の大本營參謀官(軍令部長)樺山中將が自ら艦隊を激勵するために乗つてゐた)

九月十七日朝まだき、わが艦隊は見事な單縦陣をなして、大孤山の沖を進んだ。

昨夜まで、風雨の烈しかった海上も、今は全く晴れ渡り、さわやかな冷涼の秋風が、海上を渡る。海は碧で鏡の如く、波は和かであった。

たゞ空をこがす黒煙が濛々として戦ひの近づいたことを思はせる。

午前十時二十三分、先頭の吉野艦の右舷はるかな北東に、かすかに立ち上る煙を見つけた。

いよいよ丁汝昌の北洋艦隊が出て来たのだ。

伊東司令長官は、たゞちに游撃戦隊に攻撃の命令を下した。

やがて十一時三十分、我が艦隊は直ちに單縦陣を取り、赤城及び西京丸を艦隊の列外に配置し、各艦は翻翻たる大軍艦旗を掲げて、戦機の熟するのを待った。

敵艦隊は速力七ノット、三艦群陣の陣形をとり、定遠、鎮遠の二隻を先頭に、左翼に來遠、致遠、廣甲、濟遠、右翼には經遠、靖遠、超勇、揚威等を隨へ、堂々として我が艦隊目がけて航進して来た。

わが艦隊は十ノットの速力で、敵に近づいた。

午後一時十分前、敵の旗艦定遠は約六千米を離れて先づ火蓋を切った。その他の敵艦も射撃して吉野の近くに物凄い水煙が立つた。

しかし、我が艦隊は少しも動ぜず、黙々と距離を狭めて行つた。

彼我の距離三千米になつた時、坪井司令長官の攻撃開始の命令が下つた。

先頭の吉野が、敵の右翼艦を撃ち、次いで、高千穂は定遠を砲撃し、秋津洲、浪速と順次に砲火を開き、こゝに壯烈なる大海戦が開始された。

わが速射砲は、こゝぞとばかり、猛威を振ふ。

敵艦超勇は、早くも火災を起して、赤黒い煙につままれた。揚威にも火の手が上つた。

遂に、超勇、揚威は鴨綠江近くの陸地へ向つて逃げ出した。

敵艦隊の右翼が亂れたので、更にわが艦は、左翼の攻撃に移つた。

提督旗をかゝげた定遠のマストと、鎮遠のマストは、わが砲弾のために折られ、信號旗も悉く焼失したので、各艦に對して號令することも出来ず、敵艦は、統制がとれなくて支離滅裂に亂れかけて来た。

我が艦隊は、早くも敵の左翼艦の速力が遅いのを見て、先づこれに猛射を浴びせかけた。

經遠、超勇、揚威を大破し、又右翼の致遠及廣甲を撃沈した。

敵の主力艦である定遠、鎮遠もまた相次いで火災を起し、見苦しい恰好でた打つてゐる。

逆立に沈む敵艦

しかし、わが軍も中々の苦戦だった。

我が本隊の比叡は、定遠と來遠の包圍に陥つた。

比叡の艦長櫻井少佐は、自爆の覚悟で、艦を定遠と來遠との間に突入させた。

三艦の猛烈な射合ひで、砲煙はもうくくと邊りに立ちこめ、比叡は火を噴きながら、走りつづけた。

その時、來遠との距離僅か四百米、真に舷々相摩す接觸ぶりで、敵艦の甲板に、多数の支那兵が群つて、手に手に青龍刀を振りかざして喚き叫んでゐるのが手にとるやうに見える。

比叡艦上より、忽ちノンデンフェルト機關砲（機關銃の舊式なもの）が、ド、ド、ド、ドッと火を吐く。支那兵は悲鳴をあげて、薙ぎ倒された。まさか、こんな近くから機銃の掃射を受けようとは、夢にも思はなかつたであらう。

來遠から比叡に止めを刺すために頻りに魚雷を發射する。比叡は巧みにこれを避けて苦戦奮闘し

たが、遂に、

「本艦火災、列外に出づ。」

との信號を掲げて、戦列を脱した。

赤城もまた來遠、致遠、廣甲の三隻に包圍攻撃を受け、三十以上の敵弾を受けて火災を起したが勇敢に戦ひ、必死の一弾は、來遠の急所に命中し、敵艦に火の手が上つた。幕下が横綱を屠つたよりも大きな驚異だ。これに怯んだ敵艦は、忽ち包圍を解いて逃げ出した。こゝで赤城は全速力で本隊の戦場へ急行した。しかし、艦長坂本八郎少佐は敵弾をうけて壯烈な戦死を遂げた。

西京丸も亦苦戦だった。

元々、西京丸は商船だ。速力は早い、十二糎砲一門と小砲二門の戦闘力は取るに足らないものだ。

それにも拘らず、敵艦揚威に火の手が上るや、これを攻撃し、定遠、鎮遠が遠距離から、三十糎砲弾を浴びせかけても、平然として、攻撃の手をゆるめなかつた。

その内に、敵の水雷艇「福龍」が襲撃して來た。小砲を射たうとしたが、不發だった。

敵の魚雷は、一直線に西京丸の胴腹目がけて走ってくる。樺山中將以下、悉く戦死を覺悟した。

だが、何たる天佑ぞ、魚雷は西京丸の船腹の底をくゞつて通りぬけ、反対の舷側にぽかんと浮かんだ。しかし、福龍はさらに第二の魚雷を發した。乗員一同今度こそ戦死と観念した。しかし、これもまた第一の魚雷と同じく船腹の底を通りぬけた。そこへ、我が軍艦が馳けつけたので、福龍は逸早く逃げた。

戦端を開いてから約二時間、これで第一回の射合ひは終つた。

わが、比叡、西京丸が、大膽な冒險をやつて、戦場から退き、敵は、左右兩翼の陣形が亂れてしまひ、いよ／＼狼狽の極に達した。

やがて、第二回の射合ひが始つた。

わが軍は鎮遠と定遠に砲火を集中し、定遠は大火災を起した。

敵艦致遠は、相續く敗戦に氣が變になつたのか、やけになつて我が游撃隊の吉野、高千穂に艦首をぶツつけようと猛然突入して來た。

小癩千萬！ とばかり、私の放つた巨弾は見事致遠の急所を射貫き、艦體は忽ち逆立ちになつて赤い腹を見せながら沈没してしまつた。

午後三時二十六分、鎮遠の射つた三十糎砲の巨弾二發が我が旗艦松島の甲板に命中した。

それと同時に、松島の火薬庫に火が廻つて轟然たる大爆發が起り、忽ち艦上一面が濛々たる火煙につゝまれた。

この時の死傷者は志摩大尉以下六十八名に及んだ。

軍歌「勇敢なる水兵」として、廣く知られてゐる話は、實にこの時に起つた實景である。

「勇敢なる水兵」——三浦虎次郎三等水兵は、裂飛んだ砲身の蔭から、血のにじむ焼けたゞれた顔をもたげ、通りかゝつた副艦長向山少佐に、

「定遠はまだ沈みませぬかッ。」

息も絶え／＼に言つた。

死んでも、敵を登さゞれば已まぬ勁烈な戦鬪意識の叫びだ。

副艦長は、その愛國の至情にうたれ、しばらく言葉を發することが出来なかつた。

海上では、我が松島がこの大損害にもひるまず應戦した砲彈が當つて、定遠は火につゝまれてゐる。

「見ろ！ 定遠には火が上つてゐる。沈没も直ぐだぞ！」

副艦長は、三浦水兵を抱き起して、定遠の方を指した。

三浦水兵は、満足な笑みを残して、息を引取った。残念ながら、松島は砲は碎け、マストは傾き、戦闘不可能となつたので、四時七分、伊東司令長官の命令で艦列を離れた。

游撃隊は、本隊の苦戦と違つて、敵艦追撃をつゞけ、吉野、高千穂は經遠を撃沈した。

敵の經遠艦長林永升は、沈没の前にピストルで自殺し、經遠は焰と煙に包まれ、左に傾いて沈むまで戦つたのは、敵ながら壯烈だつた。

黄海海戦は、夕暗と共に終りに近づいた。

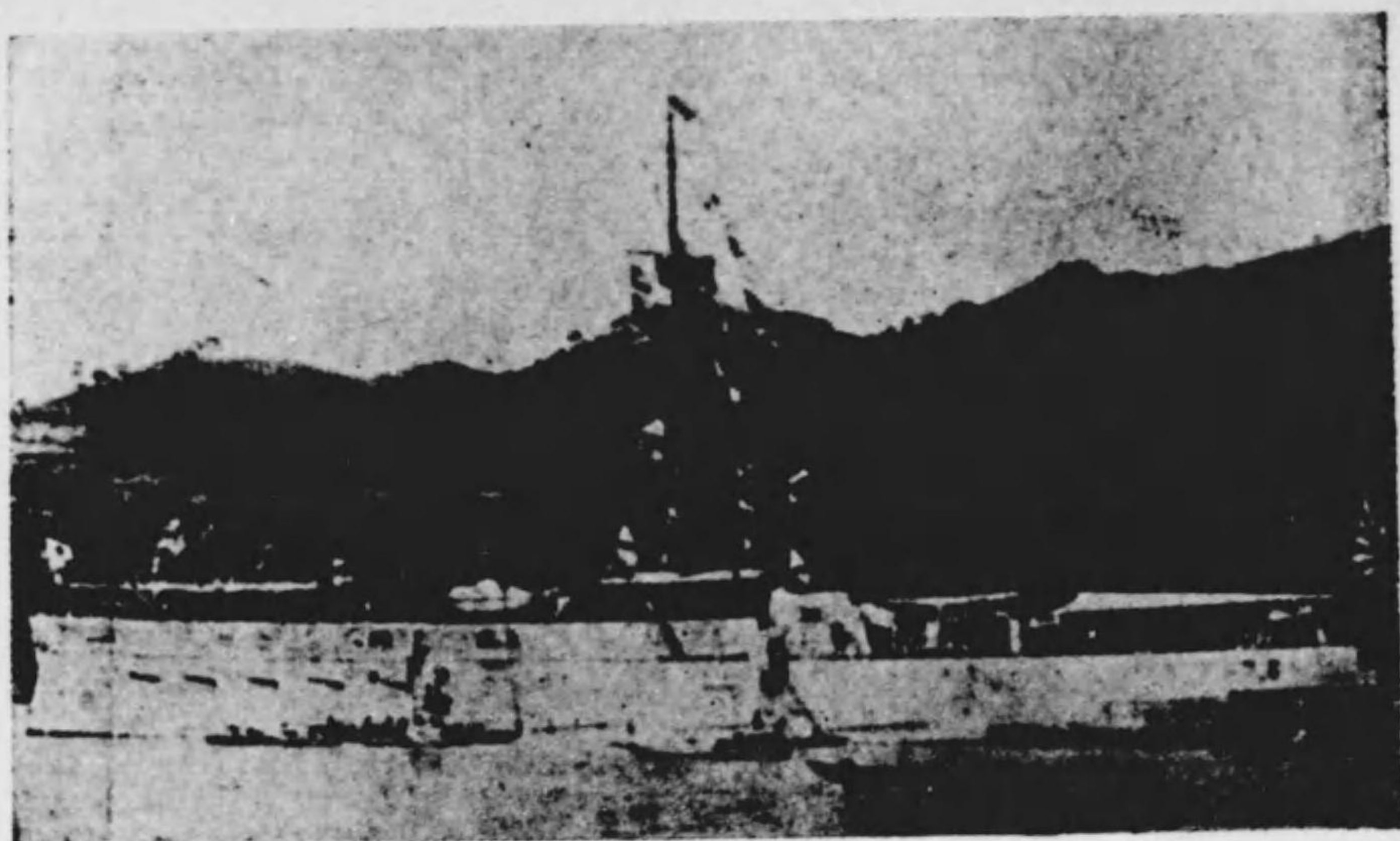
この戦ひで、敵は致遠、經遠、揚威、超勇を沈められ、廣甲は大連灣で爆沈した。

我が艦隊の大勝利である。

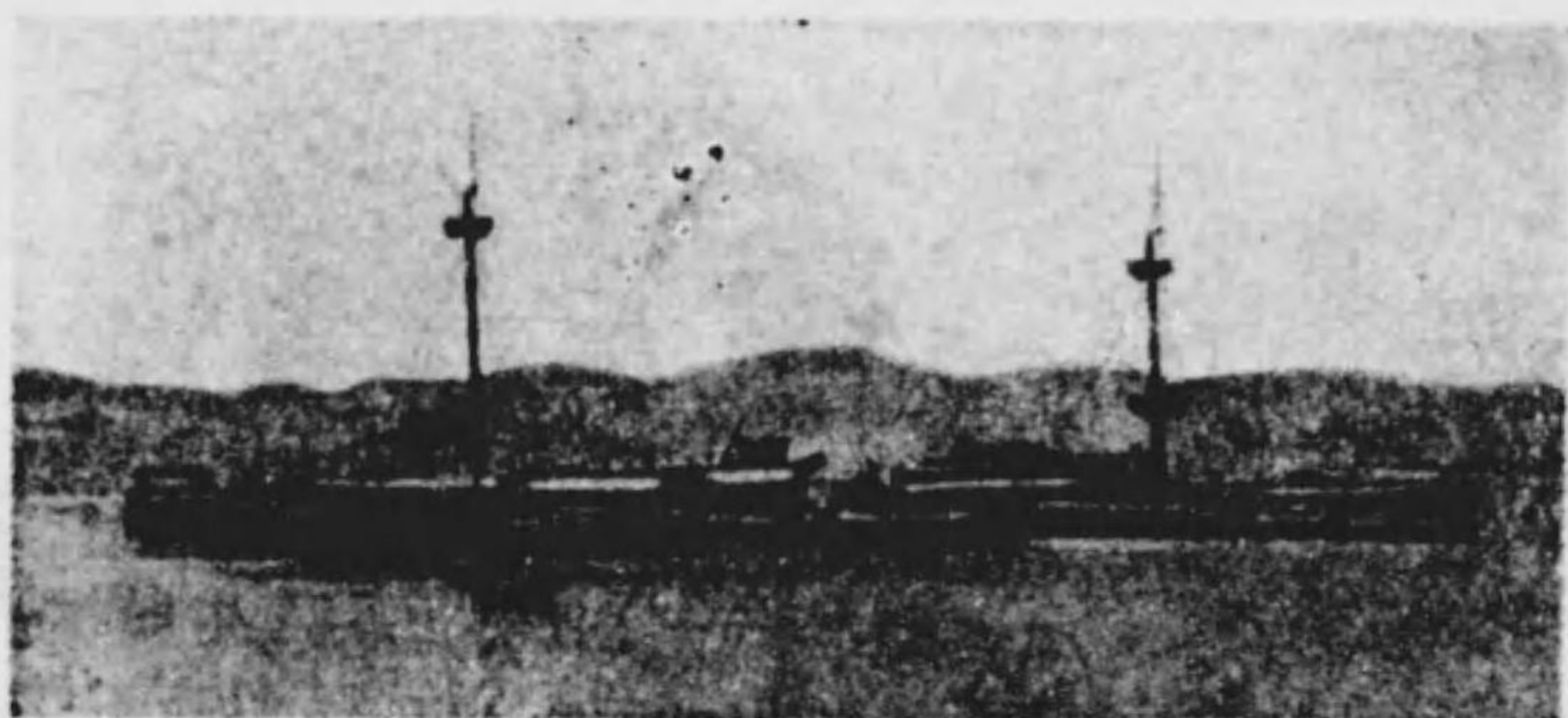
その時、我が艦隊は、水雷艇を伴つてゐなかつたので、敵艦追撃は夕方までに止め、丁汝昌は残りの敵艦をまとめて、旅順方面へ逃げ去つた。

北朝鮮、鴨綠江の沖、黄海の海戦はかくして終つたのである。

この海戦によつて、我が海軍は黄海一帯の制海権を確保し、我が陸軍は、どしどし遼東半島に上陸し、又山東の榮城灣に上陸し、海陸協力して威海衛に迫つた。



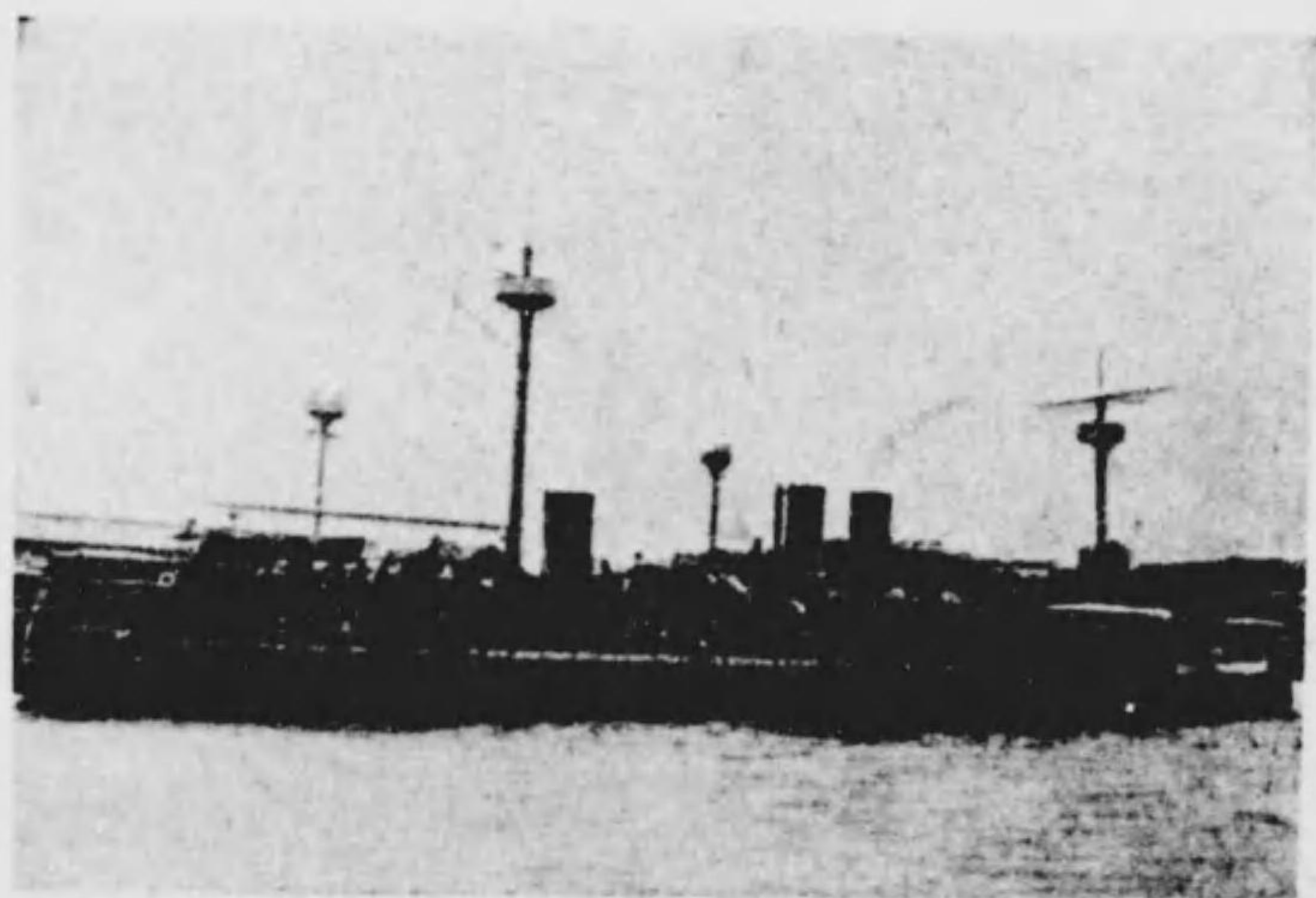
日清海戦に於ける松島艦



清國軍艦定遠號
(我が水雷艇よりに破壊せらる)



北洋水師提督丁汝昌



(清國軍艦定遠號)

清國軍艦定遠號(横須賀軍港留碇)

我が水雷艇隊の大活躍

我が軍は、戦端を開始して以來、海上でも陸上でも、至る所に大いに清軍を壓迫してゐたが、丁汝昌の率ゐる北洋艦隊の大半は、なほも威海衛に立籠つてなかく降伏しさうもなかつた。それで伊東聯合艦隊司令長官は、水雷艇隊を威海衛の港内に突入させ、碇泊中の北洋艦隊に魚雷攻撃を加へることを決心した。

伊東長官の命令を受けた我が十隻の水雷艇は、明治二十八年二月五日午前三時を期して根據地を出發し、威海衛の港口に勇躍突進した。

折から港口には、大きな木材を鐵の鎖でつないで封鎖されてあつたが、我が水雷艇は、遂ひにそれを突破して、碇泊中の敵の軍艦を目掛けて一齊に魚雷を發射した。

サーチライトで我が艇隊を發見した敵は、陸上の砲臺からも、艦上の大砲からも、猛烈に砲火を浴びせかけた。

この時、我が第九、第六號艇は少からず損害を受けた。この攻撃では、敵の旗艦定遠に損害を與

へただけで徹底的な戦果を擧げることが出来なかつた。

それで、つゞいて翌二月六日の夜明け前に夜襲が繰返へされた。この日は風強く波荒れ、眞暗な海上を航行するのは、非常に危険であつたが、我が水雷艇隊は、午前二時三十分、頬の千切れるやうな寒風を衝いて出發した。前回の襲撃といひ、今度の襲撃といひ、死生を超越した心境の下に行はれたもので、一死皇國に報ずる帝國海軍にして初めて爲し得ることだ。

敵は前日の攻撃に懲りて大いに警戒し、サーチライトで絶間もなく港口を照らしてゐる。砲撃は前夜よりも一層激しい。

しかし我が水雷艇隊は遮二無二突進した。日露戦争における旅順港内の戦艦夜襲も、閉塞戦も、さらに大東亞戦における各海戦も、實にこの傳統的精神を受け繼いだものである。

この夜の夜襲は實に壯烈極まるものであつた。敵が眞晝のやうに探照燈を照らして我が水雷艇を猛射すれば、我はその中を潜つて入れ代り立ち代り敵艦へ魚雷を打込んだ。一瞬にして轟沈する敵艦、炎々として燃えあがる巨艦、甲板と波とがすれ／＼になるまで傾斜するもの——正に阿鼻叫喚の場面を現出した。

かゝる困難にして危険なる夜襲を終へて、各艇が根據地にかへつて來たのは午前七時三十分であ

つたが、この夜襲の結果、敵の來遠、威遠、寶華の三隻はいづれも港内に沈没してしまつた。

しかも我が主力艦隊は、旗艦松島を先頭にして、時を移さず總攻撃を始めたのだ。

かくて世界にその名を謳はれてゐた北洋艦隊も、こゝに敢へない最期を遂げた。

二月十二日、敵の司令長官丁汝昌は、我が聯合艦隊司令長官伊東祐亨中將の降伏勸告狀に應じて直ちに降伏書を送り、部下の將兵の保全を頼み、毒を飲んで自殺した。

その他鎮遠艦長林泰曹も自殺し、定遠艦長劉步蟾も亦、敗戦を憤慨しながら自殺したのは、實に悲痛な最期であつた。

この三將は北洋水師（海軍）の名將であつた。黄海の海戦で、激烈な奮闘を試みたのも、この丁、林、劉の三人があつてこそなし得たのであつた。

二月十七日には生残りの鎮遠以下十隻の降伏艦に、日章旗が翻翻とひるがへつたのである。

この威海衛陥落後僅か二ヶ月で、日本の大勝利のうちに日清戦争は終つた。

丁度日本海海戦の大勝利の後間もなく、日露戦争が終つたやうに——。

「海戦は最後の勝利を決す。」

そして日清海戦の最後の勝敗を決したのは、勇躍挺身して、一七深く敵中に突入して敵の主力を

屠つた我が水雷艇隊の奮戦であつた。
 世界各國の海軍は、それまで水雷艇に重きを置いてゐなかつたが、威海衛における日本水雷艇の活躍と、その偉大なる戦果に示唆を受くるところ多く、その後大いに水雷艇の増強に力を注ぐやうになつた。

敵艦鎮遠の錨

この黄海の大海戦で、敵艦の内最も奮戦したのは鎮遠であつた。

わが旗艦松島に二發の巨弾を打込んで大損害を與へたのも彼である。わが海軍にとつては、實に恨み骨髓に徹する敵である。

これが、今わが軍の手によつて捕獲され、そのマストには高く日章旗が掲げられ、艦尾にはわが軍艦旗が翻つてゐるのだ。

鎮遠は、清國が日本との一戦免かれずと見て、その海戦に備へるため、姉妹艦定遠と共にドイツに注文して建造した甲鐵艦で、明治十四年に進水した。

排水量七千三百三十五トン、三十四糎半クルップ砲四門、十五糎砲二門その他小口径砲十六門、魚雷發射管三門を有し、單に東洋ばかりでなく、當時世界各國を通じての巨艦であつた。それに對しわが旗艦松島は四千二百七十八トンに過ぎなかつた。

この艦長の林泰曹といふ少將は、清國海軍中の逸物であつた。

日清開戦直前、清國の提督丁汝昌は定遠に、林泰曹は鎮遠に乗つて日本を訪れたことがある。それはこの兩艦の威力を誇示して、暗に日本海軍を威壓しようといふ淺はかな目的を持つてゐた。

丁汝昌は、安藝の宮島に日本朝野の名士を招待して盛宴を張つたが、東郷元帥（當時大佐）は、偶然にもその林泰曹と向ひあつて着席した。

林も、日本に東郷といふ傑物のあることを知つてゐたし、東郷も亦、林の人物をよく知つてゐたので、双方とも心の中では「此奴」といふ氣が起つたが、表面はそ知らぬ顔で過ごし、

「何れ此奴と戦ふことにならう。」

と、考へたのも矢張り同様であつたらう。

それが、いよいよ事實となつて、東郷の浪速と林の鎮遠とは開戦直前に牙山沖で出會つて、この時もとゞ睨みあつて無言のまゝ過した。

黄海で兩艦隊主力の決戦となると、鎮遠が最も勇敢に、且つ巧妙に戦つたが、東郷浪速艦長は、流石は林が坐乗してゐるだけ他の軍艦に比べて群を抜いてゐると感心したぐらゐである。

今やその林も自殺し、鎮遠は我が有に歸した。何かしら、「勝利者の哀愁」といふやうなものがひし／＼と感じられる。

その後、鎮遠はわが國に廻航して修理の上、或ひは聯合艦隊の旗艦となり、或ひは臺灣遠征に従ひ、或ひは運用術練習艦となつて役務に従事してゐたが、帝國海軍の進歩發達に伴つて、往時の優秀艦もだん／＼老齡となり、遂に廢艦となつて、わが海軍の研究射撃標的艦となつた。

いよ／＼鎮遠が伊勢灣で撃沈されることになつた時、ある有志がこれを記念するためその錨を貰ひさげて上野公園不忍池畔の一角（鐘樓の下方）に置いて、一般者に觀覽させることになつた。今もなほこの儘になつてゐるが、餘りこれを知つてゐる人は少いやうだ。

そこで、海洋思想の普及を目的とする文學者によつて結成された「くろがね會」は、當局の指示を得て、その鎮遠の錨のある場所に碑文を建てた。

これを見て、往時の大海戦を追懐することは、蓋し海國日本の國民として、さらに戦時下日本の國民として、極めて有意義なことであらう。

旅順艦隊覆滅

血祭の仁川沖海戦

日露の風雲がいよ／＼險惡となつてきた時、露國は東亞侵略の據點として、旅順口の開發を急ぎ、日に日に老大な兵員と軍需資材を運びこみ、夜を日について日本との戦ひに備へつゝあつた。

そして、既に旅順港内には、ロシア太平洋艦隊が黄色い煙突から黒煙をあげ、青い軍艦旗をひるがへして、傲慢に頑張つてゐた。

露國の侵略主義は、日清戦争後、ますます露骨になつて、朝鮮を中心とする問題で、我が國の堪え難い難題を持ちかけ、無理無體に平地に波瀾を起した。これを日本が何處までも忍び通せば、遂に自國の存立を危くするばかりでなく、朝鮮も支那もその毒牙にかゝり、延いて東亞に一大禍根を張ることになる。即ち日本は自衛上敢然として起つたのだ。今次の大東亞戦争の原因と全く同様である。

・この旅順艦隊覆滅戦を記する前に、當時の日露海軍の勢力について簡単に述べてみよう。
日露開戦直前の日本海軍は、

三笠、敷島、初瀬、朝日、富士、八島等の各戦艦、出雲、磐手、常盤、八雲、吾妻、淺間、日進、春日等の各装甲巡洋艦、千歳、對島、笠置、音羽、新高等の各輕巡洋艦及び日清戦争當時より軍艦など合せて、總勢力約二十六萬噸であつた。

ロシア太平洋艦隊の海軍兵力は、

戦艦七隻、装甲巡洋艦四隻、巡洋艦十隻、これに砲艦及び驅逐艇とを合せて、合計十九萬千餘噸であつた。

以上の通り、總噸數より見れば、我が海軍の方がやゝ彼より勝つてゐるが、事實、我が海軍には戦闘能力の劣つた舊式艦が少くなかつたので、むしろ露國の勢力より小であつたのだ。

然し、量は兎も角質の點において我が海軍は斷然露國よりも優れてゐた。

即ち、我が海軍の士氣の旺盛なること、戦略及び技術の優秀なることによつて、戦ふ前から既に露國艦隊を壓してゐた。

明治三十七年二月五日、帝國陸海軍に對して戦闘開始命令が下るや、東郷聯合艦隊司令長官は、翌六日麾下の艦隊を率ゐて、威風堂々佐世保軍港を出發した。

思へば、日清戦争の際、帝國海軍が舳艫相銜んでこの軍港を出發してから已に十年の歳月を過ぎ

た。その時も國運を賭けた戦争であつた。今度も亦、國運をかけた戦争であり、しかも敵は世界の最大強國なのだ。けれども、必勝不敗の堅い自信と、熱烈なる愛國の至情と、さらに鐵石の如き一大覺悟を持つ我が帝國海軍の將士は、既に敵を呑むの慨を以て勇躍征途に上つた。

七日、聯合艦隊は第一の獲物として、早くも露商船ロシア號を拿捕し、幸先よしと欣然北上した。

同日午後一時過ぎ、シソガル島附近で、瓜生少將指揮の艦隊は高千穂、浪速、明石、新高及び淺間を率ゐ、聯合艦隊と別れて仁川に向ひ、聯合艦隊は、一路、敵を索めて、旅順攻撃に進んだ。

瓜生艦隊は我が運送船を援護して、陸軍部隊を仁川に揚陸させる任務と、仁川港にゐる露艦コロイツ、ワリヤグを撃つ目的をもつてゐた。

八日午後四時半、八尾島附近に達した。

その時、露艦コロイツが今しも仁川港を出て、外海に逃げようとするのを發見、「好敵逃がすな」と許り、三隻の驅逐艇を放つて、彼を脅やかした。

砲火は先づコロイツより開かれた。

これが日露戦争最初の第一弾である。

しかもコロイツは、忽ち仁川港内に逃げて、交戦を避けたので、我が軍は早速その夜のうちに運

送船内に待期してゐた大部隊の陸軍を上陸させた。それが終つてから、仁川の露國及び各國の居留地等に對して公文を送り、コレーツの出港を促した。

コレーツが若し港外に出なければ、我が海軍は已むなく港内に於て砲撃を加へなければならぬからだ。そのために、中立國人の生命、財産が脅かされるといけない——といふ、あくまで正々堂々たる我が帝國海軍の態度である。

二月九日正午を過ぎること十分、ワリヤーグ、コレーツの二艦は、敵ながら健氣けんきにも戦闘旗をマストにひるがへして、仁川を抜錨し、八尾島の北方に航進して來た。

待ち構へた瓜生艦隊は直ちに砲火を集中して痛撃を加へ、淺間より發した第一弾は、一發必中の鮮かな手並も見事にワリヤーグの要部に命中した。忽ち敵艦は猛火に包まれた。一時間の後には、もはや、露艦は戦闘力を失つて仁川港内に敗退し、ワリヤーグは遂に火災のため半分沈没し、コレーツは爆沈した。

この戦闘を、沿岸や近海から見てゐた各國の人々は、世界に強大を誇つてゐた露艦の呆つ氣ない最期を見て、今更ながら、日本海軍の恐ろしい威力を知ると同時に心ひそかに「日本警戒すべし」と感じた。

かくして、朝鮮一帯の制海權は、忽ち我が手中に收められ、敵艦隊の蠢動を封じた。

旅順奇襲第一弾

旅順に向つた聯合艦隊は、八日午後六時圓島の南方に着いた。この時東郷司令長官は驅逐隊に命令して、

「豫定の如く進撃せよ、一同の成功を祈る。」との信號を掲げた。

日露海戦史上、特記すべき最初の旅順口奇襲が、今やまさに敢行されようとしてゐるのだ。

命を受けた我が第一、第二、第三驅逐隊は、暗の舞臺に先陣を承つた欣びに勇んで、黑暗々たる夜陰に乗じ、敵の警戒を突破した。そして晝をあさむく許りの敵のサトチライトの光と、霞の如き砲火をくゞつて港口に突進し、各々數發の魚雷を發射し、勝どきをあげて引揚げた。

この時、敵艦バルラーダは爆發し、ツアレヅツチの艦底は大破された。

この夜、敵の主腦者は殆ど上陸して、徹夜をして踊り、且つ痛飲してゐたが、港内に轟く砲聲を

聽いて、夜中にも拘らず、よく演習をやると感心してゐたが、やがて日本海軍の襲撃といふ報告に接し、氣も狂はんばかりに驚き、踊りの席上にゐた女たちは、悲鳴をあげて騒ぎまはるなど、一瞬にして地獄と化したのであつた。

敵はこの奇襲に遭つて、開戦早々意外の大打撃を受け、將卒の狼狽甚だしく、士氣は大いに沮喪した。

これは、今次の大東亞戦争で、我が帝國海軍が、敵の意表に出て、ハワイの大奇襲を敢行したとと揆を一にするものだ。

ロシアは、我が國が宣戦布告をせずして、突然夜襲を行つたのを非難し、深く我れを恨んだが、國交斷絶の日最後通牒の發せられた後はどんな自由な行動をとつても何の不思議もない。

我が海軍は、日清戦争當時の経験から見て、制海權を獲得するのが最も重要で、かつ急を要するといふ事を痛感してゐたので、いはゆる機先を制して敵の度膽をぬいたのである。

この奇襲作戦は、むしろ豫期以上に成功し、敵艦はそれ以後といふもの、旅順港内にとち込められて一步も外には出られなくなつた。

翌九日の朝、前夜の奇襲の大成功に、氣をよくした東郷司令長官は、さらに大きな戦果を収むべ

く、聯合艦隊を率ゐて肅々旅順港口に進航した。

午前十一時五十分、旅順港の港口近くに進んだ聯合艦隊は、先づ旗艦三笠の前部十二吋砲が、敵艦に向つて火蓋を切つたのを合圖に、一齊に砲門を開いた。

敵艦隊は、陸上の砲台と呼應して、我が艦隊に應戦したが、わが猛攻に堪へかねて、間もなく隊形が亂れ、前夜の痛手で、士氣は衰へ、我が艦が八千メートルの近距離に肉薄したのに對し、露艦隊は迎へ撃つべく出ようとしなかつた。

我が艦隊は、努めて敵を誘出して一大決戦を行はうとしたのだが、露艦隊がますます後退するの

で、思ふ存分に砲撃を加へ、多大の損傷をあたへた上、意氣揚々として引揚げた。
丁度その日は、仁川に於て敵艦二隻を撃滅したのと同じ日であつて、この旅順と仁川における緒戦の大勝利は早くも國內に傳はり、國民の血を湧かした。著者は、その頃まだ子供であつたが、その時の國民の感激は恰もハワイ海戦其他の大勝利の快報に接した時の感激と同様であつたことを記憶してゐる。

東郷司令長官は敵が少し怯んだのを見て、此の機逸すべからず——と、矢繼早やに第二の打撃を與へようと決心し、二月十四、十五兩日にわたり、更に驅逐隊を派して強襲を行はしめた。

それは敵を港内に追ひ込み、外海に再び出る勇氣を失はさせようとするのであつた。これは固より大膽にして困難な作戦だが、敵艦を全滅する前に、先づ敵の心を奪ひ、敵の機先を制してしまふ戦略である。

虚を衝かれて狼狽した敵は、果して我が作戦通りに港内に引き籠り、破損艦の修理に多忙を極め専ら防禦の方針を執るに至つた。

退いて天嶮に據り、砲台の援護圏内に入れば、なほ日本海軍と十分に對抗出来ると考へたのだ。緒戦の惨敗によつて既に心を奪はれたロシア艦隊は、もはや根本の戦略を誤るに至つたのである。

彼等は、これだけの軍艦をもちながら、進んで撃つ——といふ氣概も失ひ、軍艦を旅順要塞の附屬物にしてしまつたのだ。

こゝに於て我が海軍は、破天荒の作戦を考へ出し、敵の意表に出て、ます／＼敵を壓迫し、畏縮させる戦略を斷行した。

それは單にロシアばかりでなく、列強の心膽を寒からしめた旅順口の閉塞である。

敵が港から出て、我が軍と戦はうともせず、旅順港内にへばりついてゐる以上、我が軍は飽くまで追窮して、敵を完全に封じ込まねばならない。

何となれば、敵の手足が、なほ自由である間は、假令一時港内に潜んでゐても、我が軍はまだ確實に制海権を得たといふ事は出来ないのだ。

制海権が確實でないと、我が陸軍の輸送及び兵站に非常な危険を感じるため、勢ひ陸上の作戦にも障害を來す惧れがある。

敵はシベリヤ鐵道の輸送力を増加するため、盛に鐵道線路を擴張して、續々大兵を滿洲に急派してゐる。之に對し、我が陸軍が迅速な行動を取らなければ、敵に重要な地點を先に占領されたり、又敵の大兵力を向ふに廻して苦戦しなければならぬのだ。

日露戦争は或る意味に於てシベリヤ鐵道の輸送力と、我が海軍の制海権確保との競争である。戦争に於て如何に輸送力といふものが重要な役割をするか、これによつても分る。

この必要上、我が海軍はどんな犠牲をはらつても、どんな困難を冒しても、旅順の敵艦隊を撃滅するか、又は敵を港内に壓迫し、閉塞して外洋へ出動しないやうにしなければならぬ。

それに、東郷艦隊は、旅順の敵だけが相手ではない。遠いけれどバルチック艦隊があるのだ。もしも旅順艦隊と下手な戦をして怪我をすると、バルチック艦隊が來た時に、危い戦をしなければならぬのだ。

又、旅順艦隊が、わが隙をねらつて黄海を荒しに出て来るのも厄介だ。このために、旅順港口閉塞の冒險的戦闘が敢行されることになった。

第一回旅順港閉塞

旅順港口を、一千噸級から四千噸級の古い汽船五艘を沈めて閉塞することになった。指揮官は、參謀有馬（良橋）中佐である。

敵砲臺の下で作業するのだから、一寸でも生命の惜しい者には出来ないことだ。しかも我が將兵は、みな争つてこの決死隊に入らうとした。

明治三十七年三月二十日、朝鮮の根據地を出た我が艦隊は、二十三日の夕暮、旅順に近い圓島の沖へついた。

死地に乗り入る七十七勇士を乗せた五艘の汽船は、有馬指揮官坐乗の「天津丸」を先頭に、前と後を驅逐隊、艇隊に守られ、利鏢のやうに冴えた三日月を西の空に望みながら、老鐵山の下へ急いだ。

月が沈むと、驅逐隊は港口へ突進して、水雷攻撃をやつた。

敵のサーチライトは、暗夜の海上に稲妻のごとく閃めき、敵弾は雨の如く落下した。

有馬指揮官は、突進の命令を下した。五隻は敵弾をくゞつて、港口へ急いだ。

天津丸は早くも老鐵山の下で岩へ乗り上げた。廣瀬（武夫）少佐の指揮する報國丸は、マストを折られ、艘も艦も大穴をあけられたが、手傷を物ともせず、戦艦レトビザンの近くへ走りこんだ。

豪膽な廣瀬少佐は、悠々と爆薬に火をつけてボートへ飛び乗り、燃え上る火の手を後に、沖に待つてゐる味方の水雷艇めがけて漕ぎ出したのである。

仁川丸は、灣口へもう一足の惜しいところで沈んだ。

指揮してゐた齋藤大尉のボートは、味方の水雷艇が見つからず、とう／＼山東半島まで流されてしまつた。

武陽丸と武州丸は方向を間違へて、灣の外で沈んだ。

このやうにして、第一回閉塞は敵の意表に出たので、我が軍は犠牲者僅か一人を出しただけで、ほかは皆無事で根據地へ還つた。

しかし閉塞船は、敵弾に撃たれ、或は舵を破壊され、又は進路をさへぎられて、豫期してゐた目

的を完全に果すことが出来なかつた。

それにしても、わが海軍の猛烈な生命知らずの戦闘精神は、敵ばかりでなく世界を慄ひ上らした。次に實行されたのは、旅順の敵艦隊に對する猛烈な間接射撃である。

我が海軍は三月十日、こぞつて旅順港外に進み、港内にゐる敵艦に正確な射撃を集中した。

我が海軍は、すでに敵地の距離や形勢などを良く知りぬいてゐたので、老鐵山の上をかすめて、港内にゐる敵艦を砲撃したのだ。

午前十時八分より午後零三十分に至るまでさかんに痛撃を加へた。

旅順港内は、まだ海底の土を浚つて、深くしてゐなかつたので、軍艦の行動の自由を失ひ、港外に通ずる港口にすら、高潮の時でなければ戦艦の出動を障げられ、唯だ手をつかねて、我が巨弾の猛射を浴び、運を天にまかすより外に手段がなかつた。

この日受けた敵の損害は、戦艦レトヴィザン、デーヤナ、カザーンの大破をはじめ、その他多数の艦艇が大損害を受けた。

敵將マカロフ着任

相續く敗戦に、旅順にゐたロシア太平洋艦隊司令長官スタルクは罷免され、悄然として旅順を引揚げて行つた。

そして、新司令長官とし、ステパン・マカロフ中將が補せられた。

大東亞戦争の緒戦に大敗した敵國が、頻々とその長官の罷免や、新任を行つたと同様で、その運命も亦同様の道をたどりつゝあるこそ奇しけれど。

彼は當時その名聲世界に鳴りひびいた提督である。大尉の時に、露土戦争（クリミア戦争）に出征し、水雷艇隊の司令となつて、大いに活躍した。

彼は、水雷艇の襲撃方法をそのまま艦隊の戦法に應用しようとした。

すなはち、小さな軍艦多数で、大きな軍艦に當る——と主張して居つた。

かうした主張に基くマカロフ中將の著した「海戦論」は、世界海軍の戦術に影響するところ多大であつた。

彼は、たしかにロシア海軍の中では、より勝れた戦術家であつたが、一本氣の意思の強い性質で上長におもねる事が大嫌ひであつた。

そのため、部下の者達には尊敬されてゐたが、上官や同僚からは、とかく疎んぜられ、その出世も遅かつた。

日露戦争が始まつてから、長い髯を扱きつゝ、東の空を睥睨し、自分の職の不満を嘆いてゐるところへ、天から降つたやうに、ロシア太平洋艦隊司令長官に補す——といふ命令が來たから、彼は會心の笑を頬にたゞへ、急いで旅装を整へて出發し、三月八日旅順港に着いた。

「マカロフが來た！」

「マカロフ提督だ。」

「マカロフの前には、日本艦隊は手も足も出ないだらう！」

旅順のロシア艦隊は、ウラーを叫んで、急に元氣づいた。

マカロフ着任と同時に、戦艦ベトロパウロフスクに將旗がかゞげられた。

いよいよ、我が東郷大將とマカロフ中將との力競べが始まるのだ。

世界の目は、一齊に兩將龍攘虎搏の力闘に注がれた。

然し、東郷司令長官は、寂然として明鏡の如く澄み切つた心境をもつて、黙々一言もマカロフの事に就いて語らず、たゞ次回の攻撃方法を考へてゐた。

東郷大將の信念は、戦ふべき時に戦ひ、勝つ時には必ず勝てばよいので、相手がスタルクでもマカロフでも、眼中には無かつたのである。

しかも、東郷大將は、以前に海軍大學校長の時、すでにマカロフの「海戦論」を翻譯させて、何度も何度も繰り返して研究し、彼の長所、短所は良く知りつくしてゐたのだ。

軍神廣瀬中佐の戦死

前に述べた我が艦隊の旅順港間接砲撃は、マカロフが旅順に着いて二日目の三月十日に行つたのであるが、港内にゐた敵の戦艦は、丁度この時、引き潮時で、軍艦の吃水が深いために、港口を出ることが出來ず、又老鐵山には一門の大砲もなかつたので、たゞ、ぼんやりと我が艦隊のなすがままにまかすよりほかなかつた。

この時、旗艦ベトロパウロフスクの艦橋に立つてゐたマカロフ中將は、地團太踏んで、憤慨し口惜

しがり、

「あんな澤山な金を使ひながら、港口も漂はず、老鐵山に砲臺も築かず、何といふ油断ぶりだ。」
と、ロシア海軍の怠慢を責め、

「だが、東郷の手並は侮れないぞ、潮時を測つてこつちが出港できない時に思ふ存分間接砲撃をや
り、満潮になる前に悠々と引揚げてしまふとは、心憎い軍上手だ。よしそのうちに目にも見せて
くれよう。」

と怒鳴つた。

如何に世界的名提督といはれたマカロフ中將も、東郷司令長官に對しては、スタルク同様、機先
を制せられてしまつた。

負け嫌ひな彼は、三月十日着任間もなく、一撃を喰つたのに大いに憤激し、あくる日の十一日の
朝、三十餘隻の艦隊を率ゐて、旅順口を出で、我が艦隊に一撃を加へようと、廟島附近まで航行し
てきた。

しかし、そんな事に向頓着しない東郷司令長官は、同月二十二日更に第五次攻撃を試み、第二
回の間接射撃を行つた。

すとの、さすがにマカロフ中將は、前の失敗のやうにはさせず、ロシア艦隊も同じく間接射撃で
我が艦隊に應酬し、又艦隊に出港を命じて、我が艦隊に怖れない姿勢を示した。だがその日は目ぼ
しい海戦はなかつた。

三月二十六日、我が海軍は第二回の閉塞を決行した。

有馬中佐の指揮する千代丸、福井丸、彌彦丸、米山丸は、くら闇の海をしのび／＼黄金山の下へ
近よつた

三キロの所で敵に見つかり、砲彈を亂射されながら、四隻とも思ひ／＼に錨を下して爆沈した。

廣瀬少佐の福井丸の話は、あまりにも有名だから、こゝで省くが、その時の壯烈な情景は、全く
「とゞろくつゝ音、飛び來る彈丸……」の歌で、説明しつくされ、「軍神廣瀬中佐」の奮戦は大い
に國民の士氣を昂揚した。

少佐（戦死後中佐）は、海軍切つての豪傑で、しかも頭は鋭く冴え切つてゐた。

廣瀬中佐は、日露戦争の直前、ロシアに行つて、ロシアの軍人、紳士、貴族の間に「日本人ヒロ
セ」として、絶對的な信頼を博してゐた。

そのために、廣瀬中佐はロシアの事情を良く知り、我が作戦上非常な利益を得たのだ。

生き長らへてゐたら帝國海軍の重鎮となる人であつたのに、かへすぐすも惜しいことをした。しかし、廣瀬中佐の七生報國の誠忠は、今もたほ我が無敵海軍の胸中に生きてゐる。

マカロフ中將の戦死

旗艦三笠の將官室である。

東郷司令長官が卓の前に嚴然と坐してゐる。

「何か御用でありますか。」

一人の將校が、將官室に入つて来て、直立不動の姿勢をとりながら、東郷司令長官に問ひかけた。東郷司令長官は重々しく口を切つた。

「いや御苦勞だつた。實は近頃こつちが攻撃するたびに、マカロフは艦隊を率ゐて出港するが、何時も同一の航路を取り、鮮生嘴せんせいづばの方向で、必ず引き返すのぢや、そこで貴下あなたは、島村參謀長や秋山參謀から詳しいことを聞き取り、その航路に、我が軍の次回の攻撃の前夜水雷を敷設して貰ひたいので、お呼びしたのぢや。能く協議して計畫をたて、くれたまへ。」

「はッ、承知致しました。」

この將校こそ、當時の我が水雷の權威小田中佐で、その考案した小田式水雷の威力は、素晴らしいものであつた。

軍人として、こんな愉快な任務があらうか——と、小田中佐は勇躍感激して、所屬の蛟龍丸に歸つた。

そして、部下の士卒數名を集めて、長官よりの命令を傳へ、永年の苦心もこの一舉に報いられるようにと、神明の加護を祈り、四月十二日の夜半、ひそかに蛟龍丸、第四、第五驅逐隊、第十四號艇隊が旅順砲臺の間近に乗入つた。

その夜、天佑といはうか、細雨が海面をかすませて敵のサーチライトの光を鈍らせ、しかも風が風いで波のうねりも少かつたから、水雷沈置には申分のない天候であつた。

蛟龍丸は、十二の機雷を甲板から號令の聲も低く、みな落し、驅逐隊と艇隊も黄金山下のルチン岩の近くへばらまいて、敵に覺られず引きあげた。

あくる日の十三日、我が第三戰隊の驅逐艦は港口に肉薄して敵に挑戦し、ロシア艦隊の港外に出て來るのを誘つた。

間もなく旅順港口にもうくと黒煙が上り、マカロフの旗艦ペトロパウロフスクを真先に、セヴアストポリ、アスコリド、デイヤーナ、ノーウキク等々の巨艦が続々と現はれ、九隻の駆逐艦さへ伴つて我が巡洋艦隊に打ちかゝつて來た。

出羽司令官の第三戦隊は、砲撃しながらはるか沖合の第一戦隊の方へさそつて、退いて行く。

マカロフ提督は、右先鋒の單艇陣を作つて追つかける。

マカロフ中將は、いつもと違つた我が艦の退却ぶりに、得意になつて追つかけて行く中に、さすがに疑ひの氣持を抱くやうになつた。

はたして、南の水平線に霧をすかして大艦隊が見える。

敵を待ち設けた我が主力艦隊だ。

東郷司令長官の坐乗する旗艦三笠を始め、朝日、富士、八島、敷島、初瀬、春日、日進の八艦は霧の中より現はれ、威風堂々とロシア艦隊を迎へ、これと決戦しようとするのだ。

「退却！」

マカロフ提督は、到底我が艦隊の威容に敵しがたいと見て、退却を命じた。

ペトロパウロフスクは、退却の信號旗をひるがへして、要塞の着弾圏内へ逃げ込む算段だ。

敵艦は退却しながら、逆に、我が艦隊を要塞砲のとゞく距離に誘ひ入れようと、航路を東に向け、鮮生嘴せんせいすゑの方に進んだ。艦橋に立つてゐる東郷司令長官は、双眼鏡を眼に當てて、銅像の如く動かない。

幕僚の將校たちも息づまる思ひで敵を見つめてゐた。一秒、二秒、五秒、十秒――。

ペトロパウロフスクが死の岩、ルチン岩の南へ近づいた時だ。

海の底がもり上つたかと思はれる大きな水煙が、旗艦ペトロパウロフスクの舷側から立ちのぼつて轟然たる爆音が四發つゞけさまに響きわたり、同時に旗艦は眞ツ二つに引き裂かれて、僅か二分間で轟沈してしまつた。うま／＼と東郷司令長官の計畫が成功し兩將の腕くらべは、完全に東郷へ軍配が上つたのだ。わが艦上にはドツと歡聲があがつた。さすがの東郷大將も包みきれぬ喜びに唇を綻ばせてゐた。

唯一の力と恃んだマカロフが、乗艦と運命を共にして海底ふかく没し去つたので、時餘の敵艦は慌てて港内に逃げこむうち、戦艦ポーツグもまた機雷に觸れて大破した。敵側の記録によると、マカロフはいつも出港する時は、先づ掃海を命ずるがこの日は驅逐艦の不始末を怒鳴りちらしてゐる間に、すっかり掃海命令を忘れたらしい。生存者の話によるとマカロフは第一の轟音が起つた時外

套を脱ぎ、二發目の時には、血だらけになつて祈りを捧げてゐたといふことである。
旅順港口の山には、敵の兵隊が戦況を見物してゐたが、旗艦轟沈を目のあたりに見て卒倒した者が多かつたさうだ。それから露艦が盛に水中に向つて發砲したので、山から見つてゐた兵隊は何をするかと疑問を抱いて見てゐたが、あとで入港した露兵から聞くと、鱈を日本の潜水艦と思つて發砲したものと分つた。笑へない滑稽だ。

孤立に陥つた旅順艦隊

この後、我が軍は五月二日の夜、三回目の旅順港口の閉塞を敢行した。

新發田丸、小倉丸、朝顔丸、三河丸、遠江丸、釜山丸、江戸丸、長門丸、小樽丸、佐倉丸、相模丸、愛國丸の中、釜山丸が落伍して、林中佐の指揮で五月二日の夕暮旅順沖についた。
夜がふけるにしたがつて、暴風となり、波が高まつて、小さな汽船は波に弄ばれて、ちりちりになつて、信號がよく分らなかつた

師蹙胤次大尉(現在郷海軍少將として、愛國運動の第一線に活躍)は、眞先に三河丸を指揮して、

水道へ突つこんで、爆薬をしかけ、素早くボートに乗り移つて逃れた。

つゞいて、北清事變の時に、太清砲臺一番乗りをした白石大尉の佐倉丸が爆沈したが、大尉以下敵砲臺へ上陸し、斬つて／＼斬りまくつて全員壯烈な戦死をした。

また本田少佐の指揮する遠江丸は、老虎尾砲臺から射撃されて、燃えながら沈んだ。さらに江戸丸は、指揮官高柳大尉が斃れたので、永田中尉が爆沈させた。

小樽丸は三河丸の近くで爆沈したが、野村指揮官以下十七人枕を並べて悲壯な最期を遂げた。つづいて湯淺大尉の指揮する相模丸も全滅。

犬塚大尉の愛國丸は、敵の機雷にふれて沈没。

今はたゞ最後の一隻となつた向大尉の朝顔丸は、すでにほの／＼と明け初めた視界の中で、敵弾の好目標となり、遂に爆沈して、乗員全部壯烈なる戦死を遂げた。

こんな惨烈な戦闘は、日本以外にはない。

海は荒れる、夜は暗く、砲臺は唸り、電光はひらめく、船は燃え上る。
實に物凄い一夜だつた。

突入した閉塞隊は、皆生死を超越した肉弾である。敵を噓さざれば死んでも死なぬといふ烈しい

敵懐心と戦闘意識に燃えてゐる。この傳統的精神が、こんどのハワイ海戦その他の海戦に現はれたのだ。

このすさまじい我が閉塞戦と、東郷大将の叡智神のごとき作戦で、マロカフ提督を失つたロシア艦隊は、意氣ますく、沈沈していつた。

敵將マカロフの戦死後、ロシアは、いよくバルチック艦隊を東洋に回航することに決定し、バルチック艦隊を太平洋第二艦隊と改め、旅順、浦鹽の艦隊を太平洋第一艦隊として、スクルイドルフ中將を、兩艦隊の總指揮官に任命した。

敵は我が艦隊の威を怖れるあまり、會戦によらずして我が艦隊に打撃を加へようと、五月十四日夜、ひそかに旅順港外に機械水雷を敷設して、東郷艦隊の來るのを待つてゐた。

五月十五日、連勝の東郷艦隊は、思はずも意外な敵の伏兵——機雷に觸れて、恐ろしい深傷を負つた。

この日、我が戦艦初瀬、八島が残念にも沈没したのだ。

しかし、東郷司令長官は少しも騒がず、おどろかず、同月二十六日には關東州南部の沿岸を封鎖するといふ宣言書を公式に發表し、敵艦の脱出を監視した。

すなはち、この時すでに、奥將軍の率ゐる第二軍が遼東半島に上陸して、旅順を後方から攻め始め、又續いて第三軍、第四軍の上陸の準備に忙しかつたので、敵を封鎖して制海權を確保することが、重大な任務であつたからである。

敵は、この形勢を知つて、浦鹽艦隊を活躍せしめ、濃霧に乗じてゲリラ戰術を行ひ、我が輸送船常陸丸、金州丸等はこの犠牲となつたが、蔚山沖の海戦で我が上村艦隊に撃破された。

この間に旅順の背面に迫つた我が乃木軍は、次第々々に攻め進み、敵の第一線、第二線を陥落させ、猛烈な勢で敵を旅順要塞内に追ひ込んだ。

そして、旅順口は今や我が陸海軍の協同攻撃を受けて孤立無援となつた。

黄海の一戦、旅順艦隊を撃滅

八月十日、敵艦隊は大舉、旅順港を出て、戦艦ツアレキッチ以下九隻、ノーヅキックその他巡洋艦、驅逐艦、病院船等ことごとく外洋に乗り出して來た。

敵艦隊は、我が陸軍より背後から砲撃されるのを避けて、浦鹽に逃れ、バルチック艦隊の來るま

で待たうといふ算段である。

しかし、我が海軍はそれを逃がすものか。沖合遠く、「好敵御座んなれ」と網を張つて待つてゐるのだ。

聯合艦隊は八月十日午後一時、敵が山東半島沖の黄海に南下して来るのを見て、砲火を開き、午後八時夕闇の迫るのをまつて、全力をあげて、敵艦隊を全滅すべく大激戦を展開した。

敵の考へでは日本艦隊は開戦以來の戦鬪で汽罐部も痛み、艦體にも故障を生じ、艦腹には速力を弱める貝類が夥しく附着してゐるので、手入れの十分なロシアの軍艦が、全速力で走れば到底日本軍艦は追跡不可能となり、悠々として浦鹽に逃込むことができるといふのであつた。しかしそれは、實戦となつて空しい希望的觀測であることが明かにされた。

忽ち、砲弾は唸り、水柱は天に沖し、敵の巨艦から燄々たる火柱があがつた。

すでにして敵の司令長官ウキトゲフト少將を始め、旗艦ツアレキツチ艦長以下戦死し、巨艦レトウイザンが卑怯にも艦列を離れて、旅順へ逃げかへつたのをきつかけに、忽ち總崩れとなり、ツアレキツチ、アスコリト、グロゾウオイ、デイヤーナ及び敵驅逐艦等は、膠州灣及び上海に逃げ込んで我が艦隊に捕獲され、ペレスウイト、ボベীগ、レトヴィザン、セバストポリ、ボルタワ、バルラ

ーダ等の數隻は、何れも深い痛手を受けて、旅順口に逃げ歸つた。

來るべきバルチック艦隊との海戦に備へ、我が艦隊は自重して、傷ついた敵艦隊を深追ひしなかつた。

又、敵艦中で最も手強く戦つたノーヰキツクだけは、その快速力を利用し、太平洋を迂回して浦鹽に向はうとしたが、我が千歳、對島は直ちにこれを追跡して、樺太のエンヅマ崎の南方で發見し、砲撃を加へて爆沈した。

かくして、旅順敵艦隊の大部分はこの一戦によつて遂に滅亡したのである。

ロシア太平洋艦隊は今や半死半生の姿となつて、僅かに旅順口に哀れた姿を横たへるに至つた。陸上における乃木軍の攻圍戦は、世界戦史上稀にみる壯烈な肉弾戦を繰り返しく、遂に旅順口の背後にある二〇三高地を占領した。この高地から港内は足もとに見える。この高地が我が陸軍の手に歸するや、黄海の海戦に敗れて逃げ込んだペレスウイト以下の敵艦は、皆、山上からの我が軍の砲撃の好目標となつて、たちまち殲滅されてしまつた。

明治三十七年十二月三十日、東郷司令長官は、その第一期の作戦を遺憾なく終了して、一たび帝都に凱旋し、國民歡呼のうちに宮城に參内、畏くも聖上に拜謁して戦況を奏上した。

全國民の東郷司令長官に對する信頼と感謝の念はますます篤く、いたるところで熱誠に歓迎し、文字通り凱旋將軍を迎へる情景を展示した。

けれども、國民はやがて日本の近海に來たらんとするバルチック艦隊との一戦を思ふと、さすがに氣がふりになるものがあつた。

だが、東郷司令長官の黙々たるうちにも、自信満々たる様子を見ると、さらに一層の信頼の念を深めるのであつた。

バルチック艦隊撃滅

敵艦隊、我の思ふ壺に

遂に、待望の電報が這入つた。

明治三十八年五月二十七日午前五時、聯合艦隊の旗艦三笠の無電受信機が、けたましく信音を刻んだ。

西方哨戒の任にあたつてゐる假裝巡洋艦信濃丸からの發信だ。

電文に曰く、

「敵艦隊二〇三地點に見ゆ、敵は東水道に向ふが如し」と。

東水道といふのは、對馬と壹岐との間の水道で、こゝを敵艦が通過する模様であることまで見届けたのは、たしかに信濃丸の殊勳である。

電報は、さつそく聯合艦隊司令長官東郷平八郎大將の手許に持參された。

東郷大將は、じつと電文に見入つてゐたが、

(豫想どほりに、やつて來たわい)

と、ひとりでに會心の微笑が唇頭に浮んだ。
わが聯合艦隊は、朝鮮半島の南端、釜山の西方にあたる鎮海灣に待期して、あらゆる方面からの情報を総合しながら、徐ろに作戦を練つてゐた。

ロシアのバルチック艦隊（ロシアでは第二東洋艦隊と稱す）が、どんなコースをとるかといちばん問題であつた。あるひは太平洋を通つて津輕海峡か宗谷海峡を抜け、その目的地である浦鹽に入港するのではないかといふ説もあつたが、東郷司令長官は必ず對島海峡を通過するといふ自信を持つてゐた。そして、それに對する戦備を整へてゐたのだ。

だから、敵艦隊は全く東郷司令長官の思ふ壺に這入つたわけで、ひとりでに會心の微笑が漏れるのは當然である。午前七時、南方警戒線の左翼哨艦和泉からも警報が這入つた。

それによると、敵艦隊は午前六時五十分、宇久島（五島列島の北端）の北西二十五海里の地點を殆どその全部艦艇を擧げて二列縦陣となり、十二海里の速力を以て一路東水道に向つてゐるといふのであつた。

東郷司令長官は出動命令を發した。

已に、旅順艦隊を全滅し、残存の僅かな浦鹽艦隊を港内ふかく封じこんでしまつた帝國海軍は、

もはや相手にする敵艦がなくて、脾肉の嘆を感じてゐたのであるから、勇氣百倍して出動準備に取りかゝつた。

「軍令部長宛第一報の草案を書いくれ。」

東郷司令長官は、一人の參謀に向つて言つた。

參謀は、さつそくその草案を書いて司令長官に渡した。それには、

「敵艦見ゆとの警報に接し、聯合艦隊は直ちに出動之を邀撃せんとす、本日天氣晴朗なれども波高し」とあつた。

東郷大將はそれを一讀すると、自ら參謀の筆を執つて、

「邀撃ぢやないよ、撃滅するために出動するのだ」

と言ひながら、邀撃を撃滅と訂正した。かうして第一報は二十七日午前六時二十分に發信され、同七時四十分に軍令部の電信室に着信し、たゞちに伊東祐亨軍令部長に手交された。

その電報は、いまなほ軍令部に國寶的なものとして保管されてゐる。

この頃、對馬の根據地に待期してゐた片岡中將の率ゐる巡洋艦隊と、東郷（正路）、出羽兩少將の

率ゐる戦隊は、司令長官の電命に接し、その命令どほり直ちに出勤して、敵と並行しながら接觸を保つて北上した。

この接觸によつて、敵艦隊の様子は手にとるやうに分り、それがいち／＼本隊（東郷司令長官の率ゐる艦隊）へ無電で報告された。敵艦は、これに對して緩漫な砲撃を加へたが、わが艦隊は犬の遠吠にもひとしいものとして相手にしなかつた。

この日、海上には濃氣が深く垂れこめて、視野は五海里ぐらゐしか利かなかつたが、東郷大將はこの報告によつて、數十海里の彼方にある敵艦の陣形を、掌に入れてみるやうに知ることができた。従つて、東郷大將はその陣形に對する攻撃の計畫を定むることができたのだ。

敵艦隊の速力が十二海里だとすると、その日の午後二時ごろに、響灘と對馬の中間に位する筑前の「沖の島」附近を通過することになる。東郷大將はこの附近で敵艦隊を撃滅する計畫のもとに、一路南へ向つて進航した。

果して、その豫測どほり敵艦隊は午後一時四十五分ごろになつて、沖の島の西方の水平線上に、堂々たる陣形を現はしてきた。

五月の空は、拭いたやうに朗らかに冴えてゐるが、玄海の波はいつになく荒ぶれて、さしもの戦

艦も中心を失つたやうに高く低く、あるひは右に左に大きく揺れる。

「この怒濤こそ天佑だ。」

東郷大將は、ひそかにさう思ふのであつた。何となれば、我が艦隊はかゝる怒濤を冒して日露開戦以來幾度も戦闘をしてゐて、十分に腕を練つてゐる。またバルチック艦隊を待つた永い月日の間にも、この玄海灘で猛訓練をつゞけてきたから、いかに波すさぶとも、我が艦隊にとつては少しも恐るゝところはなかつた。

これに反して、敵艦は初めての戦闘であり、それに波が荒れてゐては照準が定まらず、徒らに空砲を撃つやうなことになるのだ。この怒濤こそ、我が軍にとつて正に天佑であつた。

彼我の勢力

東郷大將は、わが艦列の先頭に進む旗艦三笠の前艦橋に立ち、両手で双眼鏡をとつて、敵艦隊の陣形を凝視した。

炯々たる眼光、凛乎たる姿勢——さながら武神の權化のやうだ。敵は、片岡艦隊から報告のあつた

とほり、二列の縦陣を作つて、その右翼列の先頭にボロヂノ型の戦艦四隻の主力戦隊を置き、左翼列にはヲスラビヤ、シツイベリキ、ナワリン、ナヒモフより成る一隊をその先頭に置き、ニコライ一世ほか海防艦三隻より成る一隊これに次ぎ、ゼムチュータ、イズムルードの二艦は兩列の間に介在して、前方を警戒してゐる。

その後の敵艦は、濛氣のためはつきりと見分けることはできないが、しかし、戦艦オレグ、アウロラ以下一二等巡洋艦の一隊らしく、後尾には特務艦や、眞白い病院船などが對馬海峡を壓するが如く凡そ數海里につゞいてゐるのが分る。

東郷大將の傍には、聯合艦隊參謀長加藤友三郎少將その他の幕僚たちが、やはり双眼鏡を手にして、食ひ入るやうに敵の様子を見詰めてゐる。

わが艦は肅々として進み、波はます／＼荒れて舷側から舞上る飛沫は、高い艦橋にまでざつと吹きつけてくる。

敵を監視しながら接觸を保つてきた片岡艦隊も、すでに本隊と合して長蛇の單縦陣をなした。

午後一時四十八分になつて、彼我の距離は僅かに五海里となつた。濛氣は依然として深い、已に敵の全艦が明瞭に視野の中に浮んできた。

戦機は刻々と迫つて来る。

已に、旗艦三笠の檣頭には戦闘旗が掲げられ、各艦もこれに續いて戦闘旗を掲げた。

午後一時五十五分、先頭を征く三笠の檣頭高く一旒の信號旗が翻つた。お、Z旗だ。

皇國の興廢此の一戦に在り、各員一層奮勵努力せよ

との信號だ。仰ぎ見る全艦隊の將士、凜として聲なく、たゞ一死以て皇國に報ぜんとの決意をますます堅くした。

將に、東西の二大艦隊はこゝに國家の興亡を賭けた大激戦を展開せんとしてゐる。

空は晴れ、波はいよ／＼高くなつた。

この日本海海戦における彼我の勢力は左の通りである。

日本

第一艦隊

第一戦隊 三笠、敷島、富士、朝日、日進、通報艦龍田（東郷司令長官直率）

第三戦隊 笠置、千歳、音羽、新高（司令官出羽中將指揮）

第一驅逐隊 春雨、吹雪、有明、霞、曉

第二驅逐隊 隴、電、雷、曙
 第三驅逐隊 東雲、薄雲、漣
 第十四艇隊 千島、隼、真鶴、鶴

第二艦隊

第二戰隊 出雲、吾妻、常盤、八雲、淺間、磐手、通報艦千早（上村司令官直率）
 第四戰隊 浪速、高千穂、明石、對馬（司令官瓜生中將指揮）
 第四驅逐隊 朝霧、村雨、朝潮、白雲
 第五驅逐隊 不知火、叢雲、夕霧、陽炎
 第九艇隊 蒼鷹、雁、燕、鴿
 第十九艇隊 鷗、鴻、雉

第三艦隊

第五戰隊 敷島、鎮遠、松島、橋立、通報艦八重（片岡司令官直率）
 第六戰隊 須磨、千代田、秋津洲、和泉（司令官東郷少將指揮）
 第七戰隊 扶桑、高雄、筑紫、鳥海、摩耶、宇治（司令官山田少將指揮）

第十五艇隊 雲雀、鶉、鰐はたが

第十艇隊 「四十三」「四十」「四十一」「三十九」號艇
 第二十艇隊 「六十五」「六十二」「六十四」「六十三」號艇
 等十一艇隊 「七十三」「七十二」「七十四」「七十五」號艇
 第一艇隊 「六十九」「七十」「六十七」「六十八」號艇

このほかに、附屬特務艦隊二十四隻と四艇隊が参加し大艦小艦合せた百十數隻二十一萬トンで、敵の三十八隻十五萬トンに比べると遙かに優勢であつた。

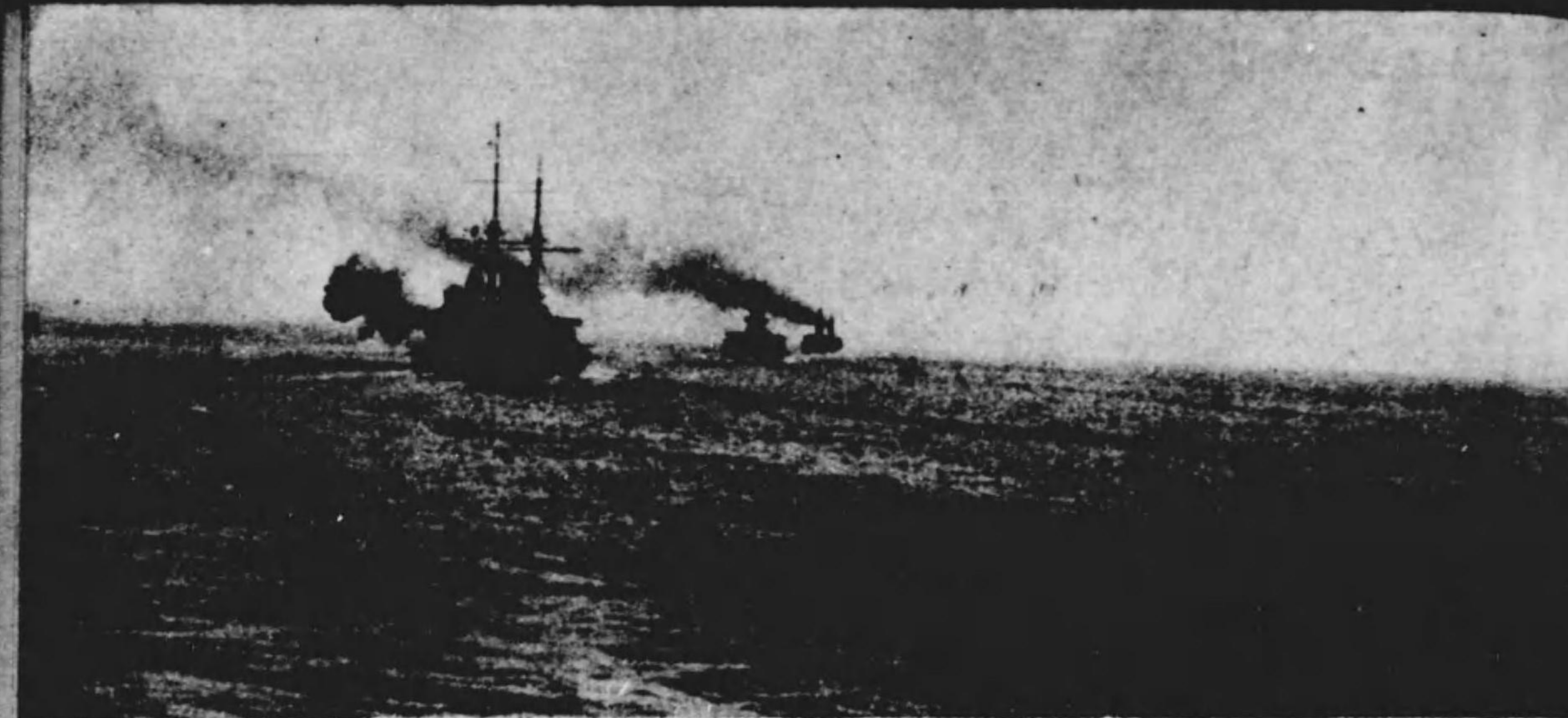
しかし、この怒濤では小艦艇の戦闘参加は困難であり、却つて犠牲を多くする恐れがあつたので水雷艇は根據地に待期させてあつた。

露國艦隊の兵力

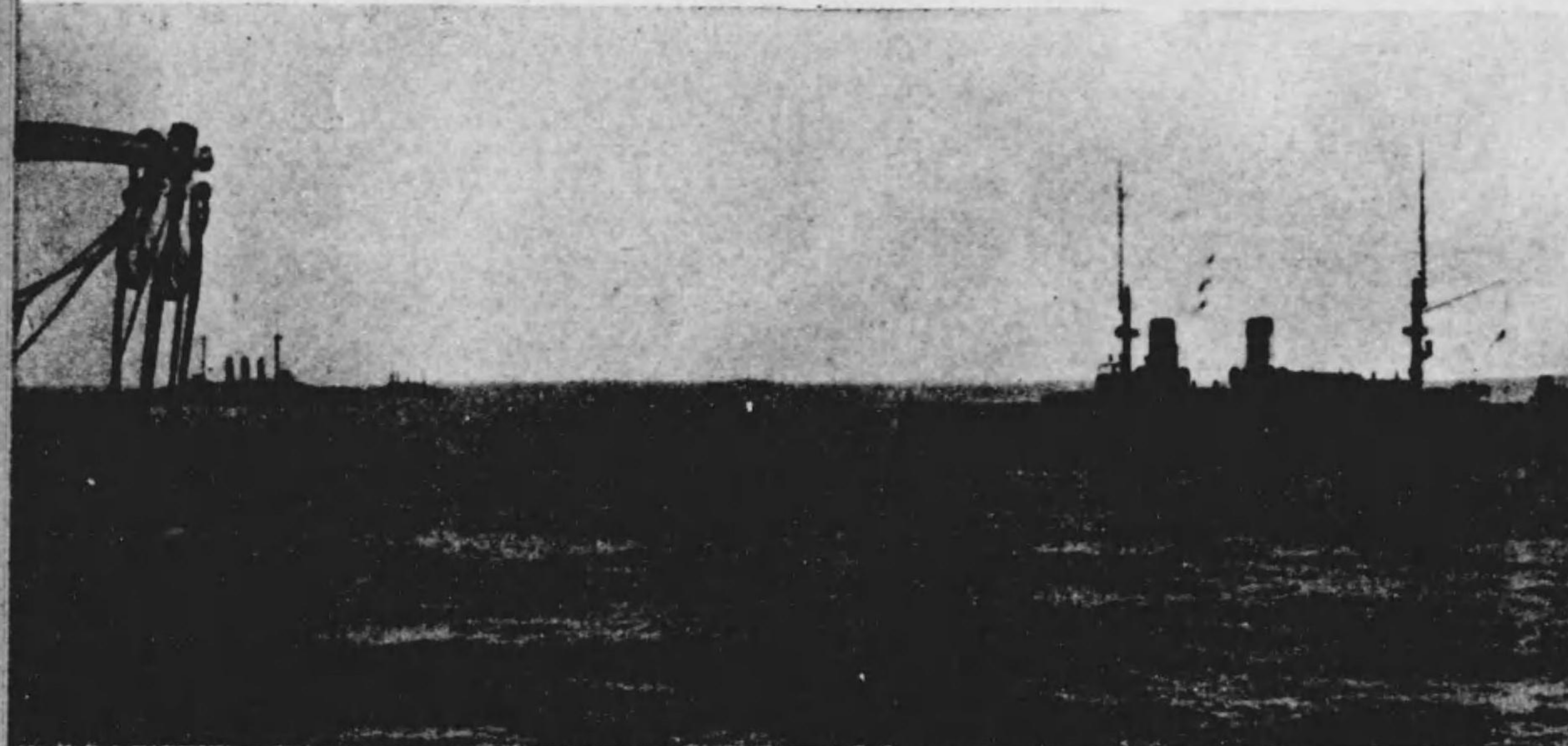
第一戰艦隊 「スウォーロフ」、「アレクサンドル三世」、「ボロヂノ」、「アリオール」（司令長官ロジエストウエンスキー中將直率）

第二戰艦隊 「オストラビヤ」、「シソイウエーリキ」、「ナワリン」、「ナヒモフ」（司令官フェリケル

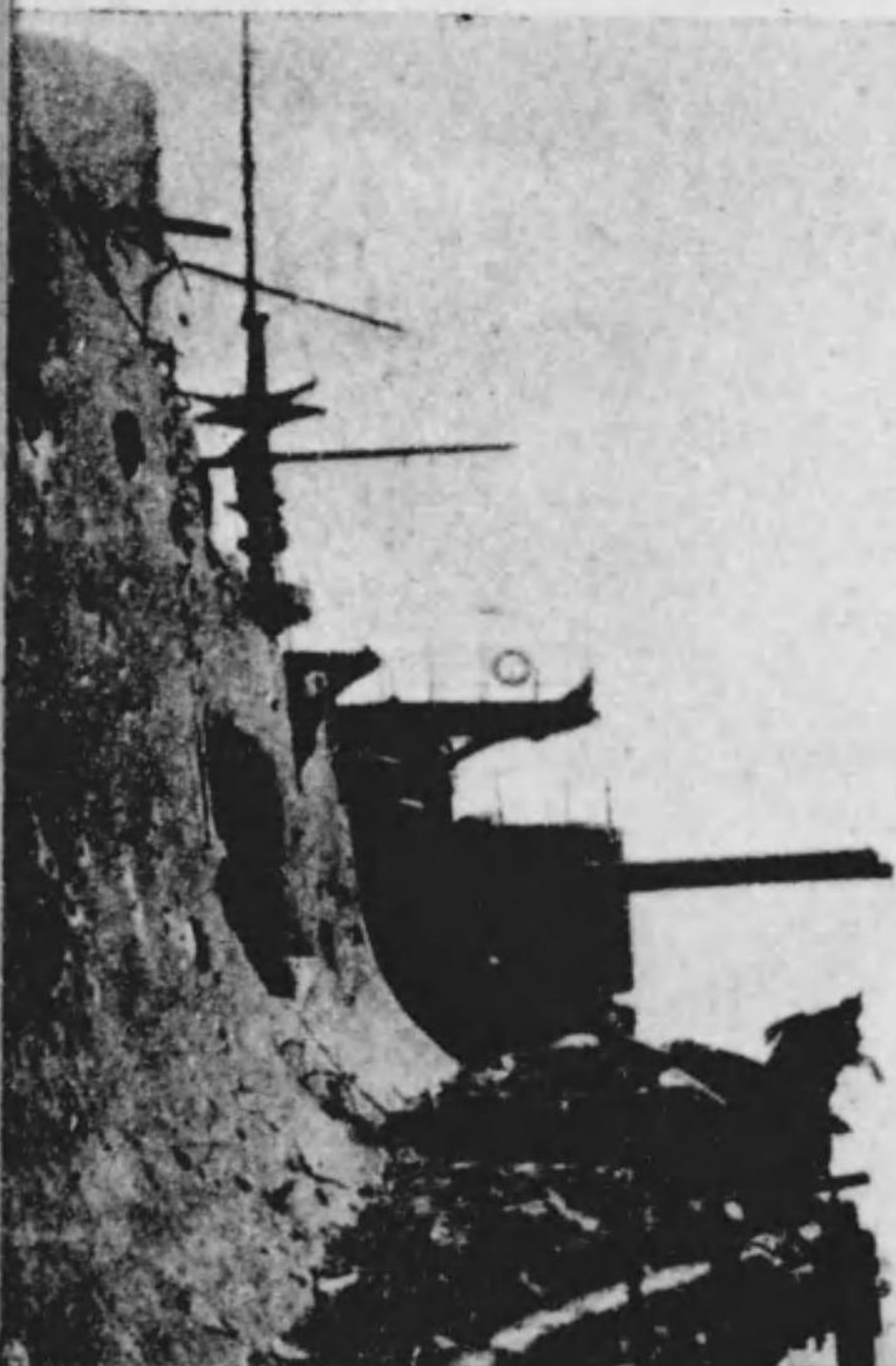
ザム少將指揮、然し彼は戦闘前に病死してゐたらしい）



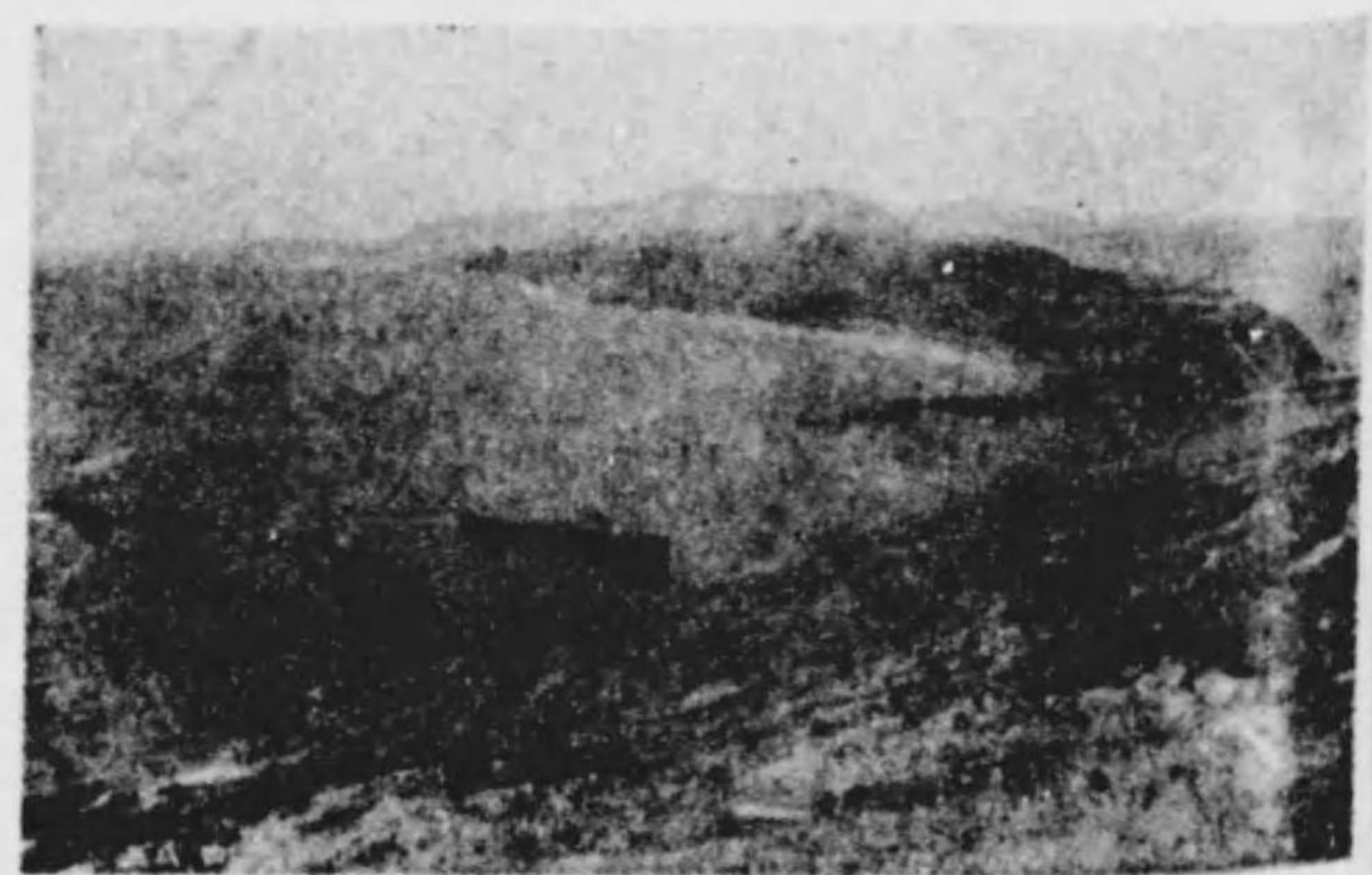
(鳥敷 士富 日朝 笠三) 戦海海黄日十月八年七十三治明



日八十二月五年八十三治明
世一イラコニ艦戦敵たげ揚を旗伏降



我が巨弾に穿貫せられたる
敵艦アリヨールの舷側



丸代千 丸井福 丸彦彌 丸山米 丸國報
るげ於に外港順旅るた見りよ山金黄
隊塞閉が我
(濟閩檢省軍海)

- 第三戦艦隊 「ニコライ一世」、「アブラクシン」、「セニヤールウィン」、「ウシヤールコフ」(司令官ネボカトフ少將指揮)
- 第一巡洋艦隊 「オレーグ」、「アウローラ」、「ドンスコイ」、「モノマーフ」(司令官エンクラーウキスト少將指揮)
- 第二巡洋艦隊 「スウェトラーナ」、「アルマーズ」、「ジエムチウグ」、「イズムルード」(右同)
- 特務艦隊 六隻(ラドロフ大佐指揮)
- 假裝巡洋艦 ウラール
- 第一驅逐隊 四隻
- 第二驅逐隊 五隻
- 病院船 二隻

バ艦隊の意圖

こゝで少しくバルチック艦隊について述べてみよう。

露國政府は、旅順のロシア東洋艦隊や浦鹽の艦隊が日本海軍のために封鎖又は撃沈されて、殆ど窒息状態に陥つたので、本國にあるバルチック艦隊を派遣し、残存してゐる敵艦と合流して、日本を脅かすことに決定した。

かくて、ロ提督の率ゐる大艦隊は明治三十七年九月十三日、フィンランド灣頭の軍港グロレスタットを出發し、ドーバ海峡を過ぎて北大西洋に出で、南進して英國の領海近くに差しかゝつた。夜になつて、はるか彼方に無数の火光が波間に明滅してゐるのを發見した。

「日本水雷艇の襲撃だッ！」

一戦艦の乗組員の誰かが、ひきつけるやうな聲を張りあげて叫んだ。砲門は一齊に開かれた。明滅してゐた光は、忽ちにして消えてしまつた。

「日本水雷艇全滅だ」

「あゝよかつた」

「幸先よし」

乗組員たちは、ウラーを叫びながらさつそく祝杯を舉げた。

彼等は、日清戦争における黄海の海戦や、威海衛攻撃の際の水雷艇の威力をはじめ、日露戦争の

緒戦における日本水雷艇の勇敢敏捷な戦闘を十分に知つてゐる。それだけ非常に恐れてゐた。だから、はるく大西洋まで出かけてきて、バルチック艦隊を奇襲するぐらゐのことは平氣であると考へ、そして大いに警戒してゐた。それを攻撃される前に早く発見して全滅させたのであるから、彼等の悦びは例へやうもなかつた。

彼等は、夜が明けるのを待つて、早く日本水雷艇の残骸を見たかつた。

だが、いよ／＼夜が明けて、その現場に行つてみると何たることぞ、日本水雷艇として亂射したのは數艘のイギリスの漁船であつたのだ。

彼等は、その狼狽ぶりを自ら恥ぢたが、しかしまだ波間に漂流してゐた遭難者を救助することなく、そのまま見殺しにして通過した。

あとで、このことが分つて英露間の國際問題となり、バルチック艦隊は、いろ／＼の點でイギリス人の妨害を受けた。

彼等は意外の日數を費して、十月下旬漸く地中海の入口、ジブラルタル軍港の對岸タンデールに寄港したが、ロ提督は全艦隊が一緒に進航することは、航行、寄泊、諸般の補給などに支障をきたすのみならず、第三國の注目をひきやすいといふ理由によつて、これを二隊に分ち、一隊はアフリ

カの喜望峰を迂回し、一隊は地中海から紅海を経て、共に印度洋の佛領マダガスカル島のノシーベ港に落合ふべく命令した。

彼等は、各々その航路によつて一路ノシーベを目指して進んだ。

我が國民は、このバルチック艦隊の東進について多大の關心を持つた。

精銳をすぐつたロシアの艦隊である。しかも日本の軍艦には開戦以來相當に傷んだものもある。

果してこれを迎へて勝つことが出来るであらうか。もし、彼等の目的どほり旅順か浦鹽に入港することができたら、今後の戦局は非常に困難になるのだが……)

これは、當時の國民の偽らざる氣持であつたと言へよう。

恰も、大東亞戦争開始直前まで、日本國民の大部分が、米英の艦隊を向ふにまはして、果して勝目があるか何うかと懸念したと同様である。

たゞ、必ず勝つ、否、必ず撃滅するといふ烈々たる闘志と、満々たる自信を持つてゐたのは帝國海軍であつた。そしてそれは今次の大東亞戦争も亦同様であつた。

だが、バルチック艦隊の方でも、勝つといふ十分の自信があつたればこそ、はるく一萬五千海里の海を越えて日本海まで出て行く決心がついたのだ。

カムラン灣の興奮

けれども、彼等はマダガスカル島に着かない前に、一大悲報に接し、大いに士氣を沮喪した。

アフリカの西海岸をまはつた一隊が、喜望峰を迂回する頃であつた。彼等は無線電信によつて、旅順口がすでに日本軍のために占領され、港内に残存してゐた軍艦は全部撃沈され、主將ステッセルは降將として取扱はれるやうになつたといふことを知つた。

「旅順が落ちては、戦力を半減したと同様だ」

敵將たちは、腕を拱こまいて沈思黙考するのであつた。

かくて、ともかく豫定どほり明治三十八年一月下旬、地中海經由の一隊と、その後さらに派遣された一隊とがマダガスカル島で落ち合ひ、こゝで徐ろに對策を練つた。

しかるに一方、ロシア政府においては、旅順陥落に狼狽して、これまで派遣した艦隊だけでは、あの戦意の旺盛な、そして戦争上手な日本海軍に對しては聊か不安であるとなし、さつそく海軍少將ネボカドフを司令長官として、戦艦ニコライ以下五隻からなる、いはゆる第三東洋艦隊を編成し

マダガスカルに待期中の艦隊が、東航の途中に追ひついて、合流さすべく急派した。

これによつて、前述のやうな大編隊が出来あがることになつたのであるから、彼等將兵は何れも（これならば、日本艦隊いかに強しといへども大丈夫だ）

と、安心するに至つた。

量を第一とするところは、大東亞戦争における敵國の遺口やぐちと共通するものであり、そしてその運命を同じくするものである。

ネボカドフの率ゐる第三東洋艦隊は、二月十七日ロシア官民の盛な歡呼の聲に送られながらリヴァ軍港を出發し、地中海を經由して、四月の初めにヂプチーに到着した。そして、すでにマダガスカルを出發して東航した先遣隊と、印度洋上のある地點で合流する豫定であつたが、これは豫定どほりに運ばなかつた。

バルチック艦隊は、印度洋へ渡つて何處へ出るか？

これは、ひとり日本ばかりの一大關心事ではなく、實に全世界の關心事であつた。しかし、先遣隊がマダガスカルを、第三東洋艦隊がヂプチーを出發して以來、杳としてその消息を知ることができなかつた。

ところが、四月八日になつて、突如としてマラッカ海峡に現はれた。大小四十餘隻、延長實に十里にわたり、威風四邊を壓してゐる。

マラツカは、マレー半島にあつて、こんにち我が軍のために占領され、已に重要な軍事的使命を果し、マラツカ海峡は皇軍によつて制海權を掌握されてゐる。しかし、當時はこの海峡に哨戒線を開くことも出来なかつたので、僅かにイギリス商船の發見によつて分つた次第だ。

それとこれと比べて、何たる今日の飛躍であらう。

マラツカ海峡を通過した彼等は、今日、皇軍の占領下にあるシンガポールの近海を横ぎり、さらに東航をつゞけて何處かへ向つた。これも、ひとしく世界の重大な關心事であつた。

わが海軍當局は、あらゆる方法をつくして、ひたすらその行方について注意を拂つてゐたが、四月十三日佛印のサイゴン發香港電報は、

「バルチック艦隊四十二隻は、十一日北緯八度十分、東經百八度三十分の海上にて北に行くを見たり」とあつた。

つまり、佛印の東海岸に沿うて北上してゐることが明かになつたのだ。

果して、彼等は四月十二日夜半、佛印のカムラン灣に入港した。

當時、フランスとロシアは盟邦の關係にあつたから、佛領カムラン灣に入港することを黙認したので。いな、その後のフランスの態度からみて、公認したものである事が明かである。わが政府は、これについて、フランス政府に對し、中立違犯として嚴重な抗議を申込んだが、フランス當局は、バルチック艦隊は領海外の地點に碇泊してゐるので、敢て關知するところにあらずといつた意味の回答をした。

しかし、バルチック艦隊は、カムラン灣において糧食、燃料、飲料水などを多量に積込んだ事實がたしかめられたので、明かに中立違犯である。

わが國民は、日本との距離も近く、已に戰機が切迫してゐるだけに、フランスの措置に對して極度に憤慨したが、その違犯行爲を現認した譯ではなく、また現認したところで如何ともすることはできなかつた。

このカムラン灣は、支那事變の發展的段階として、わが皇軍が上陸したした港であるが、その地勢は軍港として絶好の港である。

この灣頭に立つた皇軍が、往時を顧みて感慨無量であつたといふのも頷かれる。

彼等は、こゝで後から本國を出發したネボカトフの率ゐる艦隊を待合せたが、果して五月五日にいたつてカムラン灣内に入り、兩艦隊の乗組員は甲板に出て、互にツアールの萬歳を絶叫した。一切の戦闘準備を整へたバルチック艦隊は、いよ／＼五月十八日カムラン灣を出發することになつた。その出發の前夜、ロ提督はその坐座する旗艦スワロフに、幕僚と各艦の艦長以下將校を招いて、今後の航路についての會議を兼ねた晩餐會を開いた。

これが、最後の晩餐會になつた者も少くないが、神ならぬ身の知る由もなかつた。航路については甲論乙駁、容易に纏らない。

一司令官は、

「日本海の敵は、侮るべからざる實力を持つてゐる。冒險をやるよりも、むしろ太平洋を迂回して宗谷海峡を突破し、直ちにウラジヴオストックに入るのが堅實性があると思ふ」と提議した。

すると、傍にゐた他の司令官は、

「賛成！ 太平洋に出て日本沿岸を衝き、一死成功を期して宗谷海峡を強航通過すべきである」と、前説を支持した。

この賛成論が終るか終らぬ時、さきほどから、爛々たる眼を輝かしてゐた一艦長は、突如仁王立ちになつて、

「われ／＼は、すでに世界の半面から半面まで航して來た。ネルソン艦隊の後繼者たるべき我等は、なんで當面の敵を避けて遠く太平洋に出る必要があるか、むしろ、一舉に臺灣を屠り、こゝをバルチック艦隊の根據地としてはどうだ。われ／＼が本國を出發する際、ツアールは何と申されたか。汝等の極東に赴くは、ウラジヴオストックに入るにあらず、決戦して以て日本艦隊を殲滅するにありとの勅諭を賜つたではないか」

と、熱叫した。

その向側のテーブルにゐた青年參謀等の一團は、手を拍ち足を踏み鳴らしてこれに賛成し、會議の空氣をこの主戦論に導いていつた。大勢は已に決した。

ロ提督は、これに結論を與へるため、

「對馬海峡よりウラジヴオストックに向ひます」と宣告した。

ウラーの聲は艦内を壓し、やがてシャンパンの祝杯が擧げられた。抱擁する者、キツスをする

者、それに軍樂隊の奏樂が始つて、これに合せて歌ふ者——艦上は時ならぬお祭騒ぎとなつた。主戦論者の説をそのまま聴くと、いかにも旺盛な戦闘意識を持つてゐるやうだが、實は、日本艦隊は對馬、津輕、宗谷、太平洋の各地點に軍艦を配置し、殊に浦鹽の残在艦隊が日本近海に出沒して脅威を與へてゐるため、極めて劣勢なものである。こゝをわれ／＼の大艦隊が通過すれば、僅かの抵抗を受くるだけで目的地に入港できる——といふ、いはゆるイージ・ゴイイングを選んだもので、むしろ宗谷海峡突破を主張した者の方が賢明であつたかも知れぬ。

しかし、大勢は已に決したのだ。

口提督は、その翌日五月十八日カムラン港出發に際して、旗艦スワロフの檣頭に、

「敵近し、目的地遠し、露國の運命は此の一週間内に決す。一死祖國の爲めに盡せよ。」との信號旗をあげた。

敵ながら、あつばれたな覺悟を示したものであるが、果して本當にこの覺悟を以て戦つた者が幾人あるだらうか。

カムランを出發した露艦隊は、上海近海を通過して、足手まとひとなる義勇艦隊の一部を揚子江河口の吳淞港に残して待期させ、三十八隻の編隊を以て一路對馬の南方東水道ひがしに向つた。そして、

うま／＼と日本艦隊の思ふ壺に落ちこんだのだ。

砲門は開かれたり

彼我の距離は刻々に短縮し、戦機は刻一刻と迫つてくる。

息詰るやうな一と時だ。

わが軍艦は黙々として進み、艦内には必勝不敗の信念と、敵を殲たぶさざれば死んでも死なぬ盡忠至誠の將兵の魂が、聲なき喊聲を擧げてゐる。

午後二時、わが主力艦隊は沖の島北方の地點から、少し南西に向首し、敵と對航通過するが如き姿勢を示した。つまり、敵と擦れちがひに航行するやうに見せかけたのである。

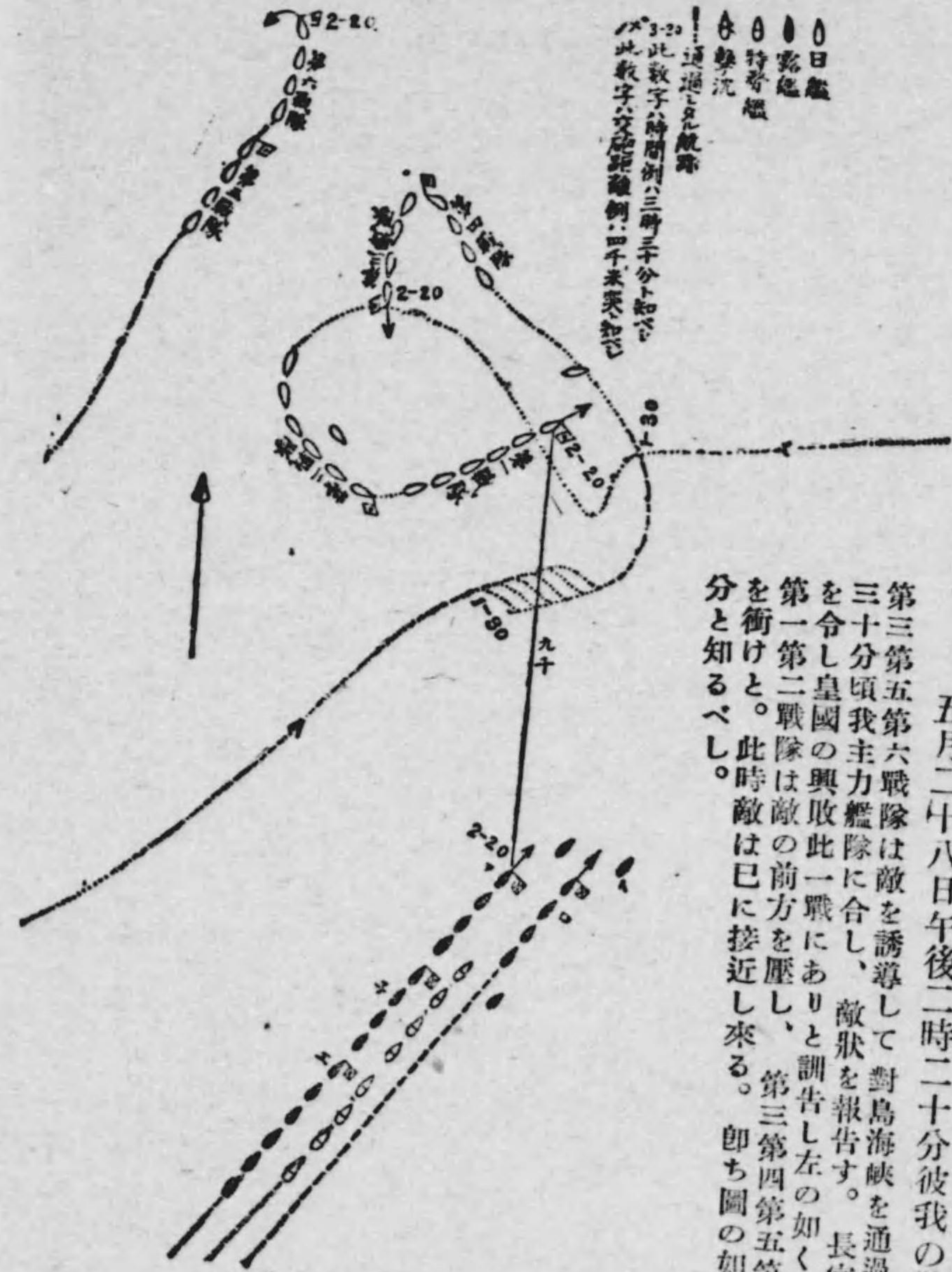
敵との距離、すでに一萬メートル餘だ。

敵艦も、已に戦闘旗を掲げてゐるのが、ハッキリと分る。

それから五分間を經過した二時五分、全身の神経を兩眼に集めて、敵の状況を觀測してゐた東郷司令長官は、さつと右手をあげて、急せきかず緩ゆるからず、左に振り、

五月二十八日午後二時二十分彼我の状況

第三第五第六戦隊は敵を誘導して對島海峡を通過し來り、午後一時三十分頃我主力艦隊に合し、敵狀を報告す。長官は直ちに戦闘準備を令し皇國の興敗此一戦にありと訓告し左の如く部所を定めたり。第一第二戦隊は敵の前方を押し、第三第四第五第六戦隊は敵の後尾を衝けと。此時敵は已に接近し來る。即ち圖の如し、時に二時二十分と知るべし。



「取舵一杯……」
と命じた。

「取舵ですか？」

伊地知三笠艦長は、我れとわが耳を疑ふやうに問ひかへした。加藤參謀長も、司令長官の言葉を待つやうに、東郷大將の顔を見た。

しかし、東郷大將は、敵を見詰めたまゝ頷いた。全く大將の獨斷によつて、この敵前大變針が行はれたのである。

忽ち三笠を先頭にして、急に東に折れ、次第に敵の先頭を蔽ひかぶせるやうな陣形となつた。恰も傘をひろげたやうになり、敵はその傘の柄のやうに包まれかゝつてきた。

これぞ、東郷大將得意の丁字戦法である。

東郷大將は、その青年時代イギリスに留學して、イギリス海軍の教育を受けたが、しかしその戦術は、明治初年の國內海戦をはじめ、これまで日本が行つた總ての海戦に参加した體驗から來た戦法と、日本の祖先が——主として八幡船が用ゐた丁字戦法によるものであつた。

射程距離内の敵前において、敵に艦體の胴腹を露出したが大變針をやることは、大膽を通りこ

して無謀のやうに見えるが、東郷大将の胸中には歴々たる神算があつた。果して、敵艦隊は先頭を壓迫されて、やゝ右舷を玄海方面に轉舵した。わが艦隊の強壓は、ひし／＼と加つて、蜿蜒長蛇の如く斜に敵を壓した。

二時八分、凡そ一萬メートルに接近した頃、先づ敵の先頭にあつたロ提督の坐乗する旗艦スワロフから火蓋を切つた。續いて各艦が猛烈に發砲し、特に旗艦三笠に向つて集中された。遂に、來るべき時が來たのだ。

しかし、敵の砲弾は一つも我が軍艦まで届かず、いたづらに水柱をあげるばかりである。東郷大将は、敵の砲火の威力がどの程度のものであるか、十分に研究し盡してゐたのだ。だから平然として敵前大變針を行つたのである。

彼我の距離は、已に七千メートルになつた。

各艦の勇士は、固唾をのんで旗艦の牆頭を眺めたが、まだ打方始めの信號旗は掲げられてゐない。六千五百メートルになつた。敵艦の射撃はますます猛烈となり、その甲板に蠢く敵の姿が手に取るやうに見える。それでもまだ打方始めの信號旗はあがらない。

血は湧き、腕は鳴るが、東郷司令長官に絶對の信頼をかけてゐる勇士たちは、砲塔の前にじつと

逸る心を抑へて命令を待つた。

いよいよ六千メートルに迫つたと思つた瞬間、する／＼と旗艦の牆頭に信號旗があがつた。あゝ、待ちかねた、

「打方始め」

の信號だ。

こらえかねてゐた各艦の砲門は、思ひ知れとばかりに、一齊に物凄い火蓋を切つた。

波はますます荒れて、艦體の動搖が激しいが、實戦と猛訓練とによつて、鍛へてきた手練の手並だ。照準に狂ひのある筈がなく、命中、命中、又命中！ 忽ち敵艦隊には諸所に火災が起つた。

戦闘開始直後の彼我の陣形を見ると、我が艦隊は右側から、敵は左舷から一列に並行して互に砲火を交へ、我が旗艦三笠は主として敵の兩先頭艦に砲火を集中し、第一戦隊は敵の右翼のポロヂノ型諸艦を猛撃し、第二戦隊は敵の左翼のオスラビヤ型諸艦を急射して、絶へずその先頭を壓し、敵が東北に進出せんとするのを妨げた。第三戦隊は敵艦隊の後尾を衝いて猛撃を加へ、遂に敵を完全に挾撃する態勢をとり、丁字型の戦法は、これまたわれ／＼の祖先が教へた乙字型戦法の攻撃となつた。

敵は漸く藻掻きだし、必死となつてこの包圍陣を脱出しようと焦つてゐる。

さらに、敵の照準が甚だ不正確で、殆ど日本艦隊に命中しないことが、一層彼等を焦りださせた。東郷大將の神算に狂ひはなかつたのだ。

つまり、敵は怒濤のために照準が定まらぬといふ見透しをつけての作戦が適中したのだ。それに、彼等は實戦の體驗を経てゐないで、日清戦争以來實戦の體驗を積んだ帝國艦隊に向つたことが、大なる弱味であつた。

尤も、彼等にしても、本國を出發してから間もなく、太西洋でイギリスの漁船を日本の水雷艇と勘ちがひして、これを撃滅した體驗があるにはあるが……。

勝敗の數早くも決す

わが艦隊の猛攻に、北方進出の不可能なことを知つた敵艦隊は、左右兩列とも漸次東方に變針し、いつの間にか不規則な單縱陣を形成して、我と並行の姿勢をとつた。しかもきはめて鈍い速力で、そこで、わが艦隊もまた正東に轉じ、快速力を利用して絶えず敵の先頭を壓した。北へも進めず東へも逃げられず、敵は全く袋の鼠となつた形だ。

わが軍は、これに乗じてますます猛撃を加へた。

敵の速力が、我に比べて著しく劣つてゐるのは、あながち軍艦の性能が劣つてゐるためではない。それは長い航海によつて、その艦腹に無数の貝が附着してゐるためである。

この貝は富士壺ふじつぼと稱する附著性節足動物で、世界中の海に棲息し、取除けないでおくとますます増加して、六ヶ月も経てば速力が半減するぐらゐのことは普通である。

バルチック艦隊が、マラツカ海峽を通過した時の速力は十二海里であつたが、カムラン灣沖に現れた時は已に十一海里になつてゐた。敵艦本來の性能としては、二十海里内外の速力を持つてゐるが、前年の九月に本國を出發して以來、すでに九ヶ月もたつた軍艦が大部分を占め、その寄港先で艦腹の富士壺を取除いた形跡もないので、その速力の減退ぶりは想像にあまりある。後から來て、カムラン灣で合流した軍艦は比較的速力が早い、艦列を離れて自由行動をとるわけにゆかぬので鈍い速力の僚艦と行動を共にしなければならぬ。然し、この一戦で敗戦した後、自らの速力を極度に利用して脱走した軍艦もある。

戦闘と速力の關係は重大なもので、その速力が半減すれば、戦闘力を半減するものといつてよい。この點からいつて、我が艦隊は旅順艦隊覆滅後、専ら艦體や大砲などの手入れをなし、萬遺憾なき

を期してゐたので、その戦力は敵に數倍してゐる。

第一次世界大戦の際、青島を脱出した獨艦エムデンは、富士壺の附着によつて速力が鈍つてきたのを氣にしたが、といつてドックに入れて取除く寄港先を持たないので、南洋のある珊瑚礁の小さな灣内に入り、苦心慘澹してこれを取除いた。

その方法としては、先づ艦内にある重い器物を艦尾に持つて來て艦首側の艦腹を浮きあがらせ、その部分の貝を取除いた後、さらに同様の方法で艦尾側の艦腹の貝を取り除いた。だから、彼は絶えず快速力をもつて出沒したのであつた。孤立無援のエムデンとしては、恃むのはたゞその快速力のみであつたのだ。

けれども、大艦隊といふ量に恃むバルチック艦隊は、速力の減退はさほど問題にしてゐなかつた。それが、日本海海戦における大敗の原因の一つでもあつた。

見よ！

東方に變針して、必死となつて我が包圍陣を脱出しようとしてゐる敵は、忽ち我が軍艦の快速力によつて先頭を押へつけられ、絶好の射程圈内に身悶へしながら、猛射を浴びてゐるではないか。已に彼等は死角に彷徨してゐるのだ。しかも、わが軍は從容迫らず、綽々たる餘裕と沈着を以て攻

撃してゐる。

「オスラビヤに火があがつたぞ」

わが全艦に、どつと歡聲があがつた。

左翼列の先頭に立つて、我を威嚇するが如く巨砲を放つてゐた一萬四百トンの戰艦オスラビヤの中央部から、猛烈な火焰が立ちのぼつたのだ。

「やあ、オスラビヤが戦列を離れたぞ」

「あれでは、間もなく沈没だ」

オスラビヤの火災はますます大きくなつて、大火柱があがる。まるで島の火山が噴火したやうだ。必死となつて消火に努めながら、のたうちまはつてゐる様が、肉眼でもハッキリ分る。

午後二時四十分、再びわが全艦に、どつと歡聲があがつた。

「スワロフにも火があがつたぞ」

「敵の旗艦だ」

「要部をやられたらしい。速力が落ちたぞ」

「あれでも、戦列を放れないで砲撃してゐる」

「小疵だね」

「憤るな、間もなくお陀佛だよ」

わが各艦の將兵は、この息詰るやうな場面に當つても、綽々たる餘裕を示してゐる。

スワロフ（一萬三千五百六十トン）は、バルチック艦隊の總司令官であるロヂエストウエンスキ
 中將が坐乗し、先頭に立つて全軍を指揮してゐる最新最鋭の戦艦である。それが戦闘開始後間もなく大火災を起したのであるから、敵の士氣を沮喪せしむること夥しい。もし、スワロフが戦列を脱することになれば、いちだんと敵の士氣に關するので、ロ提督は能ふだけ戦列に踏みとどまつたものと見られる。そして、この一瞬時が全艦隊の運命、いな露國の興廢にかゝる重大な場合なので、最後まで先頭に頑張つて、戦局を有利に導かうとしてゐるものゝやうである。

だが、わが艦隊の砲撃はいよゝゝ猛烈となつて、一弾一弾が狂ひなくスワロフに命中し、そのたびごとに人と物體を空へ、海へ吹き飛ばしてゐるのが手に取るやうに分る。

將旗を掲げたマストは、根元からぼつきり叩き折られた。煙突が飛んだ。さらにまた残つた一本の煙突も、薔のやうに空中高く飛びあがつた。備砲が次ぎ／＼に叩きつぶされて、もはや艦尾の小砲一門となつたやうだ。

ロ提督は、司令塔の中から、

「その一門で撃て、決して戦列を去つてはならぬ」

と命令してゐたが、わが巨弾の一發はその司令塔に命中して、ロ提督は血だらけになつて倒れた。可なりの重傷だ。

速力が、急にがた落ちとなつた。

もはや、僚艦と行動を共にすることは出来なくなつた。勢ひ、先頭から取りのこされて、ひとりでに戦列を放れた形となつた。それでもなほ一門の小砲で抵抗してゐるのだ。

しかし、もはやロ提督は全軍を指揮する能力を失つてしまつたので、戦艦ニコライ一世に坐乗するネボカトフ少將が、これに代つて全艦隊を指揮することになつた。

ロ提督が指揮してゐたところから、命令系統は支離滅裂となつてゐたが、ネボカトフは不意にこの重任についたので、いよゝゝ命令系統が紊亂してきた。

右翼列の二番艦アレキサンドル三世も、わが砲火を浴びて火災を起した。これは、火災が起ると同時に、遠く戦列を脱して消火に努めた。

そのほか、敵、各艦から濛々たる爆煙と共に、血糊のやうな色をした火焰が物凄く立ちのぼつた。

その猛火の中で、阿鼻叫喚する敵の様子が、我が軍の双眼鏡の中にあり／＼と浮んでくる。まるで、ロシア全體がその没落の苦悶に喘いでゐるやうな様相だ。

ロ提督は、佛印のカムラン灣を出發する時、全艦隊に對して、「ロシアの運命はこの一週間内に決す」といふ信號旗を掲げたが、今にして思へば、いみじくもそれを豫言したものだ。

風はますます加はり、波はいよ／＼荒れてきた。

燃える各艦から噴きだす煙は、この強烈な西風に襲いて、海上一面を蔽ひさり、濃氣と共に視野を妨げた。

我が艦隊は、これがため暫く射撃を中止するの已むなきにいたつたが、しかし、その煙の切目を見つげ次第に猛撃を加へた。

しかし、敵も死者狂ひである。敵弾は物凄いなりを立て、わが軍艦を掠め、あるひは命中する。

わが第二艦隊の淺間（艦長八代六郎大佐）は、勇敢に敵艦に肉薄して奮戦中、後部水線に近く三弾を受け、舵機を損じて浸水甚しかつたが、この時八代艦長少しも動ぜず、旗艦にその損傷の程度を報告した後、徐ろに戦列を脱して、沈着適切に應急修理を加へた。

僚艦はひとしくその安否を氣づかつたが、八代艦長の指揮よろしきと、全乗員の努力によつて忽

ち修理を終へ、再び戦列に加つて奮闘した。

これに反し、火災を起して戦列を脱した戦艦オスラビヤは、淺間が再び戦列に加はつた頃、燃えながら一萬三千五百六十トンの巨體を海底深く沈めていつた。

すでに、猛火に包まれて戦列を脱した旗艦スワロフは、一本のマストと、二本の煙突を失つて、何艦であるか見分けのつかないまでに衰れた姿になつてゐるが、それでもなほ應戦をやめず、使用に堪へる砲門を開いて抵抗を續けてゐる。東郷大將は、

（小癪な奴だ）

と思つたが、もはや戦闘力を失つたも同然なスワロフへ、わが主力艦を向けるのは大人氣ないとし、驅逐隊の魚雷で止めをさすやうに命令した。

午後三時四十五分、先づ廣瀬（順太郎）驅逐隊は魚雷攻撃を執行してその一發を命中させ、つゞいて午後四時十五分、鈴木（貫太郎）驅逐隊が一發の魚雷を叩きつけた。見事に左舷後部に命中し、忽ち艦體は十度ばかりに傾斜した。

旗艦危しと見たその附近の敵艦は、これを掩護するため猛烈な射撃を加へた。廣瀬驅逐隊の不知火と、鈴木驅逐隊の朝潮は敵の猛撃をうけて各一發の敵弾が命中し、一時危険にさらされたが、

巧みにその危地を脱出することを得た。

スワロフの火災はますます大きくなり、傾斜はいよいよ度を増してきた。それでもなほ撃ちつけてゐるではないか。

これを見たわが主力艦は、たゞ一發の下に撃沈しようと思つたが、東郷司令長官の命令は、全力を擧げて敵主力艦を撃滅することにあつたので、専ら敵の戦艦群に對して猛攻を加へた。

午後四時四十分ころになると、敵は、もはや北にも東にも脱出することは不可能と断念したものの如く、南方に向つて遁走を企てた。

この頃になると、敵の戦列は四離滅裂となつて、たゞひたすら我が猛攻圏内から遁れようと焦つてゐた。そして火災を起したまゝ走つてゐるもの、傾斜したまゝ、僚艦の救ひを求むるもの、やうに継りついてゐるもの、マストを折られ、煙突を失ひ、艦名を識別しあたはざるもの——その他、満足な姿をしてゐるものは殆どなかつた。

これがイギリスの「ネルソンの後継者」を以て任ずるバルチック艦隊の姿だ。すでに、勝敗の數は決したのだ。

わが艦隊鬱陵島へ集結

わが艦隊は、遁走する敵を追つて猛撃の手を緩めなかつたが、午後五時半ごろになると、陽光も次第に薄れ、加ふるに濃氣はますます海面ふかく垂れこめ、これが敵艦から吐出す煙突の煙と火災の猛煙と相和し、視野は著しく狭められてきたので、東郷司令長官は主力艦の追撃中止を命ずると共に、わが装甲巡洋艦隊をして、敵を北方に追ひこめる作戦を授けた。

この頃、兩艦隊の位置は朝鮮半島の東岸、迎日灣のはるか沖合の日本海南部にあつた。日本海海戦の呼稱はこゝから來てゐる。

日没と共に、わが主力艦は一路北上して鬱陵島に向つた。それは、一旦南方に遁れた敵が、夜闇に乗じて必ず北へ轉じ、目的地浦鹽に向ふと見たからである。

わが主力艦は、この北上の途中、敵の特務艦ウラルをたゞ一撃のもとに撃沈し、さらに六隻から成る敵主力の殘艦を發見し、たゞちにこれを包圍して攻撃を加へた。

敵は、すでに晝間の戦闘によつて深傷を蒙り、砲力、速力その他の性能を著しく低下してゐると

さるへ、わが獨得の恐るべき威力と、一發必中の手練の砲術によつて見る／＼大打撃を受け、戦艦アレキサンドル三世（一萬三千五百十六トン）は火災を起して列外に遁れ、間もなく沈没した。戦艦ポロヂノ（一萬三千五百十六トン）は、わが砲弾のために火薬庫を打貫かれ、瞬間にして轟沈した。敵兵の中で乗艦と運命を共にした者も少くないが、溺れてゐる者は、悉くこれを救助した。午後七時二十八分、太陽は地球上に突如として起つたこの海の一大驚異に名残を惜むがごとく、靜かに水平線下に没した。

海には漸く夕闇が襲ひかゝつて、あちこちに炎々として燃ゆる敵艦の焰が、一層明るく見えてきた。

東郷大將は、軍艦龍田に命じて「全艦北航し、明朝鬱陵島に集合すべし」といふ傳令をなさしめ、當日の晝間の戦闘は我が海軍の大勝裡に、歴史的な幕を閉ぢた。

司令長官を生捕る

夜になると共に、驅逐隊、水雷艇隊が主力隊に代つて猛烈な活動を始めた。

晝の戦闘で半身不隨になつた旗艦スワロフは、まだ火焰をあげながら、のろい足どりで彷徨してゐる。

富士本水雷艇隊は、思ひきりよき止めを刺すべく、まつしぐらにスワロフに向つた。

スワロフは、虎の子の小砲一門をもつて水雷艇を射撃したが、あまり近づいてゐるので照準が利かず小銃や機銃で射撃した。

わが水雷艇は物ともせず、出来るだけ近寄つて二發の魚雷を發射した。

忽ち轟然たる音響を發すると同時に、艦體は一瞬にして沈没した。正に轟沈だ。時に午後七時二十分、往生際の悪い最期であつた。

本國を出發して以來、常にこれに坐乗してゐた司令長官ロ提督も、哀れやスワロフと運命を共にしたのだ——とばかり我が軍は考へてゐた。

日本の各新聞も、旅順港外におけるマカロフ提督の最期といひ、こんどのロヂェストウエンスキ提督の最期といひ、何たる悲惨な敗戦であらうと報じた。

ところが、意外にもそのロ提督が生きてゐたのだ。そして遂にわが驅逐艦のために捕虜となつて、武人として死するにまさる辱を受けたのである。

けれども外國人は戦つた後、力つきて捕虜となることは敢て不名譽としないばかりでなく、釋放されて故國に歸ると、凱旋軍人と同様に迎へらるゝのであるから、ロ提督の心事は、必ずしもわれわれ日本人が想像するやうなものでなかつたかも知れない。

ロ提督が捕虜となつた前後の様子は、すこぶる劇的なものであつた。

二十七日の晝間の戦闘のあとを引きついで、索敵と攻撃のために、暗夜の日本海を僚艦とともに縦横無盡に活躍した驅逐艦連、陽炎の兩艦は、翌二十八日もまた組になつて、鬱陵島附近一帯の敵を索めてゐた。

すると、午後三時三十分ごろ、鬱陵島の南西四十海里の地點に、敵の驅逐艦二隻が突如東方から現はれ、針路を北にとつて進航してゐるのを發見した。いふまでもなく、きのふの戦闘に敗れた敵艦が血路を開いて浦鹽に向はんとしてゐるのだ。

わが兩驅逐艦は、好敵ごさんなればかり打喜んで、全速力をもつて敵に接近し、射程距離に達するや否や、たゞちに砲門を開いた。

敵も、これに應戦して、彼我ともに驅逐艦二隻づゝの珍らしい戦闘が開始された。けれどもそれは僅か十分か十五分間ぐらゐに過ぎなかつた。敵の一艦は忽ち戦列をはなれて、北方へ遁走した。

陽炎は、これを追つて猛進した。

連は、残る一艦に對して猛撃を加へたが、艦橋に立つて指揮しながら、双眼鏡で敵艦の様子を眺めてゐた艦長相羽恒三少佐は、突然、

「おや、敵艦は動いてゐないぞ」

と、傍の將校たちを顧みながら言つた。そして次の瞬間には、

「前橋に白旗が……艦尾に赤十字旗が揚つた」

と、叫ぶやうに言つた。そして更に、

「打方止め」

と命令を出した。

海は、元の静けさにかへつた。

「汽罐に命中して、航行不能になつたらしいですが、赤十字旗を掲げてゐるところを見ると、何か仔細がありさうです」

傍の將校が言つた。

「さつそく、短艇をおろして臨検隊を送れ」

相羽艦長の命令によつて、短艇はする／＼と敵艦に向つて漕ぎだされた。きのふの狂瀾怒濤にくらべて、けふはまた何といふ穏かな海であらう。まるで山上の湖水のやうに靜かに落つてゐる。

わが短艇が敵艦の胴腹どうはらに横づけになると、敵の將兵は慇懃な態度で迎へて甲板に招じた。

「この艦名は何といふのだ」

先づ、わが臨檢隊から發せられた。

「ビエードウイ號」

「ビエードウイ……すると露國驅逐艦中の最精銳だな。なぜ降伏したのか」

「汽罐をやられた上、石炭と水が不足になつたから」

「どうして赤十字旗を掲げてゐるのか」

「負傷者がゐますので……」

「戦闘に参加してゐる以上、負傷者が出るのは當然ぢやないか。それに赤十字旗を掲げるといふのは可笑しいぢやないか」

「實は、負傷した將官が乗つてゐますので……」

「誰だ？」

「ロヂエストウエンスキー中將です」

「何ッ！ ロヂエストウエンスキーだと……」

「さうです」

「中將は、昨日の戦闘でスワロフの沈没と同時に戦死してゐる筈だが……」

「たしかに、この艦ふねに乗つてゐます」

わが臨檢隊は、あまりの意外に啞然とするよりほかなかつた。

「では會はしてくれ」

臨檢隊が、露兵の案内によつて寢室に行くと、果して白衣に海軍中將の略章をつけて、頭を繻帶した將官と、大佐中佐などの將校八名が、重々しい繻帶をして、ずらりとベッドに横はつてゐた。

思へば昨年こぞの九月以來、夢にも忘れなかつた敵將ロ提督の顔だ。その傍にゐるのは、これまた寫眞で覚えのある參謀長クラビーフコロク大佐の顔だ。

ロ提督も、ク參謀長も、臨檢隊の指揮官を見ると、心持ち頭をもたげて眼で會釋をした。わが指揮官もこれに對して鄭重に會釋をした。

ほかの將校たちは、無理にベッドから起きあがらうとするので、わが臨検隊は武士の情で、これを制しながら助つた。

彼等露國將校の眼には、包みきれぬ感謝の氣持が輝いてゐる。

ビエードウイ艦長の話によると、旗艦スワロフは大火災になつてもなほ戦闘を続け、ロ提督とそ幕僚は司令塔にあつて全艦隊に對して命令を下してゐる時、日本艦隊の巨弾が司令塔に命中し、一舉にしてロ提督以下多數の將兵を傷つけ、就中ロ提督とク參謀長の傷は最も重く、ロ提督はそのまま起きあがることができなかつた。

それに、旗艦スワロフの命脈は刻一刻と縮つて行くので、折からの濃氣と砲煙の幕にかくれて救助に來た驅逐艦ビエードウイに移乗し、他の一隻の驅逐艦に護衛されながら危地を脱した。その後は日本艦隊の索敵網を潜つて、ところ定めず一と晩中を彷徨し、漸く夜明けになつて進路を定め、日本艦隊の眼を掠めて北上中に捕はれたものであるといふのだ。

きのふの午後二時までの彼の華かな立場に比べると、何といふ皮肉な對照であらう。

捕獲された敵艦ビエードウイは、ロ提督以下全乗員と共に佐世保に曳航され、負傷者は海軍病院に收容された。

水雷艇の夜襲

二十七日の日没すぎから、同夜の十一時頃にわたる我が水雷艇の奮戦こそ、帝國海軍の勇敢無比にして、且つ妙技神に達する攻撃の鮮さを遺憾なく發揮したものといつてよい。

この日、「天氣晴朗にして波高く」、三笠の如き一萬五千トン餘の戦艦でさへも、艦體は怒濤のために數十尺の上下に掀翻されるといふ状態で、水雷艇のごとき小艇では、とうてい戦闘に参加して戦功を擧げることが困難であつた。

そこで、東郷司令長官は主戦艦隊所屬の水雷艇は三浦灣に避泊せしめ、機を見てこれを出動させることにした。

たゞ、既に傷つた敵旗艦スワロフへ止めの一撃を加へるために、鈴木、廣瀬兩驅逐隊の水雷艇隊のみは、他の水雷艇隊よりも少しく早く出動したのであつた。

三浦灣に待期した水雷艇隊は、間近かに聴く轟々股々たる砲聲に、血は湧き、腕は鳴つて、一刻も早く出動したいとじり／＼してゐた。

いよいよ日没になつて、その機會が來た。
全艇出動の命令が下るや否や、各水雷艇はそれ／＼の部署に従つて矢のやうに敵に迫つた。波は晝間にくらべると餘ほど落ちついて來たが、それでもまだ、小さな水雷艇を木の葉のやうに翻弄した。

暗夜に索敵すること時餘にして、わが一部の水雷艇は早くも敵艦三隻が、一組となつて北上してゐるのを發見した。

「それッ、撃てッ！」

とばかり、一水雷艇はまつしぐらに裝甲巡洋艦ナヒモフ（八千五百餘トン）と思はるゝ敵艦に肉薄して魚雷を發射した。夜目にもハツキリと敵艦の舷側から大水柱が立ちのぼるのが見える。正しく命中だ。

つゞいて他の一艇は、隼のやうに他の敵艦に迫つた。敵の探照燈が眞晝のやうに海面を照らし、忽ちにしてわが水雷艇を發見し、慌しく、そして猛烈に射撃した。この敵艦は、その艦型から察すると、戦艦シツイベリキー（一萬四五百トン）らしい。敵艦は、水雷艇の前後左右に大きな水柱をあげる。その飛沫が、どつと崩れ落ちて艇上に降りかかり、いまにも覆りさうになる。

けれども、わが水雷艇はます／＼猛進して敵艦に迫つた。あまり肉薄したので敵は備砲の俯角が度を失つて照準がつかず、遂に撃てなくなつた。こゝぞとばかり、わが水雷艇は狙ひ定めて魚雷を發射した。魚雷はその命令を忠實に奉ずるものゝ如く、する／＼と水面を走つて敵艦の横つ腹を突き破つた。轟然たる大音響と共に、敵艦は大きく揺れた。たしかに致命的打撃を受けたのだ。

また他の水雷艇は、巡洋艦モノマフ（五千五百九十三トン）と思ほしき一艦に向つて猪突した。これまた敵の探照燈に發見されて猛撃をうけたが、何糞ツとばかり、煌々たる射光の中を幕進して魚雷を發射した。狙ひたがはず敵艦の艦尾に命中し、推進器に大損害を與へたらしく、速力が急に落ちた。

しかも、敵の三艦はなほこれに屈せず、全速力を出して北へ遁走しようとする。

わが水雷艇は、執拗にこれに喰ひさがつて、猛牛にたかる虻の群のやうに追撃する。一艇が發射すれば、他の一艇がこれに代り、さらに又他の一艇が攻撃し、今や敵艦群は完全にわが水雷艇の包圍網の中に捉はれてしまつた。しかも敵の備砲がその俯角の度を失するまで肉薄接近してゐるので敵は發砲不可能となり、この虚に乗じてわが水雷艇は自由に活躍した。

やがて、敵の一艦が大火災を起した。その火焰のために、附近の海上一面が明るく照りだされ、

また水雷艇の照準を便にしてくれた。つゞいて、他の二艦からも、濛々たる火煙と、炎々たる火焰があがつた。

わが艇上の將士は、どつと萬歳を叫んだ。

すでに、三艦とも餘命いくばくもないことが分る。わが水雷艇隊は、この最期を見届けたかつたが、午後十一時までに全艦艇鬱陵島に集合すべしといふ命令が下つてゐたので、遺憾ながらその最期を見届けずして引揚げた。しかし、その翌朝になつて、三艦ともこの戦場の附近に沈没し、あるひは航行を停止してゐるところを發見されたが、何れも水雷攻撃による損害で沈没したのでつた。

また、この夜特別任務を帯びて、他の水雷艇隊が引きあげた後もなほ敵艦の索敵と攻撃に當つてゐた鈴木驅逐隊は、韓崎の北方約二十七海里の地點で、戦艦ナワリン（一萬二百トン）と他の一艦が北航してゐるのを發見し、たゞちに水雷艇の出動を命じた。

時に二十八日午前二時で、砲聲すでに海上より消え、日本海の波は眠つたやうに静まりかへつてゐる。

わが水雷艇は、敵に覺られないやう、機關の音を落してするくくと敵に迫つた。だが、大敗以來甚しく神経質になつた敵艦は、哨戒きびしく、遂にこれを發見して雨霰と弾丸を打込んできた。

けれども何といふ幸運だらう。わが水雷艇は全部無事にその發射圈内に達し、一發必中の魚雷を兩艦に向つて放つた。

見よ、さすがのナワリンも、一時に魚雷二發を胴腹に受けて、艦體が眞ツ二つに引き裂かれるかと思つた途端、たゞ一瞬にして轟沈したのである。

はるかに、驅逐艦上からこれを眺めてゐた鈴木司令は、思はず手を叩いて萬歳を叫んだ。

他の一艦は、急所を撃たれなかつたのか、巧みに虎口を脱して遁走した。

このほか、各水雷艇は、隨所に敵艦を發見して勇猛果敢な攻撃を加へ、二十七日晝間の戦闘に生きのびた敵の殘艦の殆ど全部に、大なり小なりの打撃を與へた。

けれども、この夜間攻撃で勇敢に戦つた福田艇隊の第六十九號艇（司令艇）と、青山艇隊の第三十四號艇（司令艇）と、河田艇隊の第三十五號艇は、敵艦を襲撃して大損害を與へると同時に、敵弾を受けて沈没した。つまり敵と刺違へをしたのだ。あゝこの勇敢なる三艇の沈没が、日本海海戦におけるわが艦隊の尊き最大の犠牲であつた。

最後の艦隊を捕獲す

鬱陵島の一小灣内に、大勝後の第一夜を明かした我が艦隊は、夜明けを待つて再び出動した。それは、なほ數隻の敵戦艦及び巡洋艦が、南日本海に彷徨してゐるといふ推斷により、これを撃滅するためであつた。

その神の如き第六感と、精密な科學的算定に基く推斷に狂ひのある筈がなく、果して二十八日午前十時ごろ、六隻から成る敵の艦隊が北上してゐるのを發見した。第一日の戦闘後、隊列らしい隊列をなしてゐるのはこれだけであつた。

この敵は、戦艦ニコライ一世、同じくアリヨール及び巡洋艦二隻、海防艦二隻で、殘敵の主なるものであつた。しかし、敵の巡洋艦一隻はいつの間にか姿をくらました。

わが聯合艦隊は、これを撃滅するため主戦艦隊及び裝甲巡洋艦隊は敵の前路を扼し、巡洋艦隊は東郷(正路)、瓜生兩戦隊と共に敵の後方を押へ、午前十時半ごろには竹島の南方約十八海里の地點で、完全にこれを包圍してしまつた。

その迅速敏捷にして陣形の莊嚴なること驚くばかりで、敵はこれだけでも已に氣を吞まれたものの如く、早くも戦列に動搖を呈してゐるのがあり／＼と分る。

午前十時三十五分、六千五百メートルの距離に達するや、春日が先づ砲火を開いた。つゞいて三笠、磐手が發砲した。巨弾は大空に唸つて、一弾また一弾、敵艦の要部を打碎く。

敵艦も應戦して、わが主力艦を目がけて發砲したが、已にきのふの海戦で著しく戦闘力を失つてゐるので、その抵抗力は極めて微弱なものであつた。殊にそのうちの巡洋艦一隻が又復遁走したので、抵抗力はますます減退した。

そこで、わが艦隊は全力を用ひる必要がなく、緩徐な射撃をなしつつ次第に敵に近づき、その包圍陣を縮めていつた。

敵の戦艦ニコライ一世は、先遣バルチック艦隊を増勢するため、この年の二月僚艦と共に本國を出發したもので、ロ提督に代つて全艦の指揮官となつたネボカトフ提督が坐乗してゐる。彼は、本國を出發するに先だつて、露國皇帝及び國民に對し、必ず日本艦隊を殲滅して、亡滅した旅順艦隊の恨を晴してみせると豪語したのであつた。そのことは、わが艦隊も已に知つてゐた。

「何だこのさまは……ネボカトフはネボケガホになつたのか」

水兵たちは、かうした冗談を言ふやうな軽い氣持で敵に對した。といつてわが艦隊は一分の隙も見せるのではなかつた。

だが、不思議なことには、敵艦隊は間もなく發砲をやめて、次第に我が主力艦隊の方面に近づいて來た。

「おかしいな」

わが將兵は不審に思つて、敵の様子を見詰めてゐると、午前十時四十二分になつて、戦艦アリヨールの橋頭に萬國信號旗がひるがへつた。曰く、

「日本艦隊に信號す。降伏」と。

つゞいて、ニコライ一世、海防艦アブラキシン、セニヤーキンの橋頭にも同様の信號が揚つた。

そこで、旗艦三笠の橋頭に「打方止め」の信號旗が掲げられ、直ちに淺間艦長八代大佐は、降伏受領談判のために短艇に乗つて敵艦に赴いた。

その途中で、敵の方からもまた一艘の短艇が我が方に向つて來るのに出會つた。それにはネボカトフ司令長官とその幕僚が乗つてゐた。わが旗艦へ降伏の正式申入れをするためである。

八代艦長は、これを伴つてニコライ一世に行き、こゝで諸般の談判を遂げ、正式に敵の降伏を受

領した。

忽ち、捕獲艦四隻の橋頭から露國軍艦旗が引きおろされ、これに代つて帝國軍艦旗が橋頭高く翻つた。

五月の眞晝の風は爽やかにわが軍艦旗を吹いて、五月の風になびく故郷の鯉幟を思はしむるものがあつた。

東郷司令長官は、武士の情として降伏した將校以上には特に帶劍を許し、武士としての面目を保たしめた。敵する者に對しては強いが、降伏した者や、母艦を失つて溺れてゐる者に對しては、あくまでも温い同情を以てした。これが花も實もある帝國軍人の本領なのだ。

この艦隊が降伏するに先だつて、敵艦隊内に一場の悲喜劇が演じられた。

ネボカトフ提督は、日本海軍の包圍陣が犄々ひしひと壓縮するや、もはや抗戦不可能と觀念し、部下の將校を士官室に集めて、

「もはや砲は碎かれ、彈丸も盡きた。この上戦闘を繼續しようとしても不可能である。強ひて戦闘を繼續すれば全員が犠牲となるばかりである。それよりも寧ろ降伏して全艦の生靈を救つてはどうだ。諸君の意見は？」

と詰つた。

直ちにこれに賛成した將校もあつたが、しかしある將校は、

「最後の一弾まで戦ふべし」と言ひ、またある將校は、

「戦ひは時の運である。戦ひぬいてゐるうちには、血路を開いて包圍陣を脱出することができぬとも限らぬ」と言ひ、また他の將校は、

「捕虜になつたら日本人は我々を虐殺するだらう」と言つた。

「そんな馬鹿なことがあるもんか。現に、我々は沈没した我が艦の將兵を、日本海軍が一生懸命になつて救ひあげてゐるのを目撃したではないか。日本人は文明人だ。むしろロシア人よりも文明人だ」

と、降伏説を支持する將校もあつた。

ネボカトフは、即決するのに當惑してゐたが、

「然らば、滿艦の兵士について意見を徴してみよう」

と、即座にニコライ一世の全兵士を召集して、同艦隊の實情を述べた後、

「戦闘か、降伏か、その一を擇べ」

と、嚴かに命じた。

「降伏！」

全兵士は異口同音に叫んだ。

これで、即座に降伏と決定したのである。

x

x

日本海海戦はかくて帝國海軍の大勝に歸したが、露國軍艦にして撃沈されたもの十九隻、捕獲せられたもの五隻、遁走後坐礁その他で沈没したもの二隻、マニラ、上海などの中立地帯に逃込んで武装を解除されたもの六隻、抑留されたもの二隻で、浦鹽に到達したものは巡洋艦一隻、驅逐艦二隻にすぎなかつた。

これに對して、わが海軍の損害は僅かに水雷艇三隻が沈没したのに過ぎない。

また敵の俘虜はロ提督、ネ提督以下六千六百六名、戦死者は四千三百名であつたが、我が方は僅に戦死者百十七名に過ぎなかつた。

實に、世界海戦史あつて以來の大捷である。これによつて日露戦争を決定的勝利に導き、日本帝國をして一躍世界の強國たらしめたのである。

對馬海峽を渡る人々よ、その青ずめる波の奥ふかく、水漬く屍となつて、われらの祖國を護れる
 尊き英魂の瞑れることをゆめ忘れたまふな……
 そして、敬虔なる感謝の手向けを捧ぐることを！

元寇殲滅

陣屋の一と時

弘安四年七月三十日の宵の頃である。

筑前博多の沖合、鷹島の島影に、元軍十萬を乗せた數千艘の艦船が浮かんでゐる。

元軍は機をみて一舉に博多に上陸し、先づ太宰府を攻落して、日本征服の足溜りにしようとしてゐるのだ。



元が、日本を征服しようとして、攻めて來たのは、これが二度目である。

第一回目は、文永十一年、蒙古の英雄成吉思汗の孫のクブライが、九百隻の大艦隊をもつて壹岐、對島を占領し、その年の舊曆十月の十九日、北九州へ上陸したのであつた。

その時、九州の武士は一死報國の大血戦をやつて、敵を撃破し、元軍は夜戦になるのを怖がつて船へ逃げ歸つた。そして、二十日の夜、大暴風雨となつて、敵艦の半分以上がくつがへり、かくて戦ひは終つたのだ。

◇
 鷹島に近い海岸の松原に築いた伊豫の水軍大将河野通有の假陣屋では、通有をはじめ、その子八郎通忠その他の武將が、今夜の元艦討入りについて、いろいろ作戦を練つてゐる。
 「河野氏、居らるか」

案内も乞はずに這入つてきたのは、肥後の武將竹崎季長である。

二人は、この前に元軍が來寇した文永の役で、別々に敵艦に躍りこみ、群がる敵兵を斬つて斬つて斬りまくり、共に劣らぬ手柄をたてたもので、それ以來親密な交際をしてゐた。

「こんどの敵は、文永の役に比べると何層倍も多いので、なか／＼油断はならぬ。それに、敵は文永の役で日本の武士の戦法を知つたので、夜討に對する警戒が厳しくつてのう」

季長は、文永の役の夜討のことを思ひ浮べながら言つた。

「それにつけて、拙者もいま別の戦法を考へてゐたところぢや」と通有が言つた。

「どんなに苦戦しても、絶対に敵を上陸させてはならぬ。海戦にかけては弱い蒙古軍も、陸戦にかけてはなか／＼強く、それに鬼畜にも劣る残忍な奴原だから、上陸したが最後、百姓町人や、女子供に對してどんなことをするかわからぬ」

「百姓町人といへば、武士にも劣らぬ覺悟で國を護らうとしてゐる。いざといふと矢張り武士に劣らぬ覺悟が出てくるわい」

「ところが、この前の役（文永の役）では、百姓町人が大國と戦争が始まると見て、物價は釣上げ、買占めはする。賣惜しみはするといふあんばいで、すいぶん武士を困らせたが……」

「拙者の國元の伊豫なども同じだつた。鎌倉や京都は、もつとひどかつたさうだ」

「けれども、承久の亂のやうな内輪の戦いと異つて、日本國が亡びるか生きるかといふ岐れ目の戦であることが分つてくると、一切の利害を離れて、國防に必要な物資を進んで提供するやうになつた。やはり日本人だ」

「だが、總ての國民をこゝへ引ッ張つてきたのは、時宗公のあの膽勇と、決斷と、徳の力だ。もし時宗公が居られなかつたら、元の恫喝に屈伏して、その屬國になつてゐたらう」

季長は、一國の政治や軍事を支配する一人の賢不賢によつて、國家の運命を左右するものだといふことを、しみじみ感じてゐるやうに言つた。

「貴殿の領主菊池殿も、拙者の先祖も北條氏のために追放されたのであるから、私情を以ていへば恨みがあるが、皇御國の爲めには、北條も菊池も河野もない。たとひ火の一丸となつて外敵に當れば

よいのだ」

青年血氣の若い通有の眉間に、烈しい戦闘意識が漲つてゐる。

「全くその通りだ」

語りあつて、通有と季長は互に眼前の大敵に對する決意を堅めるのであつた。

この舉國一致

この時、陣屋の一隅から、人の唸り聲が聞えて來た。

「あれは何です」季長が訊いた。

「きのふの合戦で、賊の毒矢に當つて手傷を受けた今井九郎といふ郎黨です。なか／＼の重傷で……」

「それは氣の毒、こゝに家傳の妙藥があるから、さつそく塗つてあげなさい」

季長が藥籠から出した藥を塗つてゐる頃から、急に風が吹き出して、凄い電光と共に、刻一刻と烈しくなつてきた。

幔幕は吹き飛ぶ、蠟燭の灯は消える、松原の老松がめり／＼と音を立て、折れる。

それに調子を合せるやうに、沖で異様な物音が耳をつんざくばかりに聞える。

「いよ／＼暴風だ。ありがたや、皇御國を護る神風だ。……かうして居れぬ。出陣の用意だ。」

季長は叫ぶやうに言つて、自分の陣屋へ引きあげた。

毒矢の傷に堪えかねて、呻きつゞけてゐた今井九郎は、通有にたづねた。

「殿、殿……あの音は何でござりますか」

「砂の船が、神風に吹き飛ばされて、お互にぶつかつてゐるのだ。そして沈んでゐるのだ」

「殿、私はもう助かりません。せめてこの世の見納めに、敵艦の沈むところを見たくござります。

お願いいたします」

「九郎よく言つた。見せてやるぞ」

通有は、さつそく戸板を用意させて、九郎を乗せ、それを郎黨たちに擔がせて、近所の小高い丘に運んだ。

折から、晝をも欺く電の光が海上一面を照らした。

見よ、海は大荒れに荒れ、蒙古艦隊は見る／＼散り／＼になつて、憎々しい旗をかざり、毒々し

い色を塗つた兵船は、一隻また一隻と波に吞まれてゐるのだ。

「九郎、見たか。日本には天佑と、神助と大和魂がある。日本に敵する邪な國は、悉くこの通りだ」

「畏いことござります。日本國の勝利でござります……」

九郎は、ほく笑みながら、靜かに息を引き取つた。

九州、四國、中國をはじめ、その他日本のあらゆる地域から馳けつけてゐる武士たちは、この機を逸せず、われ先にと敵艦へ斬込んだ。

殊に、かねて水軍大將として海戦に經驗の深い河野通有の一黨や、筑前、豊前、肥後、薩摩、長州、防州などの沿海諸國の武士は、木の葉のやうに吹き散らされる小舟を巧みに操つて敵艦に近づき、まじらの如く艦内に躍りこんで敵を斬り、敵を擒り、さらに火を放つた。

炎々たる焰は、猛烈な風に煽られて、まだ沈まずにゐる敵艦から敵艦へと燃えうつり、電の閃光と共に博多灣を眞晝のやうに明るく照らした。

見れば、味方の舟も、敵の石弓に撃たれて損害を受けてゐるものもあるし、敵の巨艦の沈没の渦に

巻きこまれてゐるものもある。

夜明になつて風は止んだ。

見渡す博多灣には、敵の艦船の残骸が藻屑のやうな醜い姿をさらしてゐる。

灣に臨む一帯の海岸の陣屋には、ほとんど日本國中の武將の旗が、夏の朝の涼しい潮風にひるがへつてゐる。

この旗こそ、これまで國內においてお互に敵として睨みあつた旗印だ。それがいま、渾然國を擧げて一致し、皇國に仇する外敵撃滅のために起ちあがつたのだ。

通有は、陣屋の傍にある郎黨九郎の墓前に立つて、

「九郎、靈あらば見ろ、もはや元軍の船は一隻もゐないぞ。お前の仇は打つてやつたぞ、いや〜、日本の仇を打つたのだ。これから後、いかなる敵が攻めてきても、みんなこの通りにしてやるのだ」と、生ける者に言ふが如く語るのであつた。

八幡船、英艦を破る

三百年前の日英マレー沖海戦

日本の財貨獲得へ

大東亞戦争の緒戦で、我が海軍の擧げたマレー沖海戦の大戦果は、我々國民としては忘れられないものであるが、この海戦の勝利に關聯して思ひ出されるのは、三百年の昔、我が八幡船の勇士がその頃東洋侵略に狂奔してゐたイギリス帝國主義と敢然と闘かつて、彼等の日本侵略の野望を挫いた痛快事である。

しかも、場所は奇しくも、マレー沖（シンガポールの東南ピントアン島附近）といふ因縁深いものである。

x

マルコ・ポーロは、その東洋紀行の中に、日本について左のやうなことを述べ、歐洲人の間に一大センセイションを捲起した。

——ジパング（日本）は、東海にある大きな島で、風俗は文化的である。外國の羈絆をうけず、黄金が夥しく無盡藏だ。領主の館は、屋根全體が黄金でふかれ、大廣間の天井も同じ貴金屬の延板

である。また眞珠や寶石類を多く産出する——と。

ポロは支那までは来たが、日本には来なかつたので、元王の使者として日本に来た支那人などから又聞きして書いたものであらう。

この頃、ヨーロッパ人は海外の新天地を求めて頻りに海外進出をしてゐたので、この眞しやかな記事を読むと、我こそジバングに一番乗りをして、金銀財寶を獲得しようかと考へた。コロンブスの決死の大航海も、實はジバング島へたどりつくために行はれたといはれてゐるが、土人ばかり住む荒涼たるアメリカ大陸を發見したゞけで、目的地へ着くことはできなかつた。

ところがその後、喜望峯を廻つて東洋に出てきたポルトガル船のうち、メンデス・ピントを船長とする黒船は、偶然のことから西暦一五四三年の八月、憧れのジバング即ち日本にたどり着いた。それは、彼が印度のゴアからマラツカを経て支那の寧波に赴く途中、海上で暴風雨にあつて種子島に漂着した時のことである。それが縁になつて、彼はその後鹿兒島や平戸や豊後などに來航し、領主の豪華な居城や金銀を鑲めた目覺むるばかりの調度品などを見て、これがマルコ・ポロのいふジバングだと思つた。

ピントは、このことを輪に輪をかけて、その頃すでに南洋の各地に進出してゐた歐洲人に話し、

現に自分が貿易によつて利得した金銀財寶を見せびらかしたものだから、これらの歐洲人は、

「ジバングへ！ ジバングへ！」と、志すやうになつた。

ジバングといふのは、支那人が「日本」を「リーベン」と發音するものから轉訛したのだらうといはれてゐる。

ところが、その頃倭寇と呼ばれた日本の八幡船は、あべこべに南方諸國の豊富な資材獲得を目ざして盛んに活躍してゐたので、海上において兩者の衝突は免れ得なかつた。しかも歐洲の貿易船も、半ば海賊船であつたから、衝突となると激しい戦となつて血を見ることも少くなかつた。

だが、八幡船の乗組員の大部分は祿に放れた浪人や、邊海の命知らずの船夫などであつたから、歐洲の海賊船はいつも敗北した。もしこの八幡船が南洋方面まで活躍してゐなかつたならば、日本の海岸各地は、歐洲の海賊船のために、南洋諸國が荒掠されたと同様に、無残な侵略を蒙つてゐたかもしれぬ。

ゴアのポルトガル宣教師らは、ピントから日本の話を聞くと、急に日本布教を思ひたつたが、「途中で八幡船に襲はれても構はぬといふ覺悟があれば行きなさい」と云はれて一と縮みとなつた。たゞそのうちフランシスコ・ザビエルといふ宣教師だけが、ピントの黒船に便乗して鹿兒島に

着いたぐらゐである。

元來、南洋方面に来てゐた歐洲の宣教師は、本國政府の命を受けて、思想謀略戦を行ふのであるから、彼等がその頃さかんに日本に来てゐたならば、島原の亂のやうなものをもつと早く起り、しかも大規模のものであつたかもしれない。これを防衛したのも、直接間接に八幡船の力であつた。

傲慢な停船命令

八幡船と、歐洲の海賊船とが、最も激しい戦鬪を行つたのは、慶長十年（西曆一六〇五年）十一月十八日、シンガポールの東南にあるピンタン島の沖合で、日英兩國の艦船が衝突した事である。その頃イギリスは、マラツカを根據地としてさかんに東洋侵略の計畫を進めてゐたが、すでにポルトガル、スペイン、オランダの先進國が東洋に勢力を張つてゐたので、遅ればせに東洋に進出したイギリスは、南洋方面では勢力を伸すことが困難であつた。

だから、勢ひ支那や日本に向つてその爪牙を伸ばさうと試みたが、これも日本人の操る八幡船や甲羅船に遮られて、驥足を伸ばすことができなかった。

しかし、彼等はあくまでも東洋侵略の野心を懐いて、虎視眈々その機會を窺ひ、特にその武備を強化してゐた。

ダヴィス海峡の發見者として有名な航海家、ジョン・ダヴィスを艦長とする英國軍艦タイガー號は、一六〇五年十一月初め、その根據地マラツカを出帆して、安南方面に航行してゐた。副艦長のボルチャスもまた有名な航海家であり、海戦の名將であつた。乗組員は二百人あまりで、艦上には大砲を据ゑつけ、水兵は悉く鐵砲を持つてゐた。水兵の銃は、上陸して掠奪する場合に、この新銳の武器で相手を攻撃するためである。

タイガー號は、先づシヤムのバタニに赴くため、現在の昭南島の沖合を過ぎて、ピンタン島の附近に差ししかつた頃、檣頭高く八幡大菩薩の旗を掲げた二本マストの日本船に出會つた。

その日本船は吃水が深く、何か多量の貨物を積んでゐることが判る。

「いゝ獲物ぢやありませんか。一つ物にしてはいかゞでせう」

副艦長のボルチャスが、艦長のダヴィスに云つた。

「しかし、日本人は勇敢だから、迂濶に手出しはできない」と艦長は躊躇した。

「どんなに日本人が勇敢だといつても、高の知れた百トン足らずの船です。こちらには大砲も鐵砲

もあるぢやありませんか」

「先づ彼等が何を積載してゐるか、これを一應調査した後、に函獲しても遅くはあるまい」
艦長は、あくまで慎重であつた。

「それでは、日本人を全部本艦に招待して饗應をなし、その留守になつた船を調べてみませう」
「よからう」といふことになつて、タイガー號は空砲を放つて停船を命じた。

八幡船は、空砲にしる發砲して停船を命じたことがグツと癪に觸つた。血の氣の多い若者たちは一氣に斬込まうと騒ぎたつたが、艦長の村上源内はこれを抑へて、

「まあ待て、奴等がどう出るか暫く見てゐよう」

やがて、タイガー號から一艘のボートが來て、「同じ海上生活者が、かうして海上で出會ふのも何かの因縁であるから、艦長が皆さんを招待して、日本の話や、支那海の航路などについてお伺ひしたいと云つてゐる。どうぞ皆さんお揃ひでお出で下さい」

と、いとも丁寧に述べた。

八幡船には、ポルトガル語の話せる者が居り、英人の中にもまたポルトガル語のできる者がゐたので、話は明瞭に通じた。

「それは有難い。われ／＼とても貴艦のやうな大きい軍艦を見たことがないから、見學かたがたお伺ひいたす」

村上源内が一同を代表して返答した。

英艦の使者が引きあげた後、日本船では頭目の村上を圍んで、九十人あまりの乗組員が評議をこらした。

「あんなことを言つて、われ／＼が英艦に行つてゐる間に、船ぐるみに奪ふのではないか」

「そんなことはあるまい。イギリス人はわれ／＼を非常に恐れてゐるから」

「それは自惚れといふものだ。いつたいイギリス人といふ奴は、毛唐人の中でもいちばん狡いから決して油断はならぬ」

「あべこべに、こちらからイギリスの船を奪つてやらうぢやないか。だいいち、われ／＼が乗つてゐるこの小さい船では、これだけの人数と荷物を乗せて日本まで歸ることは思ひもよらぬ。それよりもあの大きな軍艦を奪つて日本へ歸つたら、いゝ土産だ」

「それがよい／＼」

大勢はこの意見に賛成した。だが、源内は、「ジャワのジャガトラ（バタビヤ）まで行けば、日本

人町もあるし、船は何か都合してくれる。そして、シヤムから積んできた米や織物などの荷物も賣捌くことができるから、ともかくジャガトラへ行くまでは、毛唐人と争ひごとをせぬ方がよい」と、一同をたしなめた。

一同は、それもさうだと思つて、頭目の指圖に従ふことにした。彼等が、日本から乗つてきた船は、暗礁に乗りあげて破損した。それでシヤムの船を買込んで乗り移つたのがこの船である。

日暮の遅い海上も、すでに夕陽がピンタン島の山蔭に没して、八幡船もタイガー號も島の陰影をうけて、影繪のやうに水面に浮んで見えた。八幡大菩薩の長旗が南洋の涼風を浴びて爽かに翻つてゐる。そこへ約束通りにタイガー號から出迎へのボートが着いた。

みんながボートに乗らうとすると、源内は、「三人だけこの船の留守番をしろ、萬が一、イギリス人が来て不埒なことをしたら烽火を擧げろ」と命じた。

そこで、元氣のよい三人が残つて留守番をすることになった。

タイガー號のサロンには、來客九十人分と、主人側の席を設けて、見たこともない山海の珍味と酒を用意して、大きな蠟燭の灯が煌々と湧えてゐた。

日本人たちは席に着く前に、船を見せてくれと頼んだので、ダヴィスが案内して、砲塔だの、羅

針盤だの、乗組員の居室など隈なく參觀させた。これは日本人の深慮によるもので、いざといふ場合のために、艦内の様子や乗組員の人數などを知つて置かうとしたものである。

だが、ダヴィスたちは、日本人はこんな大きな立派な船を見たことは初めてであるから、さぞ驚いてゐるだらうといふ優越感をもつて、少しも警戒するところがなく、船の要所まで見せてくれた。驕れる者の心の隙である。

サロンに歸ると、正面のテーブルに源内と艦長が着席して、その前に配した幾つかの食卓には、日本人とイギリス人が入り混つて睦じく着席した。ポルトガル語のできる日本人とイギリス人は、源内と艦長に近い食卓に着いて、二人の話を通譯した。

何しろ初めての洋食であるから、日本人たちはナイフやフォークの執り方も判らず、イギリス人から教はつた使ひ方を面倒がつて、ピフテキを五本箸で引き裂きながら喰ふものもあつた。

ダヴィスは、追ひかぶせるやうに、しきりに日本の國情、特に國防や産業などについて執拗に訊いた。

(ははーん。日本侵略の準備行爲だな)

源内は、早くもそれと覺つて、いゝ加減な出鱈目を話すうちに、あくまで日本の國防が充實し

て、産業の旺盛なことを語つた。

「マルコ・ポーロの東洋旅行記によると、お國はたいさう金銀や寶石などが多いといふ話ですが、いまあなたのお話を伺つて本當といふことが判りました。そのうち一度お國へ行きたいと思ひます。その時はどうぞよろしく」

「わしらは御承知の通り御朱印船ごしゅいんせんのやうな公おんの貿易者でないから、日本へお出いになつても、おほびらに案内する譯には行かぬが、諸國諸大名のうちには、わしらを庇護してゐる者があるから、その人に紹介すればきつと便利を與へてくれます」

「有難う！ 有難う！ さア皆さんうんと召しあがつてください。酒はいくらでもあります」

源内は、ふと氣づいて、自分の食卓に近い場所にゐた部下に目配せをした。すると、部下は馴れぬ洋酒に酔つたやうな風を装つて、靜かに席をはづして舷ふなはたに出た。残してきた自分たちの船を監視するためである。

英艦降伏

海上は、いつの間にか濃い闇に蔽はれて、不氣味な波の音がごろ／＼と吼えて舷ふなはたに打寄せてゐる。それでも空は一面に澄み切つて、眞珠をちりばめたやうな大小無数の星が、手の届くかと思はれるばかりに頭上低く冴えかへつてゐる。大きい入道雲のやうなピンタン島の海濱には、漁村の灯がかすかに明滅してゐる。

監視の日本人は、何か歌ひ出したいやうな氣持になつて舷側に立つてゐると、背後にイギリスの水兵が現はれて、何かしきりに話しかけたが、彼には通じなかつた。いはすと知れた監視者の監視である。

と、突然、八幡船から炎々たる火柱があがつた。舳先へらに積んだ薬屑わらふくに火を放けた烽火のふしである。その火の光を浴びて、仲間の日本人が日本刀を振りかざしながら、イギリス人を追ひかけてゐるのがハッキリ見取れる。

監視の日本人は、いきなり背後の水兵を捕へ、高々と差上げて、黒ずんだ海へ投げこむや否や、まつしぐらにサロンに駈けこんで、「いよ／＼烽火があがつた。仲間が拔身で毛唐を追ひかけてゐるのが見えるぞ！」

と、大音聲たいおんじやうに呼ばはつた。

日本人は、拔刀して一齊に起ちあがつた。

「やつぱり、騙し打にするつもりだつたな。憎ツくき毛唐奴！」

源内は、かういふと同時に、傍らのダヴィスを、一刀のもとに斬り仆した。

「この船を奪るんぢや。毛唐を残らず叩き斬れ！」

源内が下知すると、血に飢えた日本刀が、ヒュッ／＼と風を切つて唸り出した。忽ちサロン一面が血の海となつた。用心深い副船長のボルチヤスは、萬一に備へ、武装した水兵を従へて待機してゐた。そして彼は、その豫感が事實になると、

「日本人を艦内に招待する時、帯刀させるのは危険だから、二十人を限つて帯刀を許すやうに艦長に提議したのだが、艦長は、刀は日本人の魂としてゐる、そんなことをしたら、却つて日本人に疑はれるといつて安心して過ぎたので、こんなことになつた」

と、愚痴をこぼしたが、間に合はない。

あわて、部下へ發砲を命じた。

だが、何しろ眞つ暗な船の上であるから、目標も定まらず、無茶苦茶に發砲した。闇の中に閃めく日本刀の光が唯一の目標だつた。

日本人も、ばた／＼と倒れたが、彼等は仲間の死骸を乗越え／＼敵の中へ突込んだ。イギリス人は異様な悲鳴をあげて次ぎ／＼に死んでいつた。

とても叶はぬと見た副艦長は、錨をあげて逃げ出さうとしたが、敵が艦上にある以上、逃げても同じだと思ひかへして、撃つて／＼撃ちまくつた。

日本人の方でも敵の怯むに乗じて、この機を逸せず、斬つて／＼斬りまくつた。

ボルチヤスは、このまゝ戦ひを續けてゐたら、イギリス人は全滅すると思つた。この時、南洋地方にゐる歐洲人の耳には、まるで悪魔の呪ひのやうに聞える甲羅の音が、高く低く、長く短く、海を渡つて聞えてきた。

海上に残つた八幡船の日本人が、近海に游弋してゐるかもしれない仲間の船を呼んでゐるのだ。そして、あの甲羅を吹いてゐる以上は、八幡船の貨物を掠奪に行つたイギリス人が敗戦したことを意味するものだ——と思つたので、もはやこの上は戦つても無駄だと観念した。

そこで彼は、部下に命じて銃器を投げ出させて降伏を命じた。

夜が明けてみると、味方の戦死者十九人に對してタイガー號の乗組員は、艦長以下百餘人に及んでゐることが分つた。

ポルチャスは堅く、源内の手を握つて、

「全くわれ／＼が悪かつた。そして今更の如く噂に違はず、日本人の勇敢で強いことを知つた。今後は他國の船と戦ふことがあつても、日本の船には絶対に手向はぬことを約束する」と、誠心誠意をこめて誓つた。

源内もこれを容れて、イギリス船を奪ふことを断念し、凱歌をあげながら八幡船に引きあげた。

爾來三百餘年は過ぎ、世界無比の近代設備を有する我が海軍は、再び奇しくも同方面で昔日の敵——英國艦隊を屠ることになつたのだ。

タイガー號の副艦長ポルチャスの航海記によると、この戦で、ダヴィス艦長らの戦死は認め乍らも、日本人がさん／＼負けたやうに書いてあるが、それは彼が本國へ對する面目を繕ふため、當時の水軍大將だつた伊豫の能島家のじまけに傳はる記録には、明かにイギリス軍艦の大敗が誌るされてゐる。

そしてその後ポルトガル、オランダ、スペイン人などが屢々日本侵略を企てたのに反し、イギリス人が、武力的にも、經濟的にも又宗教的にも日本侵略の野心を起し得なかつたことも、これを裏書きするものである。

しかもイギリスは、さかんに支那や印度や南洋各地を侵略してゐたにも拘らず——。

宮古港の海戦

幕艦反逆

明治維新の直後、我が國で官軍と幕軍との間に、日本最初の近代的な軍艦同士の海戦が行はれた。これは日本海軍躍進譜の二頁とも言ふべきだ。

その中で最も興味ある海戦、すなはち宮古港みやここうの血戦に就いて述べて見よう。

維新の鴻業全くなつて、明治二年三月、明治天皇は京都を御出發して東幸あらせられ、いよく東京を永久の帝都と定め給うた。

その前に、明治元年八月十九日、幕府の海軍總督榎本武揚は軍艦「開陽」、「回天」、「千代田形」、「威臨」、「神速」、「長鯨」、「三嘉保」を率ゐて、品川を脱走し、函館を占領して、蝦夷地えまいち（北海道）の南部一帯を完全にその手に收め、意氣正に天を衝かんばかりであつた。

明治天皇の御東幸後、蝦夷地を占領して、朝廷の命に従はぬこの反軍を討伐することになつた。

蝦夷地征討の官軍の陣容は、陸軍六千五百人、これを搭載する軍艦と汽船が八隻、當時としては實にさかんな出征軍であつた。

軍艦は旗艦「甲鐵」をはじめ、「春日」、「陽春」、「丁卯」の四隻、武装した運送船「飛龍」、「豊安」「戊辰」、「晨風」がこれに續いた。

旗艦「甲鐵」は、その名のごとく軍艦の中味は木造であるが、外側は鋼鐵を振つた堅艦である。その長さ廿五間三尺（約五十一メートル）幅五間一尺（約十メートル）千二百馬力、千三百五十八噸、大砲四門、當時の最新式の精銳な軍艦であつた。

この軍艦は徳川幕府が明治維新直前にアメリカに注文した軍艦であるが、使者がこれを受け取つて、明治元年横濱に廻航すると、幕府はすでに亡びてしまつてゐたので、朝廷の御所有となつたものである。後には「東艦」と稱された。

「回天」艦長甲賀源吾

明治二年三月九日、蝦夷地征討の艦船は、品川灣の波を蹴立て、威風堂々と出發した。

一方、函館にある舊幕軍の主將榎本武揚は、優勢なる蝦夷地征討軍が品川を出發して、刻々近づきつゝあるといふ知らせを聞いて驚きかつ緊張した。

それといふのは、その時までには、幕府方の軍艦は、品川を脱走して、蝦夷地に向ふ途中犬吠岬で暴風にあひ「三嘉保」、「威臨」の二隻は沈没し、そのうち、開陽が沈没して、全軍の士氣が甚だふるはなかつた際であるから、普通の手段では、到底勝味が少ないと考へたからである。

そこで彼は、部下の將士を集めて、その對策について謀つた。

謀議の結果、官軍の軍艦の中で最も有力な「甲鐵」艦に近づいて行つて、これを捕獲するのが、官軍に最大の損害をあたへるものだといふことになつた。

その準備のために、「回天」と「蟠龍」の二艦に、神木隊といふ襲撃兵を乗せ、毎日毎夜、敵艦に突入する方法や技術を練習した。

もう、これならば大丈夫だといふまでに熟練したので、この神木隊を「回天」、「蟠龍」、「高尾」の三隻の軍艦に分乗せしめて、三月二十一日函館を出發した。

「回天」艦長甲賀源吾は、年齢僅かに二十八歳であつたが、後の東郷元帥を思はしめるやうな沈毅寡言にして膽略あり、一とたび決心したことは、水火の中にも飛びこんで實行するといふ人物である。

幕府の海軍に仕へてから、海軍生活をする事七年、その間に彼は、あるひは江戸内海を測量し、

あるひはいろ／＼の離れ島に航行して、將來の對外海戦に具へた。

また、幕府が政權を奉還した時、將軍は、慌しく大阪を去り、これに従ふ者もまた、生命大事と逃げ去つた。

豪膽な甲賀源吾は、このことを聞いて、非常に慨嘆し、たつた一人で大阪城内の將軍の居室に踏み込み、重要な書類や寶器を收めて、これを大阪碇泊中の軍艦に持ちかへり、江戸に歸航して、將軍に献じたのであつた。

この一事を見ても、彼の人物を推しはかることができる。

甲賀は八隻の官艦が宮古港（岩手縣）に碇泊してゐることをたしかめたので、三月二十五日のあけ方を期して、一齊に宮古港内の敵艦にあたることを誓ひ、宮古港に向つて航行したが、その途中で「蟠龍」は濃霧で見失ひ「高尾」は機關に故障を起して、つゞくことができなくなつた。

回天の兵士たちは、はるか海上に漂つてゐる高尾をかへりみながら、

「何といふ災難つゞきだらう。さきには、暴風雨にあつて二隻を失ひ、今はまた「蟠龍」と「高尾」と相ついで故障が起るとは何といふ不幸だらう」と、がっかり力を落して溜息をついた。

甲賀艦長も、もちろんこれと同感であつたが、氣を取り直して皆を勵ましつゝ、

「成敗は天である。事にあたつて、自分の本分を盡して殞れるのは、男子の本懐ではないか。この場合になつて、何を躊躇しようぞ」

と凜として言ひ放つた。

そこで、いよ／＼全員決死の勇を振つて、互に手を握り、肱を取つて、悲壯なる死別の心を示し、亂戦の際に紛れないやう、白布を裂いて、めい／＼の肩につけた。そして船の兩舷の大砲には、實弾の上に霰弾を込め、帆柱係りのものは、手に手に擲弾を持ち、突入隊は、白刃を抜いて船側にひそみつゝ、いよいよ宮古港に向つた。

米艦に偽裝し官艦を奇襲

明治二年三月二十五日の明け方、宮古港の海面は次第に明るく浮きあがつて、ほのぼのと夜が明けて來た。

宮古港に碇泊中の八隻の官軍の軍艦は、明け方の霧の中で、淡く黒く、まだ目も覺めやらず、ぼんやりと浮んでゐた。

この時、港口から黒煙を吐いて、徐々に入港して来る一本マストに、一本煙突の軍艦があつた。そして、そのマストに高く米國の星條旗が朝風にはたくとひらめいてゐた。官軍の各艦の哨兵は、これを發見して、たゞちにこれを當直の士官に報じた。そして、既に起き出でゐた各艦の乗員たちは、上甲板に集つて、米國軍艦の投錨、その他の操業振りを見ようと、愉快に笑ひさゞめきながら眺めてゐる。

夜はすつかり明けて、輝かしい朝日が昇り、海面は青曇を敷きつめたやうに和み、海鳥は靜かに諸艦の間を群れ飛んでゐる。

しかし、米艦は碇泊するやうな模様もなく、勢よく波を蹴立て、官艦に近づき、又その甲板上に、ほとんど人影を見ないので、はじめて不審の念をいだいたが、米艦は官軍の旗艦甲鐵艦の眞近に近よると、急にマストの星條旗を下すと同時に、するすると日の丸の旗を掲げ、艦首を轉じて「甲鐵」艦の左舷中央に、猛然と丁字形に突きかゝり、たちまち數箇の彈丸は、平和なる春曉の靜けさを破つて、轟々と響きわたつた。

不意打ちを喰つた「甲鐵」艦の乗員は、驚きながら右に左に甲板上を駆け廻り、
「賊艦だ！」

「賊艦襲來だ！」

「賊艦回天だ！」

「錨を抜け！」

と口々に叫び、時を移さずこれに應戦した。しかも敵艦の舷は、「甲鐵」よりも高く、今にも「回天」の兵士が、「甲鐵」艦上に飛び込みさうなので、乗員は何れも銃、槍、刀などを取つて、敵兵の侵入に備へた。

高い「回天」の甲板からは、狙ひを定めて、擲彈を投げつけるので、その危険はいふばかりではなかつた。

その虚に乗じて、數名の敵兵は白刃を閃めかして「甲鐵」艦上に飛び移り、縦横無盡に暴れまはつたが、「甲鐵」の乗員またよく奮闘して、ことごとくこれを登した。

これを見た艦長甲賀源吾は齒ぎしりして怒り、「甲鐵」に向つて、艦首の五十六斤砲を發砲した。巨彈は「甲鐵」の甲板に炸裂し、多數の死傷者を出した。

「春日」以下七隻の官艦は、何れも錨を抜いて、「回天」を遠巻きにし、八方から霰のごとく小銃彈を猛射した。

そのため「回天」はたちまち苦戦におちいり、鬼艦長甲賀源吾も左腕を打ち抜かれ、續いて左の足に重傷を負つたが、少しもひるまず、乗員を叱咤しはげまして號令をかけてゐる時、一弾飛んで彼の頸部を貫通した。

彼はたゞ一言、

「残念！」と叫んで、官艦を見据ゑながら、悲壯な最期を遂げた。

この外、「回天」には死傷者五十四人を出し、甲板の上は、全く血潮をもつて塗りつぶされ、凄惨目もあてられず、このまゝ戦ひを續けても、到底勝ち目がなかつたので、遂に港外へ遁れ出た。

「春日」、「甲鐵」、「陽春」、「丁卯」の四艦は、全速力でこれを追つて、沖合に達したが、「回天」の速力はさらに早く、遂にこの危地からのがれてしまつた。しかし、その沖合で機關を破損した幕艦「高尾」が漂流してゐるのを發見したので、これを砲撃し始めると、「高尾」は石濱に向つて遁走するうち、淺瀬に乗り上げた。もはやこれまでの運命と覺つたのか、自ら艦内に火を放つて焼き棄て、乗員はことごとく陸上へ遁れた。

かくて「回天」は辛うじて函館に歸港した。

三等士官東郷平八郎

この時の海戦に、後の大提督東郷平八郎元帥は、三等士官として、「春日」に乗組んでゐた。元帥は、その晩年にもなほ宮古港の海戦を思出して、

「甲賀源吾は賊ながら天晴れた勇士だつた。又、官軍も不意討を喰つたのによく、奮戦して敵を撃ち拂つた。あれこそ日本武士の血戦だつたよ」と語つた。

たゞ惜むらくは、小乗的恩義にほだされて、大義親を滅する大乘的氣魄がなかつたことだ。

この宮古港海戦は、色々な意味で、重大な戦ひである。

明治維新の一寸前に、やつと海軍の形を備へるやうになつた日本が、早くも、こんな壯烈な海戦をやるやうになつたことは、やがて外敵に對する試練として非常に貴重な體驗であつた。

この海戦で、みな、「これなら、外國とだつて戦が出来るぞ。」と、思ふやうになつた。

それと同時に、

「敵は、意外な時に、豫期しない處に忽然として現はれる。戦争には油斷が大敵である」